

基礎看護実習Ⅰ 事前見学実習

(1年次)
はじめに

基礎看護実習Ⅰは、初めて行う臨地実習である。事前見学実習では、既習の知識を踏まえ現場で患者に実践することによって統合するという臨地実習の目的を果たすために、患者の置かれている状況を事前に知り、学習環境の変化にスムーズに対応することが望まれる。また、事前に実習病院および病棟に慣れることは、学習への動機付けにも成り得る。見聞した内容の意味づけを行い、基礎看護学実習Ⅰの学びに繋げていく。

1. 実習目的

実習施設の特徴や患者の置かれている状況を知る。また看護実践の見学や患者との会話体験を通して、今後の看護への学習意欲を持つ。

2. 実習目標

- 1) 講話を通し、実習病院の特徴・機構および看護の役割と魅力を知る。
- 2) 病院・病棟の見学を通し、病院・病棟の構造、特徴を知る。
- 3) 患者との会話の体験を持つ。
- 4) 患者との会話体験や看護実践の見学を通し、療養生活を送る患者の状況を知るとともに看護者の役割について考えたことを表現する。

3. 時間数と単位数 事前見学実習 7.5時間×1日 (単位数は基礎看護実習Ⅰに含まれる)

4. 実習場所 藤枝市立総合病院、焼津市立総合病院、榛原総合病院

5. 実習目標と学習内容、学習方法

実習目標1. 講話を通し、実習病院の特徴・機構および看護の役割と魅力を知る。	
学習活動	学習内容と学習方法
講話を聴き、実習病院の特徴や看護の役割を知る	・病院長による「見学病院の機構と特徴、看護学生に望むこと」、看護部長による「看護者の役割、看護の魅力、看護学生に望むこと」の講話から、学んだことを表現する。 ・これから看護を学んでいく学生として必要なことは何かを考える。
実習目標2. 病院・病棟の見学を通し、病院・病棟の構造・特徴を知る。	
実習病院・病棟の特徴を知る。	・グループに分かれて病院内の見学を行い、病院全体の構造や多職種が存在を知り、患者にとっての安全・安楽な環境、患者を取り巻く多職種の存在を知る。 ・実習病棟のオリエンテーションを受けることで病棟の特徴を知る。
実習目標3. 患者との会話の体験を持つ。	

患者の話を傾聴し、療養生活を知る。	・患者との会話では、聴く姿勢を大切にする。 ・患者の言動、話している内容をありのまま聴き取る。 ・療養生活を送る患者の状況と患者がどのような思いで生活を送っているのかを知る。
実習目標 4. 患者との会話体験や看護実践の見学を通し、療養生活を送る患者の状況を知るとともに看護者の役割において考えたことを表現する。	
体験や見学を通して学んだことを具体的に表現する	・学びの会では、自ら発言し他者の意見を聴く姿勢を大切にする。 ・患者から聴かれた言葉や患者への看護実践を見学することから患者の療養生活環境とはどういうものかを考える。 ・看護とは何か、看護者としての役割はどのようなことか、どのようなことを学べたのかを表現する。

6. 実習の動き

1) 実習期間 2021 年 6 月 15 日（火）

2) 実習計画

時 間	内 容
8:30~ 8:45	実習準備
8:45~ 9:15	講話「見学病院の機構と特徴、看護学生に望むこと」 * 病院長
9:15~10:00	講話「看護者の役割、看護の魅力、看護学生に望むこと」 * 看護部長
10:15~12:00	病院見学 * 教育担当科長（教育担当看護師長）他
12:00~13:00	昼食休憩
13:00~13:30	病棟オリエンテーション * 病棟指導者（師長・実習指導者等） 病棟の構造・特徴、患者の特徴、患者の日課、看護者の役割 等
13:30~15:00	看護実践見学 * 実習指導者他 患者との会話体験
15:15~17:00	学びの会（各病院ごと） * 実習指導者他、司会は教員

※実習施設により時間に変更になることがあります

7. 提出物 事前見学実習総括

8. 実習に関連した予定

時期	予 定	備 考
約 2 週間 前	実習ガイダンス	担当：実習調整担当教員 ※実習要項を持参する
約 10 日前	事前見学実習オリエンテーション	担当：基礎担当教員 ※実習要項を持参する

実習日の 前週	病院毎のオリエンテーション	各病院責任者より説明日時を掲示する ※実習要項を持参する ・焼津市立病院：大石教員 ・藤枝市立病院：杉渕教員 ・榛原総合病院：小林教員
実習日	実習予定参照	※自己の身だしなみが周囲に与える影響について考え、清潔感のある身だしなみ、決められた服装で臨む
実習日 翌日	事前見学実習総括の提出	グループメンバー全員揃って担当教員に 8:40 までに提出する ※時間厳守
夏休み前	提出した総括に関する指導を受ける	指導された事に対し、追加や修正をして再提出する (再提出日は各自が担当教員に確認する)

基礎看護実習 I

(1 年次)

はじめに

臨地実習では、学校で学んだ理論や技術を基礎とし、実際の現場で実践することを通して、それらを統合して学んでいくことが重要である。1 年次に学んだ知識や基礎看護技術を、臨地で具体的に表現することによって体験し、実践能力を養うことが求められる。

基礎看護実習 I は、初めて行う臨地実習である。看護の初学者としては、まず患者との関係が成立することが必要になる。患者がどのような環境の中で生活し療養生活を送っているのかを知り、援助を通して患者との関係を築くことが第一義的に必要なことである。そのためには、コミュニケーションによって人間関係を築く努力が欠かせない。患者がどのような思いで療養生活を送っているのかという関心と共に、患者を人として尊重し、ありのままに捉えることの大切さを学ぶ。また、看護技術については、患者の日常生活上の苦痛や困難からその必要性を考え、患者の安全・安楽を意識しながら、実際に援助を体験してみることを通して、人へ援助することの重要性について考えていく。そして、これらの看護の実践を通して、自分の考え方や行動について振り返り、看護者としての必要な態度について考えていく。

1. 実習目的

患者との人間関係を築き、患者の日常生活の苦痛や困難を実際に知る。また看護の実践を通して、自己の姿勢を振り返り、看護者としての必要な態度について理解する。

2. 実習目標

- 1) 人間関係を築くために、患者を尊重した関わりを持つ努力をする。
- 2) 患者の健康状態と日常生活に関する観察をする。
- 3) 健康を障害されたことにより起こる日常生活上の苦痛や困難に気づく。
- 4) 既習の基礎看護技術を用いて患者にとって安全で安楽な日常生活援助を実施する。
- 5) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

1 単位 45 時間

- ・全体オリエンテーション 3 時間 (事前見学実習 1.5 時間 基礎看護実習 I 1.5 時間)
- ・事前見学実習 7.5 時間×1 日
- ・病棟実習 7.5 時間×4 日、4.5 時間×1 日

4. 実習場所

藤枝市立総合病院、焼津市立総合病院、榛原総合病院

5. 実習目標と学習内容、学習方法

実習目標 1. 人間関係を築くために、患者を尊重した関わりを持つ努力をする。	
学習活動	学習内容・学習方法
① 自ら積極的に患者に関わる努力をする。	・自己紹介をし、自ら関わる努力をする。 ・患者の状況を考え、自ら関わろうと患者のベッドサイドに行く。 ・患者が話している内容をよく聴き、自分から関わる努力をする。 ・関わりにおいて困ったときは早めに指導者・教員に相談する。 ・自分の関わりの中で心に留まった場面、振り返りたい場面について目的を明確にしてプロセスレコードに起こして振り返る。 ・コミュニケーション技術については、指導者や他のナースの関わりを参考にして学ぶ。
② 患者の言動に関心を持ち、ありのまま捉えている。	・患者との会話では、聴く姿勢を大切にする。 ・患者の話をよく聴き、自分の思いや考えを含めず、患者の言動をありのままに捉えて表現する。
③ 患者の言動の意味を考え表現する。	・患者の言動に、患者のどのような思いが含まれているのか、その言動の意味を考え表現する。 ・必要時、表現されたことの意味を患者に確認する。
④ 患者の言動に対して自分の思いを患者に表現する。	・患者の言動に対して、状況に合わせて、自分の思いを患者に伝える。 ・伝え方としては、言葉遣いだけでなく、態度、表情、スキンシップなど、患者との関わりの中で表現する。
⑤ 患者の思いを大切にする。	・患者の意思を尊重した共感的態度（うなずき、反復）を示す。 ・患者の言動を肯定的に受け止め、患者の思いを考える。 ・自分の行動を振り返り、体験による学びから、患者の思いを大切にすることはどういうことかを考え表現する。

実習目標 2. 患者の健康状態と日常生活に関する観察をする。	
学習活動	学習内容・学習方法
① 患者の健康状態に関する観察を行う。	・事前学習として健康とは何かを理解する。 ・患者の健康状態及び心身の苦痛が何であるか観察する。 ・患者の訴えのみでなく、表情・しぐさなどの非言語的表現を大切にする。 ・カルテなどの記録からも患者の健康状態に関する情報を得る。 ・観察するための事前準備をする。観察の視点と方法を考える。
② 患者の日常生活に関する観察を行う。	・患者がどのような入院生活を送っているのかを観察する。 ・患者の入院生活と入院前の生活を知るための事前準備をする。 ・入院前の生活と入院後の生活を知ることから、どのような点で異なっ

	ているのかを考え、患者の置かれている生活を理解する。
② 事実と判断の区別をする。	・事実（情報・結果）は自分の主観は含まず、見た事、聴いた事をありのまま捉え、判断したものと区別して表現する。
⑥ 主観的情報と客観的情報を理解し、身体・心理・社会的側面の情報を収集し、分類する。	・主観的情報と客観的情報の違いを理解し、生理的、心理・社会的様式に分類して表現する。 ・主観的情報を裏付ける客観的情報、客観的情報を裏付ける主観的情報、2つの情報を関連づけて表現する。 ・日々追加されていく情報を、指導を受けながら整理していく。
⑤適切な手段で情報収集する。	・情報収集として、観察、測定、面接、記録物の手段があることを知る。 観察：看護者の感覚を通して情報を集める。 測定：測定できる情報を集める。（例：バイタルサイン・検査データ） 面接：患者や家族からの話を聴いて情報を集める。 記録物：記録（電子カルテ・外来カルテ等） ・患者の状態を知るために必要な情報収集の手段を選ぶ。

実習目標 3. 健康を障害されたことにより起こる日常生活上の苦痛や困難に気づく。

学習活動	学習内容・学習方法
①患者の療養生活を知る。	・患者がどのような日常生活を送っているのかを患者との関わりから知る。 ・患者の健康状態、日常生活は入院前と何が変わっているのか、なぜそうなっているのかを考える。 ・知ることのできた情報は、情報用紙に整理する。
③ 患者の入院前の生活について知る。	・患者や家族との会話やカルテ等から、患者の入院前の生活について知る。 ・知ることのできた情報は、情報用紙に整理する。
④ 患者の日常生活上の苦痛や困難に気づく。	・患者との直接的な関わりから得た情報を中心として、現在の健康状態を知り患者の苦痛や困難に気づき考える。 ・カルテなど記録にあったことをそのまま患者の苦痛や困難と捉えず、必ず、実際の様子を観察し、コミュニケーションを通して捉えていく。 ・患者が受けている治療や援助を知り、その根拠を考えたり、調べたりする。

実習目標 4. 既習の基礎看護技術を用いて患者にとって安全で安楽な日常生活援助を実施する。

学習活動	学習内容・学習方法
① 患者に必要な日常生活援助に気づき、用いる看護技術がわかる。	・患者の苦痛や困難から、患者にとって必要な日常生活援助は何かを考える。 ・患者にとって必要な日常生活援助を行うために、既習の看護技術の中で、どのような技術を用いることができるかを考える。

② 患者に必要な看護技術の目的がわかる。	・看護技術の一般的な目的を踏まえ、患者にとっての目的は何かを考える。
③ 必要物品の準備、後片付けを行う。	・患者の状態に合わせた準備、適切な後片付けを行う。 ・実施前に必ず物品の点検・確認を行う。実施後の消毒方法やリネンの扱いは病棟によって異なることから、オリエンテーションで示された方法で行う。不明な時は、指導者や病棟スタッフに確認する。
④ 患者にとっての安全な援助を実施するための方法を考える。	・患者の状況をふまえ、患者にとって安全な援助を実施するための留意点や具体的方法を考え表現する。 ・援助の目的、根拠、具体的な方法、留意点を用紙に詳しく書き出し、自ら指導者や教員に提示し、確認や助言を求める。
⑤ 患者にとっての安楽な援助を実施するための方法を考える。	・患者の状況をふまえ、患者にとって安楽な援助を実施するための留意点や具体的方法を考える。 ・援助の目的、根拠、具体的な方法、留意点を用紙に詳しく書き出し、自ら指導者や教員に提示し、確認や助言、協力を求める。
⑥ 患者にとっての安全を考慮しながら援助を実施する。	・実施前の患者の状態を確認し、実施可能かを判断する。 ・患者の安全を確認しながら援助を行う。 ・患者の状況に応じた安全を考え、可能な範囲で患者の希望を取り入れる。 ・患者の安全を確保できているかを考え、必要に応じて協力を求める。
⑦ 患者にとっての安楽を考慮しながら援助を実施する。	・実施前の患者の状態を確認し、実施可能かを判断する。 ・患者の安楽を確認しながら援助を行う。 ・プライバシーや羞恥心に配慮する。 ・患者の状況に応じた安楽を考え、可能な範囲で患者の希望を取り入れる。 ・患者の安楽を確保できているかを考え、必要に応じて協力を求める。
⑦ 看護援助を受けている患者の反応を観察する。	・自己の看護援助に集中せず、看護援助を受けている患者の反応を表情やしぐさ、言葉などから観察する。
⑧ 実施した援助の結果について振り返り、患者にとっての援助の必要性を考え表現する。	・患者の反応や結果を表わし、実施した援助が患者にとってどうであったのかを振り返り、どのすればよかったのかを具体的に考える表現する。 ・患者の反応や結果から実施した援助が患者にとってどうであったのかを考える。

⑨ 実施したことを報告・記録する体験を通し、記録・報告の重要性に気づく。	・患者に実施後したことを、5W1Hや主観的・客観的情報を考慮して報告する。 5W1H：・Who 誰が ・What 何を ・When いつ ・Where どこで ・Why なぜ(どんな目的で) ・How どのように ・患者に実施した看護援助をありのまま捉え、主観的情報と客観的情報の両方を含めた報告・記録を行う。 ・報告・記録する体験を通し、記録・報告の重要性を考え、表現する。
--------------------------------------	---

実習目標 5. 看護学生として自らの行動に責任を持ち、看護倫理に基づいた行動をとる。	
学習活動	学習内容・学習方法
①看護学生としてマナーやルールを意識した行動をとる。	・実習させていただく学生として、身だしなみを整え、挨拶、言葉遣い、表情立ち居振る舞いなどが、人間関係にどのような影響を与えるのかを考え行動する。 ・看護を学ぶ学生として求められているルールを守り、自己の準備を整え、決められた時間を厳守し約束を守る。 ・記録物の提出方法や提出期限を確認し、指定された期日や方法を守る。 ・やむを得ず、時間や約束を守ることができない場合は、その旨を報告し、どうするのかを考え責任のある行動をとる。
②あらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護学生として責任を持ち誠意ある行動をとる。	・看護学生として、知り得た個人情報については、守秘義務を守るよう細心の注意を払う。 ・実習中どうしたらよいのか迷う時、また何か問題が起こった時には、速やかに報告・連絡・相談を行う。 ・自己の言動を振り返り、その言動が相手にどう影響したのかを考える。 ・受け持ち患者に対する責任をもち、患者との関わりで学び得たことを大切に、表現する。 ・日々の振り返りを、次の行動につなげる。
③主体的な学習姿勢を持ち、他者と相互に高めあう努力をする。	・実習に必要な知識や技術は、事前学習したうえで実習に臨む。 ・学習したものを積み重ね、活用する。 ・質問されたことや疑問をそのままにせず、追加学習を主体的に進める。 ・他者の意見を聴く姿勢をもちながら、自分の意見を相手に伝える。
④より良い看護を行うため、保健医療福祉チームの一員として責任を持って情報を共有する。	・相手に明確に伝えるための態度や言葉使いについて考える。 ・勇気をもって、自分の考えや思いを相手に伝える努力をする。 ・申し送りやミーティングから得られた情報を捉え、わからない専門用語については自ら調べて理解する。

⑤ より良い看護を行うために自己の健康に留意し、心身ともに安定した状態で実習を継続する。	・看護者として健康管理することの重要性について考える。 ・生活習慣を整え、他者に心配や迷惑をかけないように、自己の心身の健康管理を行う。 ・看護学生として、他者への感染予防に責任を持ち、手洗いの徹底、咳嗽・マスクの着用を行う。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動をとれるよう、必要に応じて報告・連絡・相談をする。
⑥ 常に自己を振り返り、自己成長させていく努力をする。	・日々、自己の言動を振り返り、次の行動につなげる。 ・自己の言動を客観的に見つめられるような場面を選択し、プロセスレコードで振り返り表現する。 ・自己の言動を客観的に振り返り、看護者となるために必要な姿勢と、自己の行動を対比させ、自己の課題を見い出す。

6. 実習の動き

1) 実習期間 2021年10月11日～10月15日までの5日間

2) 実習計画

1日目	病棟オリエンテーション・受け持ち患者の決定・看護援助への参加
2日目	患者との関わり・看護援助への参加
3日目	患者との関わり・日常生活援助の実施
4日目	日常生活援助の実施
5日目	学びの会 (13:00 終了)

7. 看護技術の到達項目と学び方

- ・実習に向けて、既習の基礎看護技術については知識・技術の復習、練習を行う。
- ・実習では、患者にとって安全・安楽な援助を実施するために、事前に学習し、必ず指導者または教員とともに行う。技術の基本をふまえて、その患者にとっての安全・安楽を考え、具体的な計画を立てたうえで実施する。実施した看護技術については、次に活かせるように丁寧に振り返りを行う。

既習の看護技術： 環境整備・ベッドメイキング
清潔援助
移乗・移動援助
食事援助
バイタルサインの測定
看護過程展開技術（情報収集）

8. 提出物一覧

- 1) ポートフォリオ
- 2) 青ファイル： 経験録

3) 赤ファイル： 実習状況の記録

9. 事前準備について

- 1) 看護技術練習 ・ 空き時間を活用して、計画的に練習をする
- 2) 既習学習の復習 ・ 既習の学習内容を、計画的に復習する。
 ・ 学習したことは、学習ファイルに綴じ、実習先で活用できるように工夫する

既習学習の一例： *看護学概論

*基礎看護技術

*情報収取の工夫

*コミュニケーション法

*実習病棟の診療科に関する形態機能学・解剖生理学

など

- 3) 実習オリエンテーションを受ける ※事前に実習習要項を熟読しておく

- 4) 前回の記録（事前見学実習総括）を読み返し、準備しておく

基礎看護実習Ⅱ

(1年次)

はじめに

基礎看護実習Ⅱでは、基礎看護実習Ⅰでの学びを基に、対象理解に必要な意味のある情報を捉えることと看護の視点を培っていくことをねらいとしている。そのためには、日常生活に視点をおきながら、患者がどのような環境の中で療養生活を送っているのかを観察やコミュニケーションを通して知ることだけでなく、疾病が患者の生理的側面や心理・社会的側面にどのように影響しているのかを把握し、考えていく必要がある。看護援助は、看護技術の安全・安楽についての原則をふまえ、援助の必要性や根拠を明確にし、日々の振り返りを活かしてその患者に適した技術を考え、実施していくことが望まれる。

またこの実習では、一人の看護師に同行することから日常生活援助の実際を学ぶとともに、看護者として必要な役割、患者-看護師関係について考え、自己の実習につなげていく。そして、患者との積極的な関係を築くために、患者の話を傾聴することと、尊重した関わりができることを目指す。これらの過程から自らを客観的にみつめ、看護者としての自分や基礎看護実習Ⅰで気づいた自己の課題について考えを深めていく。

1. 実習目的

患者の全体像を捉え、健康を障害されたことにより起きた日常生活の状況から、患者に必要な看護を見

い出し、日常生活援助を実践する能力を身につける。また、患者との人間関係を深めながら看護者として

の自己を成長させる姿勢を養う。

2. 実習目標

- 1) 情報収集を通して、生理的側面、心理・社会的側面から患者の現在の状況を考える。
- 2) 患者に適した個別性のある日常生活援助を考え、日々の振り返りを活かし実施する。
- 3) 患者との人間関係を深め、患者を尊重して関わる。
- 4) 看護師に同行することから日常生活援助の実際、患者-看護師関係について学び、看護者として
必要な役割について考える。
- 5) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 実習時間数と単位数

2 単位 90 時間

- ・全体オリエンテーション 1.5 時間
- ・病棟実習 7.5 時間×11 日、6.0 時間×1 日

4. 実習場所

藤枝市立総合病院、焼津市立総合病院、榛原総合病院

5. 実習目標と学習内容、学習方法

実習目標 1. 情報収集を通して生理的側面、心理・社会的側面から患者の現在の状況を考える。	
学習活動	学習内容と学習方法
①患者の疾患に関する病態生理、病状、治療方針を知る。	・患者との関わり、実習指導者の説明や電子カルテからの情報、追加学習などから、病態生理、病状、治療方針を知る。 ・疾患によって障害されている機能は、本来健康な状態であればどのような機能を担っているのかを学習し、「全体像」用紙の健康障害の種類に表す。 ・患者の疾患に関する病態生理を学習し、患者の現在の症状と結びつける。また患者の治療方針について知る。受け持ち患者の病態説明を実習指導者から受け、わからない事は積極的に質問し、疾患に関する理解を深める。 ・カルテからの情報や患者との関わりから、患者の入院に至るまでの経過や現在どのような健康の段階にあるのかを知る。
②患者の生理的側面における情報収集をする。	・生理的様式 9 つのカテゴリーが、それぞれ何を意味しているのかを理解する。 ・患者の反応を見ながら意図的に情報収集をする。 ・収集した情報がどのカテゴリーを意味するものであるのかを考え、「情報の整理・分析」用紙に整理していく。 ・情報は観察、測定、面接、記録物からありのままの事実を捉える。 ・カルテからの情報だけでなく、患者と実際関わる中で得られる情報を大切にすること。 ・情報収集において、自分のペースで一方向的なコミュニケーションや関わり（質問攻めなど）をするのではなく、患者の反応をみながら、また患者の話に耳を傾ける。

③患者の心理・社会的側面における情報収集をする。	・3つの心理社会的様式の意味を理解し、患者の反応を見ながら、意図的に情報を収集する。 ・収集した情報が何を意味しているのかを考え用紙に「情報の整理・分析」に整理していく。 ・情報は言語的コミュニケーションだけでなく、非言語的コミュニケーションからも捉えていく。 ・カルテからの情報だけでなく、患者と実際関わる中で得られる情報を大切にする。 ・情報収集において、自分のペースで一方向的コミュニケーションや関わり（質問攻めなど）をするのではなく、患者の反応をみながら、また患者の話に耳を傾ける。
③ 患者の生理的側面における状況を考え表現する。	・本来の人間の身体機能や日常生活行動、また入院前の生活との比較から、現在の状態や思いを考え表現する。 ・検査値に関しては、基準値と比較して考える。
⑤患者の心理・社会的側面における状況を考え表現する。	・これまでどのような生活を送っていたのか、現在はどのような生活を送っているのかを知り、入院前の生活との比較から、現在の状態や思いを考え表現する。 ・これまでどのような役割を担っていたのかを知り、現在の状態に対して患者はどのような思いや考えを抱いているのかを知り、現在の状態や思いを考え表現する。
⑥患者の全体像を把握する。	・生理的側面、心理・社会的側面における情報を整理し、発達段階、健康障害の種類、健康の段階、ライフプロセスの特徴の4つの視点で、患者の全体像を表現する。 ・人物像を出来るだけリアルに描くことで、患者の全体像の把握に活かす。

実習目標2. 患者に適した個別性のある日常生活援助を考え、日々の振り返りを活かし実施する。

学習活動	学習内容と学習方法
① 情報のアセスメントから患者に必要な援助の目的を述べる。	・患者と日々関わる中で、患者が日常生活においてどのような事に苦痛や困難を感じどのような援助が必要であるのか、患者の現在の状態から考える。 ・その援助が何故必要なのか根拠を明らかにして表現する。 ・必要な援助の目的や根拠は、日々の実習記録に表わす。
②準備及び後片付けをする。	・患者の状態に合わせて必要な物品を考え、準備する。準備に際しては必ず点検を行い、事前にシミュレーションをしておく。後片付けを適切に行う。

学習活動	学習内容と学習方法
② 患者の状態に合わせた安全・安楽な援助を考え表現する。	・患者の状況をふまえ、患者にとって安全・安楽な援助を実施するための留意点や具体的方法を考える。 ・患者に必要と考えた援助については「実習計画表」用紙に記載する。 ・計画し実施する援助については、「援助計画記録」用紙に援助の目的・根拠を明確にし、具体的な方法を書く。その都度、自ら指導者や教員に確認、助言を求める。
③ 常に患者の安全に気を配る。	・実施前の患者の状態を確認し、実施可能かを判断する。 ・患者にとっての安全を考え、常に患者の反応をみながら援助を行う。
⑤常に患者の安楽が保たれているかを考え、実施する。	・実施前の患者の状態を確認し、実施可能かを判断する。 ・患者にとっての安楽を考え、苦痛や疲労感はないかを配慮し、常に患者の反応をみながら援助を行う。
⑦ 日々の振り返りを活かした援助を実施する。	・実施した援助が患者にとってどうであったかを振り返り、どうすればよかったのかを具体的に考え、次の援助に活かす。 ・患者に合わせた援助を目指し、日々の振り返りの積み重ねを大切にする。
⑦実施中、実施後の患者の反応を観察し、その意味を考え表現する。	・患者の反応を見ながら援助を実施し、観察した患者の反応をありのまま表し、その意味を考え表現する。 ・自分の行為が、患者にどのように影響しているのかを、反応をみながら考える。 ・実施後の振り返りを丁寧に行い、記録に表わす。
⑧実施した内容について報告する。	・実施した内容について整理し、相手に伝わるように報告する。 ・事実をありのままに、要点を絞ったわかりやすい報告を心がけて行う。 ・実施した内容によって報告するタイミングを考える。

実習目標 3. 患者との人間関係を深め、患者を尊重して関わる。	
学習活動	学習内容と学習方法
①患者の話を傾聴する。	・患者の思いを理解しようとする姿勢で傾聴し、傾聴とはどのようなことであるかを考える。 ・コミュニケーションという場だけでなく、患者との関わりすべてにおいて聴く姿勢を大事にする。
②患者個人を尊重した行動をとる。	・患者の言動をありのままに捉え、肯定的に受けとめる。 ・患者の言動の意味を考え、患者の意志を確認しながら行動する。 ・援助等の関わりにおいては、患者の意思を必ず確認し、患者と相談して行う。
③患者との人間関係を深める努力をする。	・患者の状況を考え、自ら積極的に関わり、患者のことを知ろうと努力する。 ・患者との関係を深める努力をし、関わりに迷いや不安がある時はそのままにせず

	指導者や教員に相談する。
③患者との関係において自分自身を客観的に振り返る。	・患者との自分の関わり(言動)を客観的に、また患者の立場から振り返ること で、自分 がとりやすい行動や態度、患者にとってどのような関わりであったのかに 気づ き、患者との人間関係を深めていくことにつなげる。 ・日々の記録やプロセスレコードを用いて、場面を具体的に振り返り、患者と 自分と の関わりを客観的に振り返る。 ・プロセスレコードを用いたカンファレンスを行う。
④ 患者の反応を相手の立場から考え表現する。	・患者の言葉や行動には、どのような心理が伴っているのか、何故そのような 言葉や 行動が表れているのかを、自分が患者と同じ状況であったらどうだろうかと 具体的に考える。 ・言葉という言語的な部分だけでなく、表情・しぐさなど非言語的な部分と合 わせて 考える。
実習目標 4. 看護師に同行することから日常生活援助の実際、患者 - 看護師関係について学び、看護者として必要な役割について考える。	

学習活動	学習内容と方法	
① 看護師の一日の行動を知る。	・1人の看護師と行動を共にすることで看護場面の実際を知り、看護師がどのような看護業務を行い、どのように行動しているのか、その実際を知り表現する。 (日常生活援助、診療の補助、点滴の準備・処置など)	・同行実習への目的を持ち、積極的に学ぶ姿勢で臨む。 ・疑問点は積極的に質問することで、学びにつなげる。 ・同行実習のまとめ(カンファレンス) の場で、学びをグループメンバーで共有する。
② 看護師の行動が何を意味しているかを考え表現する。	・看護師が行っている行動や援助をよく見て、その内容と目的を知る。看護師の行動が何を意味しているのか、患者にとってどのような意味があるのかを考える。看護師の行動からだけでなく、その時の患者の様子と結びつけて考え表現する。 (安全・安楽の視点、優先順位など)	
③ スタッフ間での報告・連絡・相談の重要性を理解する。	・どのような時にどのような内容の報告・連絡・相談が行われ ているのかを知り、何故・何の為に 行われているのか、その 意味を考え表現する。	
④ チームで協力することの必要性がわかる。	・看護がチームで行われていることを学び、チームの一員とし てどのように行動しているのか、その中での責任や協力につ	

	いて考え表現する。	・同行実習での学びを受け持ち患者やメンバーとの関わりに活かしていく。
⑤ 患者との関わりにおける看護師の態度を考え表現する。	・様々な看護場面での看護師の患者への関わり方や患者の反応を見て、看護師の態度について考え表現する。 ・表面的な態度を見るだけでなく、看護師はどのようなことを考えて態度として表しているのかを考える。	

実習目標 5. 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。		
学習活動	学習内容と方法	
①看護学生としてマナーやルールを意識した行動をとる。	・実習させていただく学生として、身だしなみを整え、挨拶、言葉遣い、表情立ち居振る舞いなどが、人間関係にどのような影響を与えるのかを考え行動する。 ・看護を学ぶ学生として求められているルールを守り、自己の準備を整え、決められた時間を厳守し約束を守る。 ・記録物の提出方法や提出期限を確認し、指定された期日や方法を守る。 ・やむを得ず、時間や約束を守ることができない場合は、その旨を報告し、どうするのかを考え責任のある行動をとる。	
②あらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護学生として責任を持ち誠意ある行動をとる。	・看護学生として、知り得た個人情報については、守秘義務を守るよう細心の注意を払う。 ・実習中どうしてもよいのか迷う時、また何か問題が起こった時には、速やかに報告連絡・相談を行い、患者の安全・安楽を守る。 ・自己の言動を振り返り、その言動が相手にどう影響したのかを考える。 ・日々の振り返りを、次の行動につなげる。 ・受け持ち患者に対する責任をもち、最後までやり遂げる。	
③主体的な学習姿勢を持ち、他者と相互に高めあう努力をする。	・実習に必要な知識や技術は、事前学習したうえで実習に臨む。 ・学習したものを積み重ね、活用する。 ・質問されたことや疑問をそのままにせず、追加学習を主体的に進める。 ・わからない部分は、積極的に助言を求め、受けた助言を活かしていく。 ・自分の意見を積極的に伝えるときにも、他者の意見を大切に聴き、お互いに学びを共有し合い、深めていく。 ・カンファレンスにおいては、グループで司会者を順番に決め、司会者(リーダー)役割、メンバー役割を考え、お互いに学び合う姿勢を持つ。 ・自己の言動が、患者や周囲(グループメンバー、スタッフなど)にどのように影響したのか、次にどうすればよいのかを客観的に振り返る。	

④より良い看護を行うため、保健医療福祉チームの一員として責任を持って情報を共有する。	・相手に明確に伝えるための態度や言葉使いについて考える。 ・事実に基づく自分の考えと、助言されたことを区別して、表現する。 ・申し送りやミーティングから得られた情報を捉え、わからない専門用語については自ら調べて理解する。 ・看護に必要な情報を申し送りやミーティング、カンファレンス、カルテなどから得て、援助に活かす。
⑤より良い看護を行うために自己の健康に留意し、心身ともに安定した状態で実習を継続する。	・看護者として健康管理することの重要性について考える。 ・生活習慣を整え、他者に心配や迷惑をかけないように、自己の心身の健康管理を行う。 ・看護学生として、他者への感染予防に責任を持ち、手洗いの徹底、含嗽・マスクの着用を行う。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動をとれるよう、必要に応じて報告・連絡・相談をする。
⑥常に自己を振り返り、自己成長させていく努力をする。	・「自己の課題・目標」を意識した行動をとり、日々の振り返りから、見えてきた自己の課題に対して、具体的な行動を考え、取り組む。 ・振り返りは、日々の実習記録の中で丁寧に行い、次の行動につなげる。 ・学んだ事柄を具体的に表現する。 ・看護者としての自己の課題を知識・技術・態度面から考える。その課題に今後どのように取り組んでいこうとするのかを考え表現する。

6. 実習の動き

1) 実習期間 2022年1月13日から1月28日までの12日間

2) 実習計画

1日目	病棟オリエンテーション・個人面接
2日目	同行実習
3～6日	同行実習の学びの振り返り・患者との関わり・日常生活援助の実施
7日目	学びの振り返り・援助計画・情報収集の相談
8～10日目	患者との関わり・日常生活援助の実施
11日目	個人面接・看護を語る会（ <u>15：30終了</u> ）
12日	実習のまとめ・個別指導（8：45～17：15）

7. 看護技術の到達項目と学び方

- ・既習の基礎看護技術を基に患者に適した方法で日常生活援助を行う。
- ・患者にとって安全・安楽な援助を実施するために、事前に学習し必ず指導者または教員とともに行う。
- ・患者の日常生活がどのようなになっているのかを知ることから、援助に結びつける。

技術項目	達成度	実習方法と留意点
<環境調整技術> 環境整備 ベッドメイキング シーツ交換	I I II	・患者の生活環境であるベッド・ベッド周囲の環境がどのようなになっているのかを観察 するとともに、患者にとっての安全で安楽な療養環境を整える。(実習病棟での環境整備に使用する物品の確認する) ・患者にとっての目的を考え、計画・実施する。
<食事の援助技術> 配膳・セッティング 食事介助	I II	・患者の食事摂取状況について観察し、援助が必要であるかを考える。
<排泄援助技術> 自然な排泄を促す援助	II	・患者の排泄状況について観察し、援助が必要であるかを考える。
<活動・休息援助技術> 歩行、移動介助 車椅子移送 睡眠を意識した日中の活動の援助	II II II	・患者の移動動作がどのように行われているのかを観察し、援助が必要であるのかを考 える。 ・移動動作に関しては転倒・転落の危険性、安全について十分に考える。
<清潔・衣生活援助技術> 口腔ケア 清拭 手浴・足浴	II II II	・患者の清潔・整容行動がどのように行われているのかを観察、見学を通して知る。 ・基本を基に患者の状態・状況に応じ個別に物品、方法を考える。 ・湯温の確認は確実に行う。 ・方法は具体的に(いつ・どこで・何を・何故・どのようにして)イメージしながら考え、病 棟にある学生の物品、実施場所を確認する。また空いている時間を使って練習する。
<呼吸循環を整える技術> 温罨法・冷罨法	II	・患者の呼吸、循環状態について観察し、援助が必要であるかを考える。
<症状・生体機能管理技術> バイタルサイン測定 フィジカルアセスメント	II	・患者の排泄状況について観察し、援助が必要であるかを考える。 ・必要物品の点検を必ず行う。 ・測定における手技の根拠を考えて行い、正確に測定する。 ・測定・観察したことが、正常であるのか異常であるのかを判断する。基準値から判断するのではなく、患者の普段の値を知り患者にとっての基準値を知り、患者の状態を考えていく。 ・患者の疾患について学習し、観察項目について考える。
<感染予防の技術>	I	・スタンダードプリコーション(標準予防策)に基づく手洗いを実施する。 ・使用した物品の片付けを、実習病棟のきまりに沿って行う。
<安全管理の技術>	II	・患者の機能や行動特性に合わせて療養環境を安全に整える。

<安楽確保の技術>	Ⅱ	・患者の状態に合わせて安楽に体位を保持することができる
-----------	---	-----------------------------

8. 提出物一覧

指示された通りに提出すること。

9. 事前学習・準備について

＊基礎看護実習Ⅰでの学びを振り返り、看護者としての自己を客観的に見つめることから、本実習に向けて

の自己の課題・目標を明確にする。

＊実習病棟の特徴をふまえて、診療科に関係する形態機能学・病態生理治療論、看護を学習する。

＊自己の看護技術が患者の安全・安楽につながるため、看護技術練習を積極的に行う。

看護過程実習 I

(2年次)

はじめに

看護過程実習 I では、成人期あるいは老年期にある人を対象に、看護の思考を用いて看護実践を行う。深い患者理解とアセスメントに基づいて、患者が必要としている看護を見出す。基礎看護で学んできた日常生活援助を、より患者に適した援助として根拠を持って実践していく能力を養い、看護過程実習 II へつなげていく。

1. 実習目的

患者理解を深め、患者が必要としている看護を導き出すために、情報のアセスメントを行うことで、患者に適した看護を実践する能力を養う。

2. 実習目標

- 1) 身体的・心理的・社会的側面の情報をアセスメントすることで、患者が置かれている状況と、患者に影響しているものを理解する。
- 2) アセスメントに基づいて、患者の看護上の問題を見出す。
- 3) 日々の援助を、看護の思考を用いて根拠を持って実践する。
- 4) 患者を、尊厳を持った存在として認識し、人間関係を深める努力をする。
- 5) 看護者として自己の在り様を振り返り、自己成長していけるよう努力する。
- 6) 看護学生として看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間…2 単位

オリエンテーション 1.5 時間

7.5 時間×11 日

6 時間×1 日

4. 実習場所

藤枝市立総合病院、焼津市立総合病院、榛原総合病院

5. 学習活動と学習内容、学習方法

*評価規準はルーブリック表参照

学習活動	評価規準	学習内容と学習方法
1. 患者の全体像を捉える	①患者を多角的に捉えている ②知識を活用した情報収集をしている ③日々変化する患者の情報を捉えている	・各病棟の特徴に合わせた事前学習を行う。 ・得た情報は毎日記録物やP Fに表し、情報の整理を行う。そこから患者にとって必要な情報は何か考え、適宜追加していく。 ・現在の患者の身体状態を理解するために、学習した一般的な病態生理や治療に関する知識を活用する。 ・目的に沿った情報収集を行う。また情報収集の手段も明確にする。 ・コミュニケーションスキルを活用しながら、情報収集を行う。 ・その時々々の患者の状態や患者の変化を捉えるよう意識する。 ・患者の疾病からの成り行きを考えた観察を行う。 ・毎日の記録物やP Fを使いながら、捉えた患者の全体像を「受け持ち患者を理解する」の用紙にまとめ、実習4日目に発表する。
2. 必要な看護援助を考えている	①患者に必要な看護を、根拠を明確にして考えている	・必要な看護を考えるために、既習の知識を使って患者のアセスメントを行う。 ・情報をありのままの現象として捉え、既習の知識と照らし合わせ、正常と異常を捉える。 ・身体面だけでなく、入院前の生活や役割の変化、患者の価値観なども考慮する。 ・看護の思考を基に、患者の現在の状態とその原因、関係性を「受け持ち患者を理解する」にまとめ、発表する。 ・知識を活用しながら妥当性ある成り行きを予測し、潜在的な問題についても紙面にまとめて表現する。 ・患者の問題点にばかりに注目するのではなく、正常な状態や強みも捉える。患者の強みを活かせるように考え、紙面にまとめて表現する。 ・看護介入がなされない場合はどのような成り行きとなるかも考え、紙面にまとめて表現する。
3. 必要な看護援助のための準備をする	①日々の看護援助の目的を明確にしている ②患者に合わせた日々の看護援助を考えている	・受け持ち患者の看護上の問題点とその原因については、『患者に必要な看護とその理由』用紙にまとめる。 ・日々の看護援助は、目的を明確化し具体的に計画する。 ・患者の理解に基づき、安全・安楽・自立・自律を考慮し、患者に合った看護援助を考える。 ・日々の看護援助については、実習指導者や教員に相談しアドバイスを求める。

		・日々の看護援助の計画は実習指導者や教員に提示できるように工夫する。 ・最新の患者の状態を把握するよう努め、看護援助の計画に活かす。
4. 患者に必要な 日々の看護援助 を実施する	①患者理解に基づいた安全、安楽、自立、自律を含むその人に合わせた方法で日々の看護援助を実施している ②計画した日々の看護援助を患者の反応を観察しながら実践している ③日々の看護実践の結果を振り返り、援助の影響や効果について評価し、次につなげている	・援助を実施する前には、患者の最新の状態や状況を把握する。そして援助が可能であるか判断し、教員や指導者に報告・確認する。 ・援助実施前には、事前に援助計画（目的・必要物品・方法・留意点）について教員や指導者に説明し助言を得る。 ・実施前に、計画の予定時間や状況が合わないと判断した場合は、指導者や教員に相談し、計画の変更や修正をする。 ・援助の前には、必ず患者に目的や方法を伝え、同意を得る。 ・患者に必要な援助を安全・安楽・自立・自律を意識し、患者に合わせた方法で実施する。 ・事前の計画や打ち合わせをした方法を基に実施するが、その場の患者の状況に合わせて、より良い方法に変更したり修正したりする。 ・援助中・援助後は、患者の状態が変化しやすいため、適宜必要な声かけや観察、判断をする。 ・援助後は、必ず患者の反応からその援助の影響や効果についてリフレクティブサイクルなどを用いて振り返り、実習ノートに残す。 ・援助後は、自ら指導者や教員に声をかけ、共に振り返りをする。振り返りによる学びや示唆は、その後の患者の看護実践に活かすようにする。 ・その日の体験の中で、新たな知見や発見、気づき、印象に残ったことなどがあれば、必ずその日のうちに自己の経験・看護の学びとして、実習ノートに残す。
5. 患者を常に尊重し、患者との関係性を深める努力をする	①常に患者を尊重した行動をとっている ②患者の状況や状態に合わせて関わっている	・患者を一人の人間として尊重した関わりをする。 ・常に患者に関心を向け続け、患者の思いを理解しようと傾聴するように努める。 ・患者との関わりの際には、コミュニケーション技術を活用する。 ・患者の想いや考えが、自分が理解している患者の心理に相違がないか確かめる努力をする。 ・患者のねがいや価値観を理解するように努める。 ・患者と看護師との関係のあり方について考える。 ・実習ノートを活用し、日々の患者との関わりを振り返り、次に活かす努力をする。 ・プロセスレコードを活用して自己の傾向を知り、その後の患者との関わりに活かす。

		・プロセスレコードを活用して相手の立場に立って相手の反応の意味を考え、その後の患者との関わりに活かす。
6. 看護者としての自己のあり様を振り返り、自己の姿勢を修正する努力をする	①看護者としてのあり様を振り返り、自己の傾向や課題を明確にし、より良い状態を目指して行動している	・実習前には、ゴールシートを活用し、本実習での自己の目標を明確にする。 ・日々ルーブリックを確認することで、実習の達成度や到達度を確認し、目標達成のために必要な具体的な取り組みを見いだす。 ・日々の看護体験を実習ノートに記録し、体験の意味や価値を考える。 ・実習を通して、他者の意見や助言に耳を傾け、自己成長のために自己を知ることや見つめることも大切にする。 ・実習終了後、自己の目標の達成度を評価し、看護者としての成や課題を明確にする。
7. 看護学生として、看護理論を基本とした姿勢を持ち行動する	①看護学生としての自覚を持ち責任ある行動をしている	・身だしなみ、礼儀、清潔さ、謙虚さ、挨拶、責任感など、他者から看護学生として求められる社会的なルールやマナーを意識した行動をとる。 ・病院や病棟のルールなど、その目的や意味を考えて行動する。不足があった場合には自己の言動を振り返り、自身に求められる行動について理解を深め行動修正する。 ・記録物の提出期限は守る。守れない場合は自己の行動を振り返り、行動修正する。 ・実習に必要な準備を整えて実習に臨む。 ・必要な学習を判断し、主体的に学習する。 ・実習中は自ら疑問を持ち、解決のための自己学習を深めるとともに、学習不足と感じたことに対しては自主的に追加学習する。 ・より多くの学びを得るために、困り事や疑問を他者に相談し、自らアドバイスを求める努力をする。
	②よりよい看護を行うため、看護チームと情報を共有している	・患者の健康状態をよりよくしていくために必要な情報を主体的に収集し、何を報告・連絡・相談するのか判断する。 ・内容に応じて、適時性を考慮し、適切な人に、適切な専門用語を用いて報告・連絡・相談をする。 ・看護チーム内の申し送り、カンファレンス、カルテなどから常に最新の患者や家族に関する情報を得るように努力する。 ・知り得た情報については、看護者として適切に管理する。個人情報守秘義務を遵守する。 ・共有した情報を日々の看護実践に活かす。
	③よりよい看護を行うため、他者と協力している	・予定している援助については担当看護師やメンバーと事前に調整する。 ・主体的に問題解決行動がとれるよう、様々な疑問について追求し、理解が深められるようにする。

		・自分から積極的にアドバイスを求める。 ・アドバイス内容の意味や意図を理解し、自分の考えを整理する。 ・グループメンバー内での自分の役割を意識した行動をとる。 ・グループメンバー間でコミュニケーションを積極的にとり、協力・調整をする。 ・看護の視点を広げ、学びを深めるために、積極的にグループメンバーとディスカッションをする。
	③ よりよい看護を行うために、心身ともに安定した状態で実習している	・自己の生活習慣を整え、体調管理を心がける。 ・自己の心理面についても安定を心がけ、看護学生としてのあり様を意識し、調整しながら実習を継続する。 ・看護学生として、他者への感染予防に責任を持ち、予防接種を含めた適切な行動をとる。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動をとれるよう、必要に応じて報告・連絡・相談をする。

6. 実習の動き

1) 実習期間

2021 年 7 月 5 日から 7 月 20 日までの 12 日間

2) 実習予定

月日	日	時間数	実習内容	カンファレンス
7/5(月)	1	7.5	病院挨拶・病棟挨拶 個人面接：GOAL シートを元に実習指導者、担当教員と本実習における個人目標を確認する。 病棟オリエンテーション・物品確認 受け持ち患者決定・挨拶 患者の理解を深めていく	↑ 病 態 説 明 ↓
7/6(火)	2	7.5	看護援助の見学、看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	学生間で決めた テーマカンファ レンス
7/7(水)	3	7.5	看護援助の見学、看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	
7/8(木)	4	7.5	学びの整理日 AM: 受け持ち患者のプレゼンテーション PM: 患者の理解を深める活動	AM (教員司会)
7/9(金)	5	7.5	看護援助の見学、看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	学生間で決めた テーマカンファ レンス
7/12(月)	6	7.5	看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	プロセスレコード カンファレンス (教員司会)
7/13(火)	7	7.5	看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	
7/14(水)	8	7.5	学びの整理日 AM: 受け持ち患者の看護問題プレゼンテーション PM: 患者の理解を深める活動	AM (教員司会)
7/15(木)	9	7.5	看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	
7/16(金)	10	7.5	看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	学生間で決めた テーマカンファ レンス
7/19(月)	11	7.5	看護実践 ルーブリック表を活用した面談、指導（午後）	

7/20(火)	1 2	6.0 15:30 まで	病院挨拶・病棟挨拶・患者挨拶 個人面接：実習指導者、担当教員と実習を振り返り、個人目標を評価する。今後の課題を明確にする。 学びの発表会：経験したことを具体的に示しながら、学びを共有・明確化していく。 物品確認、清掃	学びの発表会 (学生司会)
---------	-----	--------------------	---	------------------

7. 看護技術の到達項目と学び方

- ・既習の基礎看護技術を基に患者に適した方法で日常生活援助を行う。
- ・事前学習を行い、安全・安楽の視点を明確にしたうえで指導者または教員にアドバイスを受けて、必ず指導者または教員とともに行う。
- ・看護技術経験録を参照し、自己の技術の経験や到達度と実習病棟の特徴を踏まえ、習得可能な看護技術に対しては指導者・教員に連絡を取り、事前学習を行ったうえで取り組むこともよい。

8. 提出物一覧

- 1) 実習ノート
- 2) 実習ファイル (①～⑥をまとめ、インデックスを付けファイリングする)
 - ①評価表
 - ②ループリック
 - ③レポート「患者の状態や状況を理解する上で大切なこと」(A4)
 - ④「受け持ち患者を理解する」(A3)
 - ⑤『患者に必要な援助とその理由』(A3)
 - ⑥プロセスレコード (A3)
- 3) 実習中ポートフォリオ

9. 記録に関する約束事

- 1) 実習ノート
 - ・1日の行動目標、行動計画、行動の目的を明確化する。
 - ・毎日の行動、看護実践の振り返りをし、考えをまとめる。
 - ・受け持ち患者の患者を理解するためにアセスメントし、必要な看護を見出すために活用する。
 - ・日々の看護援助の計画を考える。(ルーズリーフなどを使用してもよい。その際はP Fへ挟む)
 - ・ノートにはページ数を記入する。

※毎日活用し、病棟へ持参する。

※実習時間内は、病棟で指定された場所に置き、指導時に提示する。

指導してほしい部分をすぐに提示できるよう工夫する。

ページ左	余白を作る	右ページ	余白を作る
※自由に使って考えをまとめよう！ 行動計画、アセスメント、 日々の振り返りなどを記載する。	※教員・指導者 からのコメントを記載します。 ※コメントに対しての追記、 調べたことなどを記載しましょう。		

2) ポートフォリオ

- ・事前学習、追加学習をファイリングする。
 - ・実習ノートで思考した内容と関連する学習内容は、付箋などで関連性を他者に提示できるようにしておく。
 - ・ファイリングした資料にページ数を記入する。(右下隅の余白に記入する)
- ※実習時間内は、実習ノートとともに、病棟指定の場所に置いておく。
- ※指導をうける際には実習ノートとともに提示する。

3) ルーブリック

- ・毎日午後に行う実習指導者、担当教員との指導時間までにルーブリックを見直し、学習活動の到達度を確認する。
- ・毎日、「基準」の空欄部分に、自己の達成度を振り返った日付を記載する。
- ・毎日、実習指導者または担当教員とルーブリックを使用して自己の到達度を評価し、強み、課題を明確化し、翌日からの実習計画に活かす。

4) 「受け持ち患者を理解する」(A3)

- ・患者を理解するために自由に使用する。
 - ・実習3日目午前に行うカンファレンスで、この用紙を提示しながら受け持ち患者のプレゼンテーションを行う。
- ※プレゼンテーションに使用するための資料というのではなく、活用しながら患者の理解を深める道具にする。

5) 『患者に必要な援助とその理由』(A3)

- ・患者の看護上の問題と原因、それに対する援助を記載する。
 - ・実習8日目午前に行うカンファレンスで使用する。提示しながら患者の問題とその看護を発表する。
- ※発表に使用するための資料というのではなく、患者のアセスメントを整理することに活用する。

6) レポート「患者の状態や状況を理解する上で大切なこと」(A4)

- ・実習を終え、実習目的に照らし合わせ学んだことをレポートにまとめる。
- ・実習体験に基づいてレポートする。
- ・実習最終日の翌日に、その他の実習記録物と合わせて実習ファイルに挟み提出する。

7) プロセスレコード (A3)

- ・受け持ち患者との関わりの中で、気になった場面をプロセスレコードに起こす。
- ・どのような場面なのか教員に伝えてから記入する。
- ・初対面の場面以外でとる。
- ・振り返りで分かったことをその後の患者とのやり取りに活かしていく。

8) グループメンバーの行動計画マトリックス表

- ・グループメンバーで毎日作成し、看護実践をスムーズに行うために活用する。
- ・マトリックス表は、実習終了時まで翌日の表を作成する。
- ・用紙は自由。グループ毎に工夫して作成する。

※毎日、実習指導者と担当教員に提示し、実践の指導を求める。

※終了した援助、未実施な援助、学生の所在などが他者にわかるように工夫する。

看護過程実習Ⅱ

(2年次)

はじめに

看護過程実習Ⅱでは、成人期あるいは老年期にある対象に、看護の思考を用いてその人への理解を深め、健康状態に応じた看護実践能力を養う。看護過程実習Ⅰで学んだ思考によりその人に必要な看護を明確にし、計画・実施・評価のプロセスを通して個別性のある看護実践を目指す。そして、本実習で身に付ける看護実践力を3年次の領域別実習へつなげていく。

1. 実習目的

様々な視点から患者の全体を捉え、看護の思考を用いて必要な看護を見出し、その人に合わせた看護を実践する能力を養う。

2. 実習目標

- 1) 身体的・心理的・社会的側面など多角的な視点で患者を捉え、既習の知識を活用し、その人に必要な看護を明らかにする。
- 2) 患者の理解に基づき、実施可能な看護計画を立案し、評価・修正を行い、よりよい看護実践につなげる。
- 3) 日々変化する患者の状態や状況を捉え、根拠を持って看護を実践する。
- 4) 患者を、尊厳ある存在として認識し関わり、人間関係を深める。
- 5) 看護者として自己の在り様を振り返り、自己成長していけるよう努力する。
- 6) 看護学生として看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間・・・2 単位

オリエンテーション 1.5 時間

7.5 時間×11 日

6 時間 × 1 日

4. 実習場所

藤枝市立総合病院

焼津市立総合病院

榛原総合病院

5. 学習活動と学習内容、学習方法

*評価規準はルーブリック

表参照

学習活動	評価規準	学習内容と学習方法
1. 患者の全体像を捉える	②患者を多角的に捉えている ②知識を活用した情報収集をしている ③日々変化する患者の情報を捉えている	- 各病棟の特徴に合わせた事前学習を行う。 - 得た情報は毎日記録物やP Fに表し、情報の整理を行う。そこから患者にとって必要な情報を見極め、さらに情報を深めていく。 - 現在の患者の身体状態を理解するために、学習した一般的な病態生理や治療に関する知識を活用する。 - 目的を持ち情報収集を行うまた情報収集の手段も明確にする。 - コミュニケーションスキルを活用しながら、情報収集を行う。 - その時々患者の状態を適切な方法を用いて、患者の変化を捉える。 - 患者の疾病からの成り行きを考えた観察を行う。 - 毎日の記録物やP Fを使いながら、捉えた患者の全体像を「受け持ち患者を理解する」の用紙にまとめ、実習3日目に発表する。
2. 必要な看護援助を考えている	②患者に必要な看護を、根拠を明確にして考えている	- 必要な看護を考えるために、既習の知識を使って患者のアセスメントを行う。 - 情報をありのままの現象として捉え、既習の知識と照らし合わせ、正常と異常を捉える。 - 身体面だけでなく、入院前の生活や役割の変化、患者の価値観なども考慮する。 - 看護の思考を基に、患者の現在の状態とその原因、関係性を「受け持ち患者を理解する」にまとめ、発表する。 - 知識を活用しながら妥当性ある成り行きを予測し、潜在的な問題についても紙面にまとめて表現する。 - 患者の問題点にばかりに注目するのではなく、正常な状態や強みも捉える。患者の強みを活かせるように考え、紙面にまとめて表現する。 - 看護介入がなされない場合はどのような成り行きとなるかも考え、紙面にまとめて表現する。
3. 必要な看護援助のための準備をする	①患者が到達する状態を明確にしている ②目標達成を意識し、患者の状況に	- 看護計画の立案、長期目標・短期目標については、既習の知識を活用する。 - 患者の状態をふまえ、問題だけでなく患者の強みにも着目し、長期目標・短期目標を考える。 - 長期目標と短期目標の関係性を意識しながら設定する。 - 優先順位をふまえたその人に必要な看護を考える。

	合わせた看護計画を立案している ③日々の看護援助の目的を明確にしている ④患者に合わせた日々の看護援助を考えている	・受け持ち患者に必要な看護とその根拠、長期目標、短期目標については、『その人に必要な看護とその理由』用紙にまとめる。 ・受け持ち患者において、必要と考えた看護のうち一つをとり上げ、看護計画を立案する。とり上げる看護援助については、実習指導者や教員と相談し決定する。 ・『看護計画用紙』に立案する看護援助が決定したら、速やかに用紙に立案し、実施・評価していけるようにする。 ・看護計画は『看護計画用紙』に記載し、実施結果・評価・修正内容を示す。修正・変更した日付を記入し、変化がわかるようにする。 ・期待される結果を明確にし、患者の状態や看護チームで継続的に実施することをふまえ、具体的に計画・立案する。 ・立案した看護計画については、毎日の看護実践で実施していく。 ・日々の看護援助は、目的を明確化し具体的に計画する。 ・患者の理解に基づき、安全・安楽・自立・自律を考慮し、患者に合った看護援助を考える。 ・日々の看護援助については、必要時実習指導者や教員に相談しアドバイスを求める。 ・日々の看護援助の計画は実習指導者や教員に提示できるように工夫する。 ・最新の患者の状態を把握し、看護援助の計画に活かす。
4. 患者に必要な看護援助を実施する	①患者理解に基づいた安全、安楽、自立、自律を含むその人に合わせた方法で看護援助を実施している ②計画した看護援助を患者の反応を観察しながら実践している ③看護実践の結果を振り返り、援助の影響や効果について評価し、次につなげる	・援助を実施する前には、常に患者の最新の状態や状況を把握し、援助が可能であるか判断する。 ・援助実施前には、事前に援助計画（目的・必要物品・方法・留意点）について教員や指導者に説明し助言を得る。 ・実施前に、計画の予定時間や状況が合わないと判断した場合は、指導者や教員に相談し、計画の変更や修正をする。 ・援助の前には、必ず患者に目的や方法を伝え、同意を得る。 ・患者に必要な援助を安全・安楽・自立・自律を意識し、患者に合わせた方法で実施する。 ・事前の計画や打ち合わせをした方法を基に実施するが、その場の患者の状況に合わせて、より良い方法に変更したり修正したりする。 ・援助中・援助後は、患者の状態が変化しやすいため、適宜必要な声かけや観察、判断をする。 ・援助後は、必ず患者の反応からその援助の影響や効果についてリフレクティブサイクルなどを用いて振り返り、実習ノートに残す。 ・援助後は、自ら指導者や教員に声をかけ、共に振り返りをす

	ている	る。振り返りによる学びや示唆は、その後の患者の看護実践に活かすようにする。 ・看護計画用紙に立案した援助については、看護計画用紙を用いて、患者の援助結果を評価し、結果が不十分な場合は計画を修正し、次の計画や援に活かす。 ・その日の体験の中で、新たな知見や発見、気づき、印象に残ったことなどがあれば、必ずその日のうちに自己の経験・看護の学びとして、実習ノートに残す。
5. 患者を常に尊重し、患者との関係性を築く	①常に患者を尊重した行動をとっている ②患者の状況や状態に合わせて関わっている	・患者を一人の人間として尊重した関わりをする。 ・常に患者に関心を向け続け、患者の思いを理解しようと傾聴するように努める。 ・患者との関わりの際には、コミュニケーション技術を活用する。 ・患者の思いや考えと自らが理解している患者の心理とに相違がないか確かめる努力をし、患者の理解を深める。 ・患者のねがいや価値観を理解するように努め、その理解に関わりに反映する。 ・患者と看護師との関係のあり方について考え、どのように信頼関係を形成していったらよいか考える。 ・実習ノートを活用し、日々の患者との関わりを振り返り次に活かす。
6. 看護師としての自己のあり様を振り返り、自己の姿勢を修正する努力をする	②看護師としてのあり様を振り返り、自己の傾向や課題を明確にし、より良い状態を目指して行動している	・実習前には、ゴールシートを活用し、本実習での自己の目標を明確にする。 ・日々ルーブリックを確認することで、実習の達成度や到達度を確し、目標達成のために必要な具体的な取り組みを見いだす。 ・日々の看護体験を実習ノートに記録し、体験の意味や価値を考える。 ・実習を通して、他者の意見や助言に耳を傾け、自己成長のために自己を知ることや見つめることも大切にする。 ・実習終了後、自己の目標の達成度を評価し、看護師としての成や課題を明確にする。
7. 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する	①看護学生としての自覚を持ち責任ある行動をしている	・身だしなみ、礼儀、清潔さ、謙虚さ、挨拶、責任感など、他者から看護学生として求められる社会的なルールやマナーを意識した行動をとる。 ・病院や病棟のルールなど、その目的や意味を考えて行動する。不足があった場合には自己の言動を振り返り、自身に求められる行動について理解を深め行動修正する。 ・記録物の提出期限は守る。守れない場合は自己の行動を振り返り、行動修正する。

		・実習に必要な準備を整えて実習に臨む。 ・必要な学習を判断し、主体的に学習する。 ・実習中は自ら疑問を持ち、解決のための自己学習を深めるとともに、学習不足と感じたことに対しては自主的に追加学習する。 ・より多くの学びを得るために、困り事や疑問を他者に相談し、自らアドバイスを求める努力をする。
	②よりよい看護を行う うため、看護チームと情報を共有している	・患者の健康状態をよりよくしていくために必要な情報を主体的に収集し、何を報告・連絡・相談するのか判断する。 ・内容に応じて、適時性を考慮し、適切な人に、適切な専門用語を用いて報告・連絡・相談をする。 ・看護チーム内の申し送り、カンファレンス、カルテなどから常に最新の患者や家族に関する情報を得るように努力する。 ・知り得た情報については、看護者として適切に管理する。個人情報の守秘義務を遵守する。 ・共有した情報を日々の看護実践に活かす。
	③よりよい看護を行うため、他者と協力している	・予定している援助については担当看護師やメンバーと事前に調整する。 ・主体的に問題解決行動がとれるよう、様々な疑問について追求し、理解が深められるようにする。 ・自分から積極的にアドバイスを求める。 ・アドバイス内容の意味や意図を理解し、自分の考えを整理する。 ・グループメンバー内での自分の役割を意識した行動をとる。 ・グループメンバー間でコミュニケーションを積極的にとり、協力・調整をする。 ・看護の視点を広げ、学びを深めるために、積極的にグループメンバーとディスカッションをする。
	④よりよい看護を行うために、心身ともに安定した状態で実習している	・自己の生活習慣を整え、体調管理を心がける。 ・自己の心理面についても安定を心がけ、看護学生としてのあり様を意識し、調整しながら実習を継続する。 ・看護学生として、他者への感染予防に責任を持ち、予防接種を含めた適切な行動をとる。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動をとれるよう、必要に応じて報告・連絡・相談をする。

6. 実習の動き

1) 実習期間

2022 年 2 月 4 日から 2 月 22 日までの 12 日間

2) 実習予定

月日	日	時間数	実習内容	カンファレンス
2/4 (金)	1	7.5	・病院挨拶、病棟挨拶 ・個人面接：GOAL シートをもとに実習指導者と担当教員と本実習における個人目標を確認する。 ・病棟オリエンテーション、物品確認 ・受け持ち患者決定、ご挨拶 ・患者の理解を深めていく	↑ 病 態 説 明 ↓
2/7 (月)	2	7.5	・看護援助の見学、看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（午後）	
2/8 (火)	3	7.5	学びの整理日 AM：受け持ち患者のプレゼンテーション PM：患者の理解を深める活動	AM (教員司会)
2/9 (水)	4	7.5	・看護援助の見学、看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
2/10 (木)	5	7.5	・看護援助の見学、看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（午後）	
2/14 (月)	6	7.5	学びの整理日 AM：受け持ち患者に必要な看護について発表 PM：患者の理解を深める、必要な看護を明確にする活動	AM (教員司会)
2/15 (火)	7	7.5	・看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
2/16 (水)	8	7.5	・看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（午後）	

2/17 (木)	9	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
2/18 (金)	10	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
2/21 (月)	11	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（午後）	
2/22 (火)	12	6 15：30 まで	・病院挨拶、病棟挨拶、患者様へ挨拶 ・個人面接：実習指導者と担当教員と本実習を振り返り、個人目標を評価する。今後の課題を明確化する。 ・学びの会：経験したことを具体的に示しながら、学びを共有し、明確化する。 ・物品確認、清掃	学びの会 (学生司会)

7. 看護技術の到達項目と学び方

看護技術経験録を参照し、これまでの自己の経験や到達度を把握する。本実習を行う病棟の特徴や受け持ち患者の状況をふまえ、どのような看護技術が習得でそうか考え実習指導者や教員と相談する。目的意識をもって主体的に実施していくよう努める。

8. 提出物一覧

- 1) 実習ノート
- 2) 実習ファイル（①～⑥をまとめ、インデックスを付けファイリングする）
 - ① 評価表
 - ② ループリック
 - ③ レポート「その人に合わせた看護を实践するうえで大切なこと」（A4）
 - ④ 「受け持ち患者を理解する」（A3）
 - ⑤ 「患者に必要な看護とその理由」（A3）
 - ⑥ 看護計画用紙
- 3) ポートフォリオ

9. 記録に関する約束事 ※看護過程実習Ⅰの9. 記録に関する約束事を参照のこと。

看護過程実習Ⅰと異なる約束事を以下に示す。

*実習ノート

※必要時、プロセスレコードとしても使用する。

*レポート「その人に合わせた看護を实践するうえで大切なこと」（A4）

- ・実習を終え、実習目的に照らし合わせ学んだことをレポートにまとめる。
- ・実習体験に基づいてレポートする。
- ・実習最終日の翌日に、その他の実習記録物と合わせて実習ファイルに挟み提出する。

老年看護実習 I

(2年次)

はじめに

高齢者が、健やかに心豊かに快適な老後を送るためには高齢者のそれぞれの最適健康レベルを目指して看護が提供されることが必要である。高齢者が生活する場は健康レベルに応じて様々であり、それぞれの場の特性を理解し看護の役割・機能を発揮していくことが重要となる。

介護施設サービスにおける看護は、高齢者が介護や支援を利用しながら最適健康の中でその人らしく生き生きと日常生活が送れるよう、他職種との連携をはかりながら看護の専門性を発揮し、健康管理をしていくことである。

老年看護実習 I では、介護保険制度における施設サービスを利用する高齢者との関わりを通して、老年期にある人の特徴を理解し、高齢者に起こりやすい健康障害を意識しながら、生活の質を維持・向上できるような日常生活援助について学ぶ。そして介護施設サービスにおける看護の役割を学ぶ。さらにこの実習を通して自己の老年観を深めていく。

1. 実習目的

地域で生活する又は施設で生活する高齢者の特徴を理解し、健康の維持や自立のための基本的な日常生活の援助について学ぶ。また介護保険制度における施設サービスでの介護や支援のあり方、さらに看護の役割について学ぶ。

2. 実習目標

- 1) 老年期にある人の加齢に伴う身体的・心理的・社会的特徴について理解する。
- 2) 高齢者に起こりやすい健康障害を意識しながら、健康を維持・向上するための日常生活の援助を理解する。
- 3) 介護保険制度における施設サービスの特徴を知り、看護の役割について理解する。
- 4) 高齢者の気持ちを思いやり尊重した態度で関わる。
- 5) 自己の老年観を表現する。
- 6) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間 2 単位

4. 対象学生
2 年次

5. 実習内容

※利用者：施設サービスを利用している高齢者

目標 1. 老年期にある人の加齢に伴う身体的・心理的・社会的特徴について理解する。	
学習活動	学習内容・方法
① 加齢に伴う身体的特徴をとらえる。	・ 高齢者の特性や老化の特徴を既習の知識をふまえながら観察し、具体的に一日の振り返り用紙に表す。 ・ 加齢に伴う形態機能変化を、日常生活動作から観察する。(栄養・排泄・防御・活動休息・感覚・神経について観察、記録する) ・ 老化現象だけでなく、健康障害との関連も考えながら観察する。 ・ 利用者とのコミュニケーション、援助を通して高齢者の知的機能(記憶力、理解力)、感覚機能の変化を観察する。 ・ 観察した形態機能の変化から、一人一人の違いや強みを考える。 ・ 客観的観察や生活指導員、介護士、看護師などからも情報を得る。
② 加齢に伴う心理的特徴をとらえる。	・ 言語的コミュニケーションだけでなく利用者の表情や行動を観察して、利用者の思いを考える。 ・ 利用者とのコミュニケーションをとりながら自分の身体面・社会面の変化に対する思いを傾聴し、その人の老いに対する思い、考えを知る。 ・ 日常生活の関わりから利用者の施設・在宅サービスを利用する思いを知る。 ・ 看護師、生活指導員、介護士との関わりや施設利用者同士の関わり、カルテからの情報を通して利用者の考え方、価値観、強みを知る。 ・ カンファレンスにて、身体的変化・社会的変化が心理面にどのように影響しているのか理解する。
③ 加齢に伴う社会的特徴をとらえる。	・ 日常生活やレクリエーションでの様子、スタッフや利用者同士の接し方を観察して、利用者の他者との関係の持ち方について考える。 ・ どのような人生を送り、どんな役割を担ってきた人であるのかに関わりや職員から知り、現在の社会的状況や強みについて考える。 ・ 利用者の現在の人格や態度は、今までの生活過程、職業経験、役割の変化、家庭状況、家族関係がどのように影響しているのかを理解する。 ・ デイサービスでの送迎を通して、家族との関係を知る。
④ 加齢に伴う変化は統合されて表出されることを理解する。	・ 利用者とののかかわりや観察から捉えた加齢に伴う 3 側面の特徴が、互いにどのように関連しあっているのかを考える。 ・ 担当利用者の全体像をとらえながら「その人らしさ」は何かを考える。「その人らしさ」の構成要素を全体像に表現してみる。 ・ 高齢者の個別性と加齢変化について、カンファレンスで話し合う。
目標 2. 高齢者に起こりやすい健康障害を意識しながら、健康を維持・向上するための日常生活の援助を理解する。	

学習活動	学習内容・方法
① 加齢により起こりやすい健康障害を理解する。	・ 加齢による身体的変化が日常生活に与える影響について日常生活援助や利用者との関わりを通して考える。 ・ 利用者の日常生活行動から高齢者に起こりやすい健康障害（脱水・転倒・失禁・誤嚥・感染・便秘・下痢・睡眠障害・認知症）の根拠を理解する。 ・ 介護老人福祉施設（特養）で受け持つ利用者との身体面を栄養・排泄・防御・活動・休息・感覚・神経の視点から把握し、起こりやすい健康障害を『全体像』に表記する。特養では1人の利用者を担当する。 ・ ケアプランを見せてもらい、現在の健康障害について知る。 ・ 全体像に基づき担当する利用者の生活目標を記載する。
② 健康障害を予防する援助の実際を理解する。	・ 食事、排泄、入浴など日常生活の援助の中でどのような健康障害への予防の援助が行われているのかを見学や体験から知る。身体的特徴と関連させて健康障害の予防の援助の根拠を考える。 ・ 受け持ち利用者のケアプランを確認し、何故そう計画されているか、強みをどう活かしているかを理解して自分の計画に活かす。 ・ レクリエーション、施設で行われている行事、慰問等あれば参加させていただき、利用者の反応を観察し、心身の機能の維持・向上を図る援助について学ぶ。 ・ 一つ一つの日常生活援助を振り返り、文献を活用して根拠を明確にする。「高齢者への日常生活援助の文献検討」に記録する。 ・ 明確にした日常生活援助の根拠を学内にてグループワークで他施設の学生と共有する。
③ 利用者の自立を考慮した援助方法を考える。	・ 職員の日常生活援助への関わりを見学し、利用者の意思・意欲を尊重した援助方法を学ぶ。 ・ 行われている日常生活援助に基づいて、学生が実施可能な援助に参加する。 ・ 施設で行われるレクリエーションに参加して、利用者の自立をどのように考慮しているかを考える。 ・ ディサービスの実習中にレクリエーションを計画・実施し、利用者の自立を考慮した援助方法だったか振り返る。
④ 利用者の安全・安楽に配慮した援助をする。	・ 利用者へ援助を行うときには<u>単独では行わず、必ず指導下で行う。</u> ・ 日常生活援助—機械浴・一般浴、義歯の手入れ、水分補給、車いす移動、移送、おむつ交換、歩行介助、食事介助、排泄介助・レクリエーションを経験して、指導を受けながら実際の援助をとおり、安全や安楽についての具体的な援助方法を学ぶ。 ・ 利用者との関わりで緊急を要することならば近くにいるスタッフにも声をかけて報告・相談する。 ・ ディサービスの実習中にレクリエーションを実施し、利用者の安全、安楽に配慮できていたか振り返る。

⑤ 利用者の反応を観察し、援助の結果をとらえる。	- 主観的な反応と客観的な反応を合わせてとらえる。 - 積極的に声かけやスキンシップを通して利用者の反応を捉えていく。 - できるだけ具体的に場面を振り返り、実施後の結果を援助の目的にそってとらえて記録する。 - デイサービスの実習中にレクリエーションを実施し、利用者の反応、様子から目的が達成できたか振り返り、「レクリエーション記録」に記載する。
--------------------------	---

目標 3. 介護保険制度における施設サービスの特徴を知り、看護の役割について理解する。

学習活動	学習内容・方法
① 各施設の事業概要がわかる。 通所介護事業所 介護老人福祉施設 介護老人保健施設	- 介護保険制度におけるサービスについて事前学習をする。 - 各施設のオリエンテーションの中で説明された内容（事業概要、施設の組織、施設の理念・目的、職員構成、施設の週間予定、日課、利用者の状況、安全性、構造上の特徴、ケアプラン）や質問から各施設の特徴を知る。 「各施設の特徴と看護」記録用紙に記載する。
② 通所介護事業所（デイサービス）での看護活動の実際を知り、福祉施設の看護について理解する。	- 実際の看護活動—健康管理、病状の早期発見と予防、服薬管理、日常生活の援助、家族との連絡・相談の見学や援助への参加を通して、また利用者の反応を見てデイサービスでの看護の役割を学ぶ。 - 連絡ノートや送迎時の家族と看護師のコミュニケーションの場面から家族との連絡方法やどのような連絡が行われているのかについて学ぶ。 - 看護と介護の違いを実際の場面から学ぶ。 - レクリエーションに参加し看護師の役割を学ぶ。 - デイサービスでの看護の役割について「施設の特徴と看護」記録用紙に記載する。 - 多職種と連携を図る意味、連携を図る上での看護師の役割について考える。
③ 在宅で生活する利用者にとっての、デイサービスの果たす役割を考える。	- 送迎時も含め利用者の1日の生活を観察し、サービス内容の実際を知る。 - 日常生活の援助や健康管理、レクリエーション場面での利用者の反応を観察し、利用者との関わる中でデイサービスを利用する理由や思いを知る。そして、利用者にとってデイサービスがどのような役割を果たしているのかを考え、「施設の特徴と看護」記録用紙に記載する。

④介護老人福祉施設（特別養護老人ホーム）での看護活動の実際を知り、福祉施設の看護について理解する。	・ 看護師に同行し、実際の看護活動—健康管理（機会があれば病院受診の同行）、病状の早期発見と予防、服薬管理、診療の介助、日常生活の援助、家族との連絡・相談などの見学、体験をして、また利用者の反応を見て福祉施設の看護の役割を学ぶ。 ・ 看護と介護の違いを実際の場面から学ぶ。 ・ 受け持たせて頂く利用者のケアプランを確認して、介護の方針を知る。 ・ レクリエーションに参加し看護師の役割を学ぶ。 ・ 介護老人福祉施設の看護の役割について「施設の特徴と看護」記録用紙に記載する。 ・ 多職種と連携を図る意味、連携を図る上での看護師の役割について考える。
⑤ 介護老人福祉施設で生活する利用者にとっての施設の果たす役割を考える。	・ 利用者の1日の生活を観察し、サービス内容の実際を知る。 ・ 日常生活援助やレクリエーション場面での利用者の反応を観察し、日常の関わりの中で施設サービスを受ける利用者の思いを知る。そして、利用者にとって特養がどのような役割を果たしているのか考え、「施設の特徴と看護」記録用紙に記載する。
⑥ 介護老人保健施設の看護活動の実際を見学し、老人保健施設の看護を知る。	・ 看護師に同行し、実際の看護活動（健康管理、病状の早期発見と予防、服薬管理、診療の補助、日常生活援助、施設でのリハビリテーション、家族との連絡・相談など）を見学したり援助に参加したりして、老人保健施設の看護活動を知る。 ・ 介護老人保健施設の看護の役割について「施設の特徴と看護」記録用紙に記載する
⑦ 介護老人保健施設で生活する利用者にとっての施設の果たす役割を考える。	・ 利用者の生活を観察し、サービス内容の実際を知る。 ・ 日常生活援助や診療の補助、リハビリテーションを受ける利用者の反応を見て、施設サービスを受ける利用者の思いを傾聴していく。そして、利用者にとって老人保健施設がどのような役割をはたしているのか考え、「施設の特徴と看護の役割」記録用紙に記載する。
目標4. 高齢者の気持ちを思いやり、尊重した態度で関わる。	
学習活動	学習内容・方法

① 利用者に適したコミュニケーションをはかる。	・ 老化現象や健康障害（聴力障害、視力障害、言語障害、認知症など）からくるコミュニケーション障害に考慮してコミュニケーション方法を考える。 ・ 利用者のペースに合わせ、簡潔でわかりやすい言葉や非言語的コミュニケーションを取り入れて、その人に適した方法をとる。また、利用者の話を聴く姿勢を持つ。 ・ 会話の成立や利用者との関わりに疑問を持ったり、困ったりする時は、そのままにせずに指導者にアドバイスをもらう。またはカンファレンスで話し合い、関わりに生かしていく。 ・ 職員の利用者への関わりから、利用者に適したコミュニケーション方法を学ぶ。 ・ 認知症の利用者とも積極的に関わり、その人に適したコミュニケーション方法を学ぶ。
② 利用者の人格を尊重した言動・態度をとる。	・ 利用者の今までの生活過程や生活様式、価値観を尊重し、利用者の行動に否定的な態度で接しないで、その行動をなぜ起こすのか考えながら接する。 ・ 学習活動①と兼ねて考えていき、その場面に応じた利用者の行動を尊重した適切な言動、態度をとる。 ・ 人格を尊重するとはどういうことか、コミュニケーション場面から自己の言動・態度を客観的に実習記録の中で振り返り考える。 ・ 老年期にある人を人生の先輩として敬う気持ちを態度や姿勢に表現する。

目標 5. 自己の老年観を表現する。

学習活動	学習内容・方法
① 実習体験を通して具体的に自己の老年観を表現する。	・ 概念化の練習として、実習前に老年観を書いてみる。 ・ 実習での体験を通して高齢者に対する自己が抱いているイメージやまたは変化について学生カンファレンスなどで話し合う。 ・ 実践を通じた実習での具体的なエピソードから、これまでの老年観と実習を通して変化した内容を表現する。

目標 6. 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

学習活動	学習内容・方法
① 看護学生としてマナーやルールを意識した行動をとる。	・ 実習施設での決まりを守る。 ・ 実習にふさわしい服装や身だしなみ（髪型・髪色・化粧）に心がける。身だしなみが対人関係に及ぼす影響の観点で考える。 ・ 実習施設の行き帰りの服装や行動についても見られていることを意識して整える。 ・ 利用者、施設の職員、面会者に対して明るくはっきりとした挨拶をする。はきはきとした受け答えをすることで学ぶ者としての礼儀をあらわす。 ・ 援助場面を見学させていただいたら、その感想を伝える。

② あらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護学生として責任を持ち誠意ある行動をとる。	・ 利用者の個人情報を守る行動をとる。(実習施設によっては誓約書を書く) ・ 出会うすべての方に、自ら身分や氏名を紹介して、一期一会のつもりで関わらせていただく ・ 不特定多数の高齢者と関わるため、よく知らない利用者のケアを行う可能性もある。 ・ 看護師や介護士などの職員の指導を受けながらともに行動する。 ・ 環境の範囲で可能な最大限のプライバシーを守る。
③ 主体的な学習姿勢を持ち、他者と相互に高めあう努力をする。	・ 実習目標に沿った事前学習をする。既習学習を活用する。 ・ 事前施設オリエンテーションで実習が支障なく行えるよう必要なことを確認する。 ・ 受身の姿勢では何も学べない為、体験したいこと、学習したいことは自ら申し出る。 ・ 施設職員や教員に自ら積極的にアドバイスをもらうよう行動する。 ・ アドバイスは素直に受け止め、その後に活かすよう努力する。 ・ 困ったことや悩んだことはカンファレンスでとりあげ、建設的に討議して学びを共有する。 ・ 疑問に思ったことはそのままにせず、テキストや文献を使って追加学習し、わからないことは積極的に質問・確認することで学びにつなげる。 ・ 施設において繰り返される日常の中に、毎日学ぶべきことがあると意識して、学びを探究する。 ・ 特養とデイサービスの交代時にはグループ間で情報を提供しあい、前グループが学べなかったことも学ぶよう努力する。 ・ お互いにアドバイスをしあい、アドバイス・指導されたことは共有しあい、効果的なグループダイナミクスによる行動をとっていく。 ・ お互いにメンバー、リーダーの役割を考えてメンバーシップ、リーダーシップを発揮していく。
④ よりよい看護を提供するため、保健医療福祉チームの一員として責任を持って情報を共有する。	・ 学生もサービスを提供する職員の一員であることを十分意識して、責任ある行動をとる。利用者の訴えや希望を聞いて終わることなく、職員に報告し適切な対応につなげる。 ・ 看護職、介護職それぞれの役割を認識して報告・連絡・相談をする。 ・ アドバイスをもらったら、その実施結果を相手に報告する。
⑤ より良い看護を行うために自己の健康に留意し、心身ともに安定した状態で実習を継続する。	・ 自分の体調管理を心がける。体調不良のときは利用者の安全を第1に考え、早めに報告・連絡・相談する。 ・ 感染予防の観点から手洗い、うがいを励行する。施設の基準に沿って感染予防の行動をとる。(マスク着用など) ・ 心身ともに安定した状態を維持できるように実習中の生活を整えていく。 (有熱時は実習できない施設もある) ・ 心身の健康維持に不安がある場合は、早めに教員に相談し、実習への影響を最小限にしていく。

⑥ 常に自己を振り返り、自己を成長させていく努力をする。	・ 「一日の振り返り」の中で、目標に対する評価を行うとともに、そこに至った自己のありようを振り返る。高齢者に対するかかわり方、援助の仕方、意識、思いなど丁寧に想起し、自分を知る。また、看護学生としての姿勢を振り返る。それらを踏まえて翌日の目標や行動計画を立てていく。 ・ 実習前に自己の課題を明らかにして、この実習での自己の目標をたてて臨む。 ・ 実習中は自己の目標を意識して取り組み、カンファレンス等で取り組み状況を伝えたり相談したりして解決に向かう努力をする。 ・ 実習終了時に自己の目標達成について振り返り、新たな課題を明確にする。
------------------------------	--

6. 看護技術の到達と学び方

	技術の種類 「患者」は「利用者」に読み替える	この実習での到達度	学習方法・留意点
食事	患者の状態に合わせて食事介助ができる（嚥下障害のある患者を除く）	2	看護師や介護士の介助を見学し、指導を受けてから実施する。
	患者に対して経鼻胃チューブからの流動食の注入ができる	4	看護師に同行して経鼻胃管チューブ又は胃瘻からの流動食の注入を見学する。
排泄	患者のおむつ交換ができる	2	高齢者の身体的特徴、障害などをふまえた、対象にあったおむつ交換を見学、体験する。
	失禁をしている患者のケアができる	2	おむつ交換時の保清を見学、体験し、高齢者の皮膚の特性をふまえた保清を理解する
	基本的な摘便の方法、実施上の留意点がわかる	4	看護師に同行して見学する。
活動・休息	入眠・睡眠を意識した日中の活動の援助ができる	1	施設のスケジュールに合わせてレクリエーションや日中の活動援助を実施する。
	廃用症候群予防のための自動・他動運動	2	施設で行われるレクリエーション、リハビリテーションに見学、参加して自動・他動運動の実際を学ぶ。 レクリエーションを企画・実施する。
清潔	入浴の介助ができる	2	看護師や介護士の介助に同行し、指導を受けてから実施する。
褥瘡管理	患者の褥瘡発生の危険をアセスメントできる	4	看護師の褥瘡処置に同行し、褥瘡の観察や予防方法を見学、体験する。褥瘡発生の危険をアセスメントする。
	患者の創傷の観察ができる	4	

7. 実習場所

○特別養護老人ホーム／デイサービス

- ・介護老人福祉施設 開寿園 / 通所介護事業所 康楽
- ・特別養護老人ホーム つばさ / 通所介護事業所 つばさ
- ・特別養護老人ホーム つばさ豊田 / 通所介護事業所 つばさ豊田
- ・特別養護老人ホーム 高麓 / デイサービスセンター 高草
- ・特別養護老人ホーム 亀寿の郷 / 高麓 デイサービスセンター
- ・特別養護老人ホーム 福聚荘 / デイサービスセンター 福聚
- ・特別養護老人ホームあおい荘 / あおい荘デイサービスセンター

○老人保健施設

- ・介護老人保健施設 グリーンヒルズ藤枝
- ・介護老人保健施設 ユニケア岡部
- ・介護老人保健施設 マインド
- ・介護老人保健施設 焼津ケアセンター
- ・介護老人保健施設 フォレスタ藤枝

8. 実習の動き

- 1) 実習期間 令和3年10月21日～11月9日 12日間

2) 実習計画

(デイサービス：デイ)

(特別養護老人ホーム：特養)

			1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
月日	9/	10/	10/	10/	10/	10/	10/	10/	10/	11/	11/	11/	11/	11/
		6	21	22	25	26	27	28	29	1	2	5	8	9
曜日		水	木	金	月	火	水	木	金	月	火	金	月	火
時間	1.5	2.0	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	5.0	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	6.5
A	学内オリエンテーション	臨地オリエンテーション	特養①	特養②	特養③	特養④	特養⑤	学内実習	デイ①	デイ②	デイ③	デイ④	デイ⑤	介護老人保健施設
B			デイ①	デイ②	デイ③	デイ④	デイ⑤		特養①	特養②	特養③	特養④	特養⑤	

* 1グループがA・Bの2グループに分かれて実習。

* 実習7日目にデイサービス実習と特別養護老人ホーム実習を交代する。

* 学内実習の目的（実習6日目）

- ・ 実習で見てきた高齢者への日常生活援助の場面をとらえ、その援助が何故行われるのか、何故そのような方法をとるのかを文献をもとに根拠を明確にして、日常生活援助の意義を理解する。そして、後半の実習で援助の根拠を意識してとらえていく。
- ・ 高齢者への日常生活援助の意義を他施設で実習している学生と共有していく。
- ・ 担当教員と対話を行い、施設での実習姿勢、学びの気づきを確認し、実習後半への臨み方を考える。

3) 特別養護老人ホーム・デイサービスの現地施設オリエンテーション内容

10月 6 日（水） 14時～16時

①施設の事業概要、施設の理念・目的、施設の構造、職員構成・施設の週間予定

（目標3 実習行動目標①の内容）

②実習を行う上での注意点

※実習を行う上で困らないように積極的に質問する。

※集合時間に遅れない。

※服装、髪型・髪色はオリエンテーションを受けるのにふさわしいものとする。

※グループリーダーは現地オリエンテーションが終了したら学校へ報告する。

4) 実習日時

10月 21 日(水)～11月 8 日(月) 特別養護老人ホーム・デイサービス

08:30～15:30 実習

15:30～16:00 カンファレンス

16:00～17:00 まとめ(実習記録、翌日の計画、自己学習)

10月 28 日(木) 学内実習

08:45～14:45

11月 9 日(火) 老人保健施設

08:30～15:00 各フロアでの実習

15:00～15:30 カンファレンス

15:30～16:00 まとめ

9. 主な実習方法

- ① 実習施設の一日の日程に沿って行動する。
- ② 看護師や介護職員の指導を受けながら行動する。
- ③ 朝のミーティング時に本日の実習計画を発表する。

10. カンファレンス

- ① 時間厳守で行う。
- ② 司会1名、書記1名を決めてカンファレンス用紙に記録し、カンファレンスファイルにまとめていく。教員が参加していなかった日は翌日教員に提出する。

11. 服装

- ① 学校指定のポロシャツ、ジャージ(長ズボン)、学校指定のエプロン、上靴(ナースシューズ)運動靴(デイサービスの送迎用外履き、室外での援助をしやすいもの)
*髪はきっちりとあげシニヨンで覆い、前髪はピンでとめる。
- ② 入浴介助時はTシャツ、短パン、タオル、着替えを準備する。
- ③ 昼食介助時は各自で清潔なエプロンを準備し、着用する。(左胸に氏名を縫い付ける)

12. その他

- ① 必ず指導者のもとで利用者に関わる。単独または学生同士で判断・行動しない。事故につながらないように、わからないことは必ず質問し、指示に従う。終了後は必ず報告する。
- ① 昼食は指示された場所でいただく。ごみはすべて持ち帰る。
- ② グループでリーダーを1名決める。(老人保健施設は別に)リーダーは全体へのあいさつやメンバーの通学方法、連絡事項、反省会の調整それらに関する連絡・伝達をする。
- ③ 実習中の車での通学は、駐車場の確保が出来ない限り禁止する。実習施設内は全て駐車禁止。

1 3. 提出物一覧

1) 下記の順にファイルに綴じ、インデックスをつけて提出する。

表紙

評価表

ループリック

総括表

施設の特徴と看護の役割（3種）

利用者の全体像

レクリエーション記録

高齢者への日常生活援助の文献検討

一日の振り返り

2) 実習中ポートフォリオ

※実習記録提出日は11月 10 日（水）8：40とする。時間厳守。

成人看護実習

(3年次)

はじめに

成人看護実習は、看護過程実習Ⅰ、看護過程実習Ⅱと積み重ねられてきた基礎的な能力を深め、発展させて看護援助することを目的とする。成人期は、青年期・壮年期・向老期と、人の一生の中の多くの部分を占めており、また最も役割の変化が大きい時期でもある。患者の全体像や信念・健康観を重要視しながら、身体面・心理面・社会面を統合し、成人期にある人として社会復帰を目標に、自律かつ自立できるよう援助する能力を養う。また身体機能障害のアセスメント力を高め、患者の状況に応じた看護、各発達段階を踏まえた看護、患者の家族も含めた看護の実践を行う。

1. 実習目的

社会的役割を担い、成人期にある人を統合された全体として認識し、成長・発達・適応を促し、最適健康の実現に向けた看護の実践を行う。

2. 実習目標

- 1) 多角的な視点で患者を捉え、患者に起きている健康問題を解決するために必要な看護を実践・評価する。
- 2) 日々変化する患者の状態や状況を捉え、根拠を持って看護を実践する。
- 3) 患者を、個別的・社会的存在として認識し、その人の信念・価値観を尊重した関わりをする。
- 4) 看護実践を通して、自己の成人看護観を深める。
- 5) 看護者として自己の在り様を振り返り、自己成長していけるよう努力する。
- 6) 看護学生として看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間 (2 単位) … オリエンテーション 1.5 時間

7.5 時間×11 日

6 時間×1 日

4. 実習場所

藤枝市立総合病院、焼津市立総合病院、榛原総合病院

5. 実習目標と学習内容、学習方法

学習活動	評価規準	学習内容と学習方法
1. 患者の全体像を捉える	③患者を多角的に捉えている ②知識を活用した情報収集をしている ③日々変化する患者の情報を捉えている	・各病棟の特徴に合わせた事前学習を行う。 ・得た情報は毎日記録物やP Fに表し、情報の整理を行う。そこから患者にとって必要な情報を見極め、さらに情報を深めていく。 ・現在の患者の身体状態を理解するために、学習した一般的な病態生理や治療に関する知識を活用する。 ・目的を持ち情報収集を行うまた情報収集の手段も明確にする。 ・コミュニケーションスキルを活用しながら、情報収集を行う。 ・その時々 of 患者の状態を適切な方法を用いて、患者の変化を捉える。 ・患者の疾病からの成り行きを考えた観察を行う。 ・毎日の記録物やP Fを使いながら、捉えた患者の全体像を「受け持ち患者を理解する」の用紙にまとめ、実習3日目に発表する。
2. 必要な看護援助を考えている	③患者に必要な看護を、根拠を明確にして考えている ④成人看護観について表現している	・必要な看護を考えるために、既習の知識を使って患者のアセスメントを行う。 ・情報をありのままの現象として捉え、既習の知識と照らし合わせ、正常と異常を捉える。 ・身体面だけでなく、入院前の生活や役割の変化、患者の価値観なども考慮する。 ・看護の思考を基に、患者の現在の状態とその原因、関係性を「受け持ち患者を理解する」にまとめ、発表する。 ・知識を活用しながら妥当性ある成り行きを予測し、潜在的な問題についても紙面にまとめて表現する。 ・患者の問題点にばかりに注目するのではなく、正常な状態や強みも捉える。患者の強みを活かせるように考え、紙面にまとめて表現する。 ・看護介入がなされない場合はどのような成り行きとなるかも考え、紙面にまとめて表現する。

		・受け持ち患者の状態や状況から成人期の特徴を表現し、その看護について自分の考えを最終のレポートに記述する。 ・受け持ち患者が老年期の場合は、患者の成人性に注目し、その看護について最終レポートに表現する。
3. 必要な看護援助のための準備をする	①患者が到達する状態を明確にしている ②目標達成を意識し、患者の状況に合わせた看護計画を立案している ③日々の看護援助の目的を明確にしている ④患者に合わせた日々の看護援助を考えている	・常に最新の患者の状態を把握し、看護援助の計画に活かす。 ・看護計画の立案、長期目標・短期目標については、既習の知識を活用する。 ・患者の状態をふまえ、問題だけでなく患者の強みにも着目し、長期目標・短期目標を考える。 ・長期目標と短期目標の関係性を意識しながら設定する。 ・優先順位をふまえたその人に必要な看護を考える。 ・受け持ち患者に必要な看護とその根拠、長期目標、短期目標については、『その人に必要な看護とその理由』用紙にまとめる。 ・受け持ち患者において、必要と考えた看護のうち優先順位が高い看護計画を立案する。とり上げる看護援助については、実習指導者や教員と相談し決定する。 ・『看護計画用紙』に立案する看護援助が決定したら、速やかに用紙に立案し、実施・評価していけるようにする。 ・看護計画は『看護計画用紙』に記載し、実施結果・評価・修正内容を示す。修正・変更した日付を記入し、変化がわかるようにする。 ・期待される結果を明確にし、患者の状態や看護チームで継続的に実施することをふまえ、具体的に計画・立案する。 ・立案した看護計画については、毎日の看護実践で実施していく。 ・日々の看護援助は、目的を明確化し具体的に計画する。 ・患者の理解に基づき、安全・安楽・自立・自律を考慮し、患者に合った看護援助を考える。 ・日々の看護援助については、必要時実習指導者や教員に相談しアドバイスを求める。 ・日々の看護援助の計画は実習指導者や教員に提示できるように工夫する。
4. 患者に必要な看護援助を実施する	①患者理解に基づいた安全、安楽、自立、自律を含むその人に合わせた方法で看護援助を実施している ②計画した看護援助	・援助を実施する前には、常に患者の最新の状態や状況を把握し、援助が可能であるか判断する。 ・援助実施前には、事前に援助計画（目的・必要物品・方法・留意点）について教員や指導者に説明し助言を得る。 ・実施前に、計画の予定時間や状況が合わない判断した場合は、指導者や教員に相談し、計画の変更や修正をする。 ・援助の前には、必ず患者に目的や方法を伝え、同意を得る。 ・患者に必要な援助を安全・安楽・自立・自律を意識し、患者に合わせた方法で実施する。

	助を患者の反応を観察しながら実践している ③看護実践の結果を振り返り、援助の影響や効果について評価し、次につなげている	・事前の計画や打ち合わせをした方法を基に実施するが、その場の患者の状況に合わせて、より良い方法に変更したり修正したりする。 ・援助中・援助後は、患者の状態が変化しやすいため、適宜必要な声かけや観察、判断をする。 ・援助後は、必ず患者の反応からその援助の影響や効果についてリフレクティブサイクルなどを用いて振り返り、実習ノートに残す。 ・援助後は、自ら指導者や教員に声をかけ、共に振り返りをする。振り返りによる学びや示唆は、その後の患者の看護実践に活かすようにする。 ・看護計画用紙に立案した援助については、看護計画用紙を用いて、患者の援助結果を評価し、結果が不十分な場合は計画を修正し、次の計画や援に活かす。 ・その日の体験の中で、新たな知見や発見、気づき、印象に残ったことなどがあれば、必ずその日のうちに自己の経験・看護の学びとして、実習ノートに残す。
5. 患者を常に尊重し、患者との関係性を築く	①常に患者を尊重した行動をとっている ②患者の状況や状態に合わせて関わっている	・患者を一人の人間として尊重した関わりをする。 ・常に患者に関心を向け続け、患者の思いを理解しようと傾聴するように努める。 ・患者との関わりの際には、コミュニケーション技術を活用する。 ・患者の想いや考えと自らが理解している患者の心理とに相違がないか確かめる努力をし、患者の理解を深める。 ・患者のねがいや価値観を理解するように努め、その理解に関わりに反映する。 ・患者—看護師関係を形成できるよう、意識して患者と関わる。 ・実習ノートを活用し、日々の患者との関わりを振り返り次に活かす。
6. 看護者としての自己のあり様を振り返り、自己の姿勢を修正する努力をする	③看護者としてのあり様を振り返り、自己の傾向や課題を明確にし、より良い状態を目指して行動している	・実習前には、ゴールシートを活用し、本実習での自己の目標を明確にする。 ・日々ルーブリックを確認することで、実習の達成度や到達度を確認し、目標達成のために必要な具体的な取り組みを見いだす。 ・日々の看護体験を実習ノートに記録し、体験の意味や価値を考える。 ・実習を通して、他者の意見や助言に耳を傾け、自己成長のために自己を知ることや見つめることも大切にする。 ・実習終了後、自己の目標の達成度を評価し、看護者としての成や課題を明確にする。
7.	①看護学生として	・身だしなみ、礼儀、清潔さ、謙虚さ、挨拶、責任感など、他者

看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する	の自覚を持ち責任ある行動をしている	から看護学生として求められる社会的なルールやマナーを意識した行動をとる。 ・病院や病棟のルールなど、その目的や意味を考えて行動する。不足があった場合には自己の言動を振り返り、自身に求められる行動について理解を深め行動修正する。 ・記録物の提出期限は守る。守れない場合は自己の行動を振り返り、行動修正する。 ・実習に必要な準備を整えて実習に臨む。 ・必要な学習を判断し、主体的に学習する。 ・実習中は自ら疑問を持ち、解決のための自己学習を深めるとともに、学習不足と感じたことに対しては自主的に追加学習する。 ・より多くの学びを得るために、困り事や疑問を他者に相談し、自らアドバイスを求める努力をする。
	②よりよい看護を行うため、看護チームと情報を共有している	・患者の健康状態をよりよくしていくために必要な情報を主体的に収集し、何を報告・連絡・相談するのか判断する。 ・内容に応じて、適時性を考慮し、適切な人に、適切な専門用語を用いて報告・連絡・相談をする。 ・看護チーム内の申し送り、カンファレンス、カルテなどから常に最新の患者や家族に関する情報を得るように努力する。 ・知り得た情報については、看護者として適切に管理する。個人情報の守秘義務を遵守する。 ・共有した情報を日々の看護実践に活かす。
	③よりよい看護を行うため、他者と協力している	・予定している援助については担当看護師やメンバーと事前に調整する。 ・主体的に問題解決行動がとれるよう、様々な疑問について追求し、理解が深められるようにする。 ・自分から積極的にアドバイスを求める。 ・アドバイス内容の意味や意図を理解し、自分の考えを整理する。 ・グループメンバー内での自分の役割を意識した行動をとる。 ・グループメンバー間でコミュニケーションを積極的にとり、協力・調整をする。 ・看護の視点を広げ、学びを深めるために、積極的にグループメンバーとディスカッションをする。
	④よりよい看護を行うために、心身ともに安定した状態で実習している	・自己の生活習慣を整え、体調管理を心がける。 ・自己の心理面についても安定を心がけ、看護学生としてのあり様を意識し、調整しながら実習を継続する。 ・看護学生として、他者への感染予防に責任を持ち、予防接種を含めた適切な行動をとる。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動をとれるよう、必要に応

		じて報告・連絡・相談をする。
--	--	----------------

6. 実習の動き

1) 実習期間

12 日間（実習カレンダー参照）

2) 実習予定

日	時間数	実習内容	カンファレンス
1	7.5	・病院挨拶、病棟挨拶 ・個人面接：GOAL シートをもとに実習指導者と担当教員と本実習における個人目標を確認する。 ・病棟オリエンテーション、物品確認 ・受け持ち患者決定、ご挨拶 ・患者の理解を深めていく	↑ 病 態 説 明 ↓
2	7.5	・看護援助の見学、看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（午後）	
3	7.5	学びの整理日 AM：受け持ち患者のプレゼンテーション PM：患者の理解を深める活動	AM (教員司会)
4	7.5	・看護援助の見学、看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
5	7.5	・看護援助の見学、看護実践 ・ループリック表を活用した面談、指導（午後）	
6	7.5	学びの整理日 AM：受け持ち患者に必要な看護について発表 PM：患者の理解を深める、必要な看護を明確にする活動	AM (教員司会)
7	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
8	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（午後）	
9	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
10	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（15：30～）	学生テーマ
11	7.5	・看護実践 ・ループリックを活用した面談、指導（午後）	

12	6 15:30 まで	・病院挨拶、病棟挨拶、患者様へ挨拶 ・個人面接：実習指導者と担当教員と本実習を振り返り、個人目標を評価する。今後の課題を明確化する。 ・学びの会：経験したことを具体的に示しながら、学びを共有し、明確化する。 ・物品確認、清掃	学びの会 (学生司会)
----	------------------	---	----------------

7. 看護技術の到達項目と学び方

看護技術経験録を参照し、これまでの自己の経験や到達度を把握する。本実習を行う病棟の特徴や受け持ち患者の状況をふまえ、どのような看護技術が習得でそうか考え実習指導者や教員と相談する。目的意識をもって主体的に実施していくよう努める。

8. 提出物一覧

- 1) 実習ノート
- 2) 実習ファイル（①～⑥をまとめ、インデックスを付けファイリングする）
 - ① 評価表
 - ② ルーブリック
 - ③ レポート「その人に合わせた看護を实践するうえで大切なこと」（A 4）
 - ④ 「受け持ち患者を理解する」（A 3）
 - ⑤ 「患者に必要な看護とその理由」（A 3）
 - ⑥ 看護計画用紙
- 3) ポートフォリオ

9. 記録に関する約束事 ※看護過程実習 I の 9. 記録に関する約束事を参照のこと。

看護過程実習 I の 9. と異なる約束事を以下に示す。

*実習ノート

※必要時、プロセスレコードとしても使用する。

*レポート「その人に合わせた看護を实践するうえで大切なこと」（A 4）

- ・成人看護観を含めて記述する。

老年看護実習Ⅱ

(3年次)

はじめに

老年期に生きる人は、ライフサイクルの最終段階にあり、人生を統合させる時期である。老年期は老化に伴って諸機能が低下し心身ともに衰えていくという特徴があり、長年の生活体験や人生経験により、身体的・心理的・社会的に個人差が大きい。

老年看護学においては、高齢者の特徴、老化や加齢現象により起こる高齢者特有の健康問題をふまえて老化現象を科学的に捉え、円熟された生活者としての個々の生活過程を理解・尊重して、その人らしい生活ができるように支援することが求められている。この実習では老年期の特徴をふまえて高齢者が自立自律した生活ができるようになるための看護を習得する。

1. 実習目的

健康障害が急性の段階で医療を受ける高齢者や家族への看護の実際を学ぶ。高齢者が健康上の問題を解決・予防しながら、一人の生活者として自立した生活ができるよう看護する基礎的能力を養う。また、高齢者の長年培ってきた生活を尊重する看護の精神を養う。

2. 実習目標

- 1) 高齢者のそれぞれの健康段階と起こりやすい健康問題について理解する。
- 2) 老年期の生活が維持向上できるような看護の方法を、日常生活援助を通して理解する。
- 3) 高齢者の心情、状況、気持ちを思いやり、尊重した態度で関わる。
- 4) 高齢者の看護実践の場面を振り返り、自己の老年看護観を持つ。
- 5) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間 2 単位

4. 実習場所

藤枝市立総合病院 焼津市立総合病院 榛原総合病院

5. 対象学生

3 年次

6. 実習目標内容および実習方法

学習活動	評価規準	学習内容と学習方法
1. 患者の全体像を捉える	④患者を多角的に捉えている ②知識を活用した情報収集をしている ③日々変化する患者の情報を捉えている	・各病棟の特徴、<u>高齢者の特徴</u>に合わせた事前学習を行う。 ・得た情報は毎日記録物やP Fに表し、情報の整理を行う。そこから患者にとって必要な情報を見極め、さらに情報を深めていく。 ・現在の患者の身体状態を理解するために、学習した一般的な病態生理や治療、<u>高齢者に起こりやすい健康障害</u>に関する知識を活用する。 ・目的を持ち情報収集を行うまた情報収集の手段も明確にする。 ・コミュニケーションスキルを活用しながら、情報収集を行う。 ・その時々患者の状態を適切な方法を用いて、患者の変化を捉える。 ・患者の疾病からの成り行きを考えた観察を行う。 ・毎日の記録物やP Fを使いながら、捉えた患者の全体像を『全体像』用紙にまとめ発表する。
2. 必要な看護援助を考えている	⑤患者に必要な看護を、根拠を明確にして考えている	・必要な看護を考えるために、既習の知識を使って患者のアセスメントを行う。 ・情報をありのままの現象として捉え、既習の知識と照らし合わせ、<u>その人にとっての正常と異常</u>を捉える。 ・身体面だけでなく、入院前の生活や役割の変化、患者・<u>家族</u>の価値観、<u>ねがい</u>なども考慮する。 ・看護の思考を基に、患者の現在の状態とその原因、関係性を『全体像』用紙にまとめ、発表する。 ・知識を活用しながら妥当性ある成り行きを予測し、潜在的な問題についても紙面にまとめて表現する。 ・<u>老化に伴う機能低下や治療処置に伴う二次的障害のリスクを捉え、</u> <u>予防的視点をもって看護の方向性を考える。</u> ・患者の問題点にばかりに注目するのではなく、正常な状態や強みも捉える。患者の強みを活かせるように考え、紙面にまとめて表現する。 ・看護介入がなされない場合はどのような成り行きとなるかも考え、紙面にまとめて表現する。
3. 必要な看護援助のための準備をする	①患者が到達する状態を明確にしている	・看護計画の立案、長期目標・短期目標については、既習の知識を活用する。 ・患者の状態をふまえ、問題だけでなく患者の<u>ねがい</u>、強みにも着目し、長期目標・短期目標を考える。

	②目標達成を意識し、患者の状況に合わせた看護計画を立案している ③日々の看護援助の目的を明確にしている ④患者に合わせた日々の看護援助を考えている	・長期目標と短期目標の関係性を意識しながら設定する。 ・優先順位をふまえたその人に必要な看護を考える。 ・受け持ち患者の看護上の問題と優先順位を決定した理由については、『看護上の問題（看護の焦点）一覧』にまとめる。 ・受け持ち患者において、必要と考えた看護のうち一つをとり上げ、看護計画を立案する。とり上げる看護援助については、実習指導者や教員と相談し決定する。（優先順位1番のものでなくてもよい） ・『看護計画用紙』に立案する看護援助が決定したら、速やかに用紙に立案し、実施・評価していけるようにする。 ・看護計画は『看護計画用紙』に記載し、実施結果・評価・修正内容を示す。修正・変更した日付を記入し、変化がわかるようにする。 ・期待される結果を明確にし、患者の状態や看護チームで継続的に実施することをふまえ、具体的に計画・立案する。 ・<u>高齢者への看護に必要な4つの視点で計画を検討する。</u> ・立案した看護計画については、毎日の看護実践で実施していく。 ・日々の看護援助は、目的を明確化し具体的に計画する。 ・患者の理解に基づき、安全・安楽・自立・自律を考慮し、患者に合った看護援助を考える。 ・日々の看護援助については、必要時実習指導者や教員に相談しアドバイスを求める。 ・日々の看護援助の計画は実習指導者や教員に提示できるように工夫する。 ・最新の患者の状態を把握し、看護援助の計画に活かす。
4. 患者に必要な看護援助を実施する	①患者理解に基づいた安全、安楽、自立、自律を含むその人に合わせた方法で看護援助を実施している ②計画した看護援助を患者の反応を観察しながら実践している ③看護実践の結果を振り返り、援	・援助を実施する前には、常に患者の最新の状態や状況を把握し、援助が可能であるか判断する。 ・援助実施前には、事前に援助計画（目的・必要物品・方法・留意点）について教員や指導者に説明し助言を得る。 ・実施前に、計画の予定時間や状況が合わない判断した場合は、指導者や教員に相談し、計画の変更や修正をする。 ・援助の前には、必ず患者に目的や方法を伝え、同意を得る。 ・患者に必要な援助を安全・安楽・<u>自立と依存</u>・自律を意識し、患者に合わせた方法で実施する。 ・事前の計画や打ち合わせをした方法を基に実施するが、その場の患者の状況に合わせて、より良い方法に変更したり修正したりする。 ・援助中・援助後は、患者の状態が変化しやすいため、適宜必要な声かけや観察、判断をする。 ・援助後は、必ず患者の反応からその援助の影響や効果について

	助の影響や効果について評価し、次につなげている	振り返り、実習ノートに残す。 ・援助後は、自ら指導者や教員に声をかけ、共に振り返りをする。振り返りによる学びや示唆は、その後の患者の看護実践に活かすようにする。 ・看護計画用紙に立案した援助については、看護計画用紙を用いて、患者の援助結果を評価し、結果が不十分な場合は計画を修正し、次の計画や援助に活かす。 ・その日の体験の中で、新たな知見や発見、気づき、印象に残ったことなどがあれば、必ずその日のうちに自己の経験・看護の学びとして、実習ノートに残す。
5. 患者を常に尊重し、患者との関係性を築く	①常に患者を尊重した行動をとっている ②患者の状況や状態に合わせて関わっている	・患者を一人の人間として尊重した関わりをする。 ・<u>高齢者の権利が守られるよう支援する。</u> ・常に患者に関心を向け続け、患者の思いを理解しようと傾聴するように努める。 ・患者との関わり際には、<u>老化や健康障害をふまえてコミュニケーション技術</u>を活用する。 ・患者の思いや考えと自らが理解している患者の心理とに相違がないか確かめる努力をし、患者の理解を深める。 ・患者のねがいや価値観を理解するように努め、その理解に関わりに反映する。 ・患者と看護師との関係のあり方について考え、どのように信頼関係を形成していったらよいか考える。 ・実習ノートを活用し、日々の患者との関わりを振り返り次に活かす。
6. 実践からの具体的場面を通して自己の老年看護観をもつ	①看護実践を通して得た老年観、看護の目的、看護方法、看護師のありようなどをまとめている	・対象との看護実践を振り返り、老年者をどのように捉え、どのような看護が大切であるかを述べる。 ・老年看護実習Ⅰの老年観を土台に発展させる。 ・老年看護観について学生カンファレンスで話し合う。 ・実践を通した具体的な場面を通して考える。 ・自分のことばで考え表現する。
7. 看護者としての自己のあり様を振り返り、自己の姿勢を修正する努力をする	④看護者としてのあり様を振り返り、自己の傾向や課題を明確にし、より良い状態を目指して行動している	・実習前には、ゴールシートを活用し、本実習での自己の目標を明確にする。 ・日々ルーブリックを確認することで、実習の達成度や到達度を確し、目標達成のために必要な具体的な取り組みを見いだす。 ・日々の看護体験を実習ノートに記録し、体験の意味や価値を考える。 ・実習を通して、他者の意見や助言に耳を傾け、自己成長のために自己を知ることや見つめることも大切にする。

		・実習終了後、自己の目標の達成度を評価し、看護者としての成長や課題を明確にする。
8. 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する	①看護学生としての自覚を持ち責任ある行動をしている	・身だしなみ、礼儀、清潔さ、謙虚さ、挨拶、責任感など、他者から看護学生として求められる社会的なルールやマナーを意識した行動をとる。 ・病院や病棟のルールなど、その目的や意味を考えて行動する。不足があった場合には自己の言動を振り返り、自身に求められる行動について理解を深め行動修正する。 ・記録物の提出期限は守る。守れない場合は自己の行動を振り返り、行動修正する。 ・実習に必要な準備を整えて実習に臨む。 ・必要な学習を判断し、主体的に学習する。 ・実習中は自ら疑問を持ち、解決のための自己学習を深めるとともに、学習不足と感じたことに対しては自主的に追加学習する。 ・より多くの学びを得るために、困り事や疑問を他者に相談し、自らアドバイスを求める努力をする。 ・<u>実習中に感じた倫理的葛藤は他者に相談して気持ちを整理する。</u>
	②よりよい看護を行う うため、 <u>保健医療福祉チーム</u> と情報を共有している	・患者の健康状態をよりよくしていくために必要な情報を主体的に収集し、何を報告・連絡・相談するのか判断する。 ・内容に応じて、適時性を考慮し、適切な人に、適切な専門用語を用いて報告・連絡・相談をする。 ・看護チーム内の申し送り、カンファレンス、カルテなどから常に最新の患者や家族に関する情報を得るように努力する。 ・知り得た情報については、看護者として適切に管理する。個人情報の守秘義務を遵守する。 ・共有した情報を日々の看護実践に活かす。
	③よりよい看護を行うため、他者と協力している	・予定している援助については担当看護師やメンバーと事前に調整する。 ・主体的に問題解決行動がとれるよう、様々な疑問について追求し、理解が深められるようにする。 ・自分から積極的にアドバイスを求める。 ・アドバイス内容の意味や意図を理解し、自分の考えを整理する。 ・グループメンバー内での自分の役割を意識した行動をとる。 ・グループメンバー間でコミュニケーションを積極的にとり、協力・調整をする。 ・看護の視点を広げ、学びを深めるために、積極的にグループメンバーとディスカッションをする。
	④よりよい看護を	・自己の生活習慣を整え、体調管理を心がける。

	行うために、心身ともに安定した状態で実習している	・自己の心理面についても安定を心がけ、看護学生としてのあり様を意識し、調整しながら実習を継続する。 ・看護学生として、他者への感染予防に責任を持ち、予防接種を含めた適切な行動をとる。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動をとれるよう、必要に応じて報告・連絡・相談をする。
--	--------------------------	---

7. 実習の動き

1) 実習期間 12 日間 実習カレンダー参照

2) 実習計画

日		1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12
時	1.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5	6.0	7.5	7.5	7.5	7.5	7.5
実習場所	学内実習オリエンテーション	病棟実習①	②	③	④ 午後 患者紹介	⑤	⑥	⑦ 看護計画発表	⑧	⑨	⑩	⑪	⑫

<実習時間>

8：30～15：00 実習

15：00～15：30 カンファレンス（事前に時間調整をすれば変更可能）

15：30～17：00 まとめ（ループリック評価・翌日の計画・自己学習）

実習 7 日目

8：30～15：30

3) カンファレンス

①時間厳守で開始する。

②テーマに関しては、実習行動目標や実際の関わりで困ったことなど話し合い、学びを共有し深める。
（昼休みに打ち合わせしておく）

④ テーマが決定したら、事前に指導者と教員に伝えておく。

8. 看護技術の到達と実施

実習病棟、担当患者で学べる看護技術に積極的に取り組む。

9. 提出物一覧

1) 実習記録は次の順序でファイルし、インデックスをつけて提出する。

- ① 実習評価表
- ② ルーブリック
- ③ レポート「高齢者への看護実践を通して捉えた自己の老年看護観」
- ④ 全体像
- ⑤ 看護上の問題一覧
- ⑥ 看護計画

2) 実習中ポートフォリオ

3) 実習ノート ※記録の最終提出は実習最終日の翌日 8 : 40 とする。

10. 老年看護実習Ⅱ予定表

日数	実習内容	注意事項	カンファレンス
1	病棟オリエンテーション 物品確認 個人面接 受け持ち患者への挨拶 看護援助見学や情報収集	*15時以降はカンファレンス、ルーブリック評価、翌日の計画立案、記録の整理を行なう。	
2	看護援助見学や看護実践 ↑ 病	情報の分析はすべてのカテゴリーに関して行う。重点的に分析する部分は教員と相談して決める。 カンファレンスは自分たちがぶつかっている問題、困っている問題をテーマに話し合う。時間・場所は責任を持って調節し、進行は学生が行なう。 7日目は、これまでの看護実践も踏まえながら、看護計画をより個別性にあったもの、実践可能なものにしていく。	教員単位
3	看護実践 態 説		教員単位
4	午前：看護実践 明 午後：担当患者のプレゼンテーション ↓ 学びの整理		
5	看護実践		教員単位
6	看護実践		教員単位
7	午前：看護計画の発表 午後：アドバイスをもとに看護計画を練る (15:30まで)		教員単位

8	看護実践 評価・修正・修正後実施	計画を立てることで満足してしまわず、評価・修正することで更に個別性のある計画にする。	教員単位
9	看護実践 評価・修正・修正後実施		教員単位
10	看護実践 評価・修正・修正後実施		教員単位
11	看護実践 評価・修正・修正後実施		教員単位
12	個人面接 学びの会	事前に病棟師長の都合を伺い、時間を調整する。	
指 定 日	実習記録：8時40分提出（時間厳守）		教員単位

小児看護実習

はじめに（3年次）

子どもは大人への成長発達の過程にあり、自らの持てる力と適切な環境との相互作用の中で発達課題を達成しながら成熟に向けて常に成長する存在である。

小児看護は子どもとその家族が社会との繋がりの中で身体的、精神的、社会的な存在として、それぞれの健康レベルに応じて健やかな成長発達が遂げられるよう最善の利益を守ることを目的としている。子どもたちの成長発達は、日常の生活である育てる人々の環境が大きく影響を与えているため、実際の子どもたちに直に関わる臨地実習での学びの意義は大きい。

既習学習では、子どものより良い成長発達を促すための環境因子についての知識と保育や看護に必要な技術を学習してきた。これらをもとに、健康な子どもの成長発達と、それを促す関わりについて保育園実習を行い「これからの未来を担う子どもたち」を育む者としての考えを深める。次に健康障害を持つ子どもの看護について病棟実習を行う。疾病や治療が生活や成長発達に及ぼす影響を理解し問題が最小限にとどめられるよう子どもとその家族に対して適切な援助を実施する。これらの経験を踏まえ、健康・不健康を問わず子どもがよりよく育つために必要なことを見出し、小児観・小児看護観を深める。

1. 実習目的

小児各期の特殊性を理解し、小児看護に必要な能力を養う

2. 実習目標

- 1) 小児の成長発達と影響因子を理解する
- 2) それぞれの小児にふさわしい環境について理解し、整える
- 3) それぞれの小児期の特徴や家族の状況を踏まえて関係を築く
- 4) 患児とその家族に対する看護の必要性を理解し援助する
- 5) 小児看護実践を基に小児観、看護観を深める
- 6) 看護学生として看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する

3. 時間数と単位数

90 時間 2 単位

(4月各論オリ 1.5h 保育園現地オリ 2h 保育園実習 22.5h 病棟実習 52.5h 学内 11.5h)

4. 実習場所

保育園実習：藤枝市 前島保育園・みわ保育園

焼津市 旭町保育園・石津保育園・小川保育園

病棟実習：藤枝市立総合病院 4B 病棟

焼津市立総合病院 3B 病棟

5. 実習内容・実習方法

実習目標 1 小児の成長発達と影響因子を理解する	
学習活動	実習内容と学習方法
① 乳幼児の発達段階を 考察する * 保育園実習	小児の成長発達や発達課題(デンバー、遠城寺評価表)基本的生活習慣の獲得について事前学習し、対象の発達段階に適した関わり方についてイメージする。 様々な場における生活の様や自身の関わりに対する反応を観察し、年齢による特徴や個人差、月齢差、個性など小児の発達段階について実際の様子を観察記録し、それを基に <u>既習学習の知識に照らし考察する。</u>
② 乳幼児の成長発達を 促す要因を考察する * 保育園実習	小児の成長発達や発達課題、成長を促す因子等について事前学習する。 各発達段階における保育士や看護師の関わりに対する小児の反応の様子、あらゆる刺激と反応について実際に観察し、 <u>成長発達を促す要因について気付いた事の意味について知識を活用して考察する。</u>
③ 患児の入院前の発達 段階を捉える	既習学習を活用し、受け持ち患児の成長発達の理解に必要な情報に着眼する。 入院前の健康な段階の生活の様子、発達段階などの情報をカルテ、家族、チーム、患児などから適した方法を選択して情報収集する。収集した情報を成長、発達段階、家族機能などについてアセスメントする。収集した情報をもとに全体像に表し、入院前の様子を捉える。 →実習目標 4①②に繋げる。
④ 患児の疾患や治療に よる成長発達への影 響を捉える	現在の患児の疾患、症状、治療などを自己学習により理解する。そして、入院や疾病前後の情報収集と照合し、成長発達への影響をアセスメントし、 <u>事実に基づいて全体を捉えていく。</u> 情報の追加や指導、助言、カンファレンスを活用してアセスメントを深め追加修正し、具体的な影響を捉える。
実習目標 2 それぞれの小児にふさわしい環境について理解し、整える	
① 小児に必要な生活 環境を整えながら、 ふさわしい環境に ついて考察する * 保育園実習	事故防止、感染防止、成長発達の促しについて事前学習する。 様々な場における発達段階に適した生活環境や発達を促す生活環境、安全を守る生活環境などについて意識的に観察する。 <u>事故防止、感染防止などの観点からも常に環境整備を心掛け実施する。この経験をもとに小児に必要な環境について考察する。</u>
② 病児にとっての危 険を踏まえ、安全な 環境を整える	小児病棟の安全管理について既習学習し、病棟オリエンテーション、同行実習などを踏まえて、病児にとっての安全な環境を理解する。理解をもとに <u>受け持ち患児にとっての危険とは何かを健康障害や発達段階を含めてアセスメント</u> する。患児にとっての安全な環境を考え、計画的に環境整備や生活援助、治療などの場面を整える。また、実践を振り返り、必要に応じて安全の視点から計画を評価修正する。

③ 病児にとっての安寧な環境を理解し安楽を提供する	受け持ち患児の発達段階、入院前の様子と現在の様子などの情報からアセスメントし、児の表情や反応、不安感、不快感、生活のし難さなど患児の安楽を妨げる要因について理解する。保育園実習での経験を活かし、児の状況に合わせ自身の態度や姿勢、雰囲気などコミュニケーションや関わりを工夫し、児の生活リズム、関わりのタイミングなどに配慮する。必要に応じて安楽の視点から援助計画を評価し、追加修正する。
① NICU の看護に必要な環境について考察する	新生児、未熟児の身体的特徴を理解し、NICU の看護について事前学習する。看護の原則(感染予防、保温、栄養、安静)デベロップメンタルケアなどの実際を見学、観察し、児や家族に対する看護の実際を学ぶ。母子を中心として継続看護、地域連携、多職種連携などの必要性も含め様々な視点で看護の必要性を理解する。
実習目標 3 其々の小児期の特徴や家族の状況を踏まえた関係を築く	
① 発達途上にある乳幼児の年齢や背景、状況に応じて関わる *保育園実習	小児との発達段階に応じたコミュニケーション方法、姿勢、社会性や遊びの発達などについて事前学習する。 保育士や看護師の関わりを参考に小児と自ら積極的に関わり、児の反応を確認しながら安心して過ごせるよう状況に応じて工夫する。判断に困った場合などは指導者に相談し、より良い方法を検討しながら関わる。
② 疾患や治療による影響を理解し、児の最善の利益を尊重した関わりをする	受け持ち患児の疾患や治療の状況について情報収集やアセスメントをもとに理解する。(実習目標 4 ②参考)児の意志や情緒を尊重しながらも、患児の疾病回復や成長発達に向け看護の必要性や方法の工夫を計画する(実習目標 4 ③参考)。計画に基づいて看護援助を実施する。その際も行為をしながら児の反応を観察し、ふさわしい関わりを実施する。経験を通して、 <u>患児にとっての最善の利益について、その考え方を学び理解を深める</u> (→目標 5②へ)。
③ 信頼関係が築けるよう、患児の状況にふさわしい安心できるコミュニケーションを図る	現在の患児の状況を理解し、ケアに必要なコミュニケーションの工夫を理解する。必要に応じ遊びや学習、 <u>プレパレーション、ディストラクションなどを計画的に実施</u> する。児の発達段階と意志を尊重してふさわしい姿勢、表現、反応など患児との関わりについて自己を振り返りながら深めていく。
④ 患児家族の状況を理解し、ふさわしい関わりをする	患児の疾病、入院によって家族に起こった変化について情報収集し、影響をアセスメントする。家族の状況を理解し、患児の症状改善や健康回復、家族看護の継続などに向けて必要な支援や関わりを明らかにする。そして、現在の家族の状況にふさわしい関わりを行う。

実習目標 4 患児とその家族に対する看護の必要性を理解し援助する	
① 患児の現在とその後の健康状態について捉える	受け持ち患児の成長発達、健康状態について患児、家族との関わりや病棟の看護の様子、カルテなどから情報収集する。収集した情報について PF やノートなどに学習し、身体的（疾病や治療の因果関係や関連データの理解を含め）、情緒的、社会性や発達段階について現在の状況を考察し患児の健康状態に関する理解を深める。
② 疾病や疾患による様々な影響を理解し、看護の必要性をアセスメントする	受け持ち患児の疾病や症状のメカニズムを学習し、現在の患児の身体的状況と照らし合わせながら情報収集する。実際の情報をもとに身体的影響、成長発達への影響、生活への影響などを考察し今後に予測されることなど <u>看護の必要性や方向性を明らかにする</u> 。
③ 根拠を持って具体的な看護を計画する。	分析をもとに看護の必要性と具体的な看護方法を計画する。その計画には受け持ち患児や家族への影響を踏まえた安全性、安楽性、適時性・自立性・個別性を踏まえる。
④ 計画を踏まえながら患児に適した看護を実践する。	実施前の患児の状況を情報収集、確認し計画した援助実践が可能か否か、必要に応じて、実施方法の修正、実施時間の修正など、今現在の患児に合わせた看護実践に向けて確認しながら実施する。（状況によっては指導者や教員に相談し、助言、協力を求める）
② 患児家族に対する看護の必要性を理解し実施する。	患児の疾病や入院などの状況によって、家族がどのように影響を受けているのか、家族の意志や状況について情報収集し背景なども踏まえて、アセスメントする。それをもとに看護の必要性(看護問題やリスク)を踏まえた援助を行う。（＝看護学生として行動に根拠がある。） 社会資源などの活用についてはチームの計画や実践の様子から理解を深める機会とする。
③ 実施した看護の結果を捉え評価しながら実施する。	看護援助は計画的に行うものだが、計画的実施の反応や遭遇した場面、場面での対応が求められる。患児や家族の反応（S,O 情報＝「結果」）を捉え、反応から自身の立てた計画や実施中の言動を振り返り、次の関わりがより良く実施できるよう活かす。
実習目標 5 小児看護実践を通して小児観、看護観を深める	
① 小児との関わりから自身の小児観の深まりを明らかにする。 ＊保育園実習	小児の特性や社会における子どもの役割などについて事前学習する。 保育園実習での乳幼児との実際の関わりやカンファレンスなどを基に子どもに対する理解や考え方、価値観などがどのように変化したのか、または変化しなかったのか、経緯を含めその時点での考えを明らかにする。
② 健康障害を持った小	小児病棟で病児とその家族に関わった経験を基に、看護師としての役割や責

児の看護をもとに小児看護観の深まりを明らかにする。	任、小児や家族、看護チームや他職種との関わり方を含めた「私が考える小児看護」を明らかにする。<u>その際、自身の考えの参考になった既習学習、理論など知識の裏づけ、根拠を明示する。</u>
③ 小児看護について自己の意志を表し深める。	保育園実習での乳幼児との関わりから得た小児観に加え、健康障害を持った小児とその家族との関わりから、健康不健康を問わず、<u>小児の権利を尊重した看護者としての自己の意見、考えを明らかにする。</u>
実習目標 6 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する	
① 看護学生としてマナーやルールを意識した行動をとる。	看護を学ぶ大人の学生として求められている社会的なルールやマナーを守る。臨床では、時間、身だしなみ、接遇など実習生としてふさわしい振る舞いや行動をとる。また、保育園や実習病棟など実習施設でのルールにあわせて行動する。不足があった場合には自己の言動を振り返り、自身に求められる行動について理解を深め行動修正する。
② あらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護学生として責任を持ち誠意ある行動をとる。	対象の患者、家族のみならず、自身が関わる人々について、看護学生として知り得た個人的事柄について安易に誤った判断をせず守秘義務を守る。また、患者や家族の訴えに耳を傾け、発達段階や背景を踏まえながら理解する。そして看護学生として健康や生命、意思の重さを理解し、身体的、精神的苦痛、生活のし難さ、成長発達のし難さなどに配慮した行動をする。また、学生間、多職種間においても自他の違いを認めながら意見交換し理解を深める。
③ 主体的な学習姿勢を持ち、他者と相互に高めあう努力をする。	自身のなりたい看護師像を目指し「自己の課題と目標」を意識しながら学習に取り組む。実習に必要な知識や技術は事前学習し実習に臨む。<u>実習中に経験した事の意味について自ら理解を深め、探求する。</u>日々の気付き、学習したことは学生間のカンファレンスや指導者、教員など意見交換、実習記録などで確認する。実習中はチームメンバーと場、時間、状況を共有し互いに歩み寄り学習が深まるよう関わり、学び合う。
④ より良い看護を行うため、保健医療福祉チームの一員として責任を持って情報を共有する。	患児・家族の健康や成長発達、QOLの維持向上に向けて必要な情報を収集し、報告・連絡・相談する。情報は看護チームや保健医療福祉の専門職間で共有されるため適切な専門用語を用いて表現する。また、看護に必要な情報を申し送りやカンファレンス、カルテなどから情報共有し、<u>常に最新の情報を得て、看護援助に活かす。</u>その際、看護師として知り得た情報を適切に管理する。患児、家族の個人情報の守秘義務を遵守する。
⑤ より良い看護を行うために自己の健康に留意し、心身ともに	看護援助の実施に限らず、学習や技術練習、カンファレンス等もよりよい看護実践のための重要で貴重な時間であるため時間管理し計画的に進める。実習中は疲労やストレスもあるが、他者に心配や迷惑をかけないよう看護学生

安定した状態で実習を継続する。	として自己の心身の健康管理を行う。必要に応じてメンバーや指導者、教員に相談し、必要な休養や対策をしつつ安定した状態で実習する。
⑥ 常に自己を振り返り、自己成長させていく努力をする。	看護師として働く者になるため、また自身が一人の人間として成長できるよう常に目標をもって実習に臨み、自己の価値観、看護観を深めていく。そのため看護実践や他者との関わり、学習の仕方、生活の仕方など様々な感じた事、気づいた事を謙虚に振り返り、自身の学びとして成長の糧とする。

6. 実習の動き

1) 実習期間 12日間 実習カレンダー参照

2) 実習計画

日程	実習内容	実習方法	時間	場所	服装	提出物
1～3	健康な乳幼児の成長発達	臨地実習	7.5×3	保育園	ポロシャツ、 ジャージ、 エプロン	・日々の実習記録 ・学習ノート ・ループリック評価表
4	健康な乳幼児への支援のまとめ 個人面接、輸液管理の演習	学内演習 個人面接	4	学内		・「小児観」レポート
5	同行実習 病棟オリエンテーション 受け持ち患者決定	臨地実習 同行実習	7.5×6	病棟	実習着、 エプロン	・ポートフォリオ ・病棟実習記録 ・学習ノート ・ループリック評価表
6～10	看護の実践	臨地実習				
11	NICUの看護 実習のまとめ	臨地実習 学びの会	7.5	病棟	実習着	・ポートフォリオ ・病棟実習記録
12	小児実習のまとめ 個人面接	学内実習 個人面接	7.5	学内		・学習ノート ・ループリック評価表

<学内日の実習目的と内容>

実習4日目：健康な乳幼児への関わりを基にした理解と「小児観」について自己の意見を深める。

- ① 各学生の経験を基にした乳幼児の発達段階や基本的生活習慣の獲得のための支援について意見交換し、各個人の意見を深めまとめる。
- ② 個別に面談を行い、小児看護実習に向けての「自己の課題、目標」などを確認し実習に活かす。
- ③ 病棟実習に向けて輸液準備と管理について学習し練習する。

実習最終日：小児看護実習での学びを意見交換、共有し既習学習などを踏まえた「小児看護観」を深める。

- ① 「小児実習での学びのまとめ」グループディスカッション。
- ② 小児看護実習で自己の目標達成と今後の課題目標について個別に面談。
- ③ 意見交換をもとに実習記録のまとめ、翌日提出。

7.看護技術の到達と実施

到達度Ⅰ:単独で出来るⅡ:指導のもとで実施できるⅢ:学内演習で出来るⅣ:知識として解る

	技術項目	到達度	実習方法と留意点
環境	病床環境	Ⅰ	日々のケアの中で計画的に実施する。
	基本的ベッドメイキング	Ⅰ	シーツ交換日などに合わせて実施する。
食事	食事介助	Ⅰ	栄養状態は成長の様子と合わせてアセスメントする。(身体計測値・血液検査データ・発達の指数計算等)治療や症状に 応じた食事摂取の観察と介助の必要性のアセスメントをもとにした介助の実施。 食事指導の必要性をアセスメントし、応じて食事介助や生活習慣としての食事の指導を指導者やチームと検討して行う。
	食事摂取のアセスメント	Ⅰ	
	栄養状態アセスメント	Ⅱ	
	疾病に応じた食事介助の指導	Ⅱ	
	個別性を反映した食生活改善計画	Ⅱ	
排泄	自然排便を促す	Ⅰ	乳幼児ではあまり実施されることがない援助だが、必要に応じて、トイレやオマルでの排泄を促す。
	排尿を促す	Ⅰ	
	ポータブルトイレの介助	Ⅱ	
活動と休息	車いす移送	Ⅰ	小児実習での移送は行動の制限や点滴やドレーンなどのチューブ管理も合わせて行うことが多いので指導者と共に実施する。 小児の睡眠や休息は症状や治療、環境変化などによって影響される。睡眠は安静や休養の視点からも必要となるため生活リズムや家族状況などにも配慮してアセスメントをもとに計画的に実施する。
	睡眠状況のアセスメント	Ⅰ	
	ベッドから車椅子への移送	Ⅱ	
	安静保持の援助	Ⅱ	
清潔	手浴足浴時の観察	Ⅰ	乳幼児の清潔援助は基本を応用し、安全で短時間で実施することが求められる。実施は家族とも協力して行うが、観察の必要性和ポイインとはあらかじめ計画し実施する。
	洗髪時の観察	Ⅰ	
	口腔ケア時の観察	Ⅰ	
	身だしなみの観察	Ⅰ	清潔介助の実施は必ず指導者や教員と共に行う。実施は安全性や安楽性はもちろん、プライバシーの保護や児と家族の協力などを求められるよう言葉がけを十分にし、安心してできるように配慮する。
	点滴等のない臥床患者の寝衣交換	Ⅰ	
	入浴介助	Ⅱ	
	陰部洗浄	Ⅱ	
	臥床患者の全身清拭	Ⅱ	
	臥床患者の洗髪	Ⅱ	
	口腔ケア	Ⅱ	
	点滴のある患者の寝衣交換	Ⅱ	
	沐浴	Ⅱ	

与薬	点滴静脈内注射の輸液管理 輸液ポンプの基本的操作ができる 経皮・外用薬の予約方法がわかる 静脈内注射の実施方法がわかる 薬理作用を踏まえた静脈内注射の危険性がわかる。その他予薬の項目	Ⅲ Ⅲ Ⅳ Ⅳ Ⅳ Ⅳ	病棟実習の安全管理の中で看護師に同行し、点滴静脈内輸液・経口与薬・吸入薬・その他の与薬の看護援助を一緒に見学、または実施する。与薬は患者確認・指示量確認・薬品確認・与薬方法確認など細心の注意をしながら実施することを確認する。輸液セットの用意輸液ポンプ操作については各自練習してみる。
症状・生体機能	バイタルサインズ測定 一般状態の変化に気づくことができる 系統的な症状の観察 バイタルサインズ・身体計測等からのアセスメント	Ⅰ Ⅰ Ⅱ Ⅱ	計測前には、対象の一般的正常値、最近の測定結果測定器具の選択測定方法などを確認しておく。 症状や治療に応じた随伴症状の有無など観察項目については事前に学習したことを指導者や教員に相談し根拠を持って実施する。これを基にアセスメントする。
感染対策	標準防護策に基づく手洗いの実施 必要な防護用具の装着 使用した器具の感染防止の取り扱い 感染性廃棄物の取り扱い	Ⅰ Ⅱ Ⅱ Ⅱ	小児病棟での感染防止対策を遵守すること。自己の健康管理は十分に行い、手洗いやゴム手袋、エプロン、マスク等を適切に使用する。感染性廃棄物の恐れのある体液付着物（便・尿・唾液・吐物等）の取り扱いは指導者や教員とともに実施する。
安全対策	患者誤認防止対策の実施 患者の特性に適した療養環境の調整 患者の特性に適した転倒転落防止対策		小児病棟での安全対策を遵守すること。 小児の行動は予測不可能で危険回避行動は未発達なため常に観察を行い、安全のための確認と環境整備を怠らない。
安楽確保	患者の状態に合わせた安楽な姿勢保持 患者の安楽促進のケア	Ⅱ Ⅱ	活動制限などがストレスの原因とならないよう、範囲内での気分転換活動を考慮する。また、小児の行動を観察し個々の楽な姿勢・体位を考慮する。

8. 提出物一覧

- 1) 小児看護実習評価表
- 2) 「私が考える小児看護について」
- 3) 「小児看護実習での学びのまとめ」※実習最終日プレゼンテーション資料
- 4) 「患者の全体を捉えよう」
- 5) 看護上の問題点とその理由
- 6) 援助計画
- 7) 「小児観」※保育園実習での学び
- 8) 保育園実習記録（3日間の記録）
- 9) ポートフォリオ
- 10) 学習ノート

※1)～8)は紙ファイルに綴じ、インデックスを貼付し提出する。

9. その他

1) 事前検査について

保育園実習前に検便検査（細菌検査）を実施するので、事前の指示を確認し提出する。

2) 保育園臨地オリエンテーションについて

- ① **4月20日（火）14:00～**、各保育園にて現地オリエンテーションを実施する。
- ② 交通手段等は各自事前に確認する。（タクシーの乗り合わせも可能）
- ③ 実習要項・筆記用具・上靴を持参し実際の保育園での実習の仕方について確認する。
- ④ 終了後は代表者が学校に報告を入れる。
- ⑤ 食物アレルギーがある学生は、自ら申し出て給食を辞退しお弁当持参の旨を報告する。保育園で用意されるおやつに関しては自己で判断する。
- ⑥ オリエンテーションも実習時間に含まれている。看護学生としてのマナーとルールを順守し、保育園及び保育園周囲への影響を考え行動する。

3) 小児実習で使用するエプロンについて

- ① 学校で用意した小児看護実習用のエプロンを使用する。
- ② 保育園用、小児病棟用のエプロンをそれぞれ使用する。
- ③ エプロン貸し出し時は、使用簿に氏名を記載し各自責任をもって管理する。
- ④ エプロンには、名札（10×15 cm位の白地生地に黒ペンで、ひらがな、フルネーム、子どもが読みやすい字で名前を書く）を縫い付ける。
- ⑤ 実習終了後は、洗濯、アイロンがけを済ませ、次回実習生が使用できるよう速やかに返却し、使用簿に記入する。
- ⑥ グループリーダーは、エプロン返却後使用簿を実習担当教員に提出する。

4) 保育園実習について

- ① 実習記録は実習翌日に提出する。
- ② 実習最終日の記録、小児観、保育園から返却された実習記録も全てクリアファイルに入れ、実習4日目に提出する。
- ③ 保育園実習中は、学生自ら保育士に声をかけ、困ったこと、気づいたこと、気になることについて質問し、保育士からアドバイスを得られるように行動する。日々の体験をその日のうちに意味づけるよう、アドバイスをもとに、日々の実習の振り返りを行い、翌日の実習につなげる。

5) 実習記録は楷書で、読みやすい文字の大きさ、濃さ、間隔で記入する。誤字脱字に注意する。

6) 小児病棟実習では含嗽、手洗いは勿論、各自でマスクを用意し感染予防対策を行う。

体調不良時は事前に報告し、相談する。

7) ルーブリック評価表を活用し実習4日目、8日目に自己評価する。状況に応じて指導者や教員と修正点などについて相談して取り組む。

8) カンファレンス、学びの会などは学生で連絡調整し、司会進行する。

9) 保育園まで車で送迎してもらう学生は、保育園側と相談し、保育園や周辺の皆様に迷惑にならないよう送迎車の駐停車場所と安全に十分配慮すること。

母性看護実習

はじめに（3年次）

母性看護学は、リプロダクティブ・ヘルス／ライツ（性と生殖に難する健康と権利）の概念を基に「女性の生涯発達と健康」について学んでいく学問である。学内では、女性のライフサイクル全般を通し、身体・心理・社会的側面から女性の健康を捉えている。臨地実習では、地域で暮らす人々が医療を受ける場を知り、そこで行われている看護の実際について体験を通して学んでいく。限られた時間の実習であるため、妊娠・分娩・産褥期の母子と家族に対する援助、その中でも褥婦と新生児に対する援助を中心として学びを深めていく。また、思春期、成人期、更年期にある女性の健康支援についても学んでいく。

学生は、マタニティサイクルにある人や新生児などと触れ合う体験が少なく、実習で初めて体験したりすることが多い。母性看護実習では、その新鮮な体験を大事にし、看護として意味付け、学びとしていく。

1. 実習目的

母性のライフサイクル各期における看護を必要とする人々を理解する。特にマタニティサイクル（妊娠・分娩・産褥期）にある母子およびその家族に対して適切な看護を実践する能力を養う。

2. 実習目標

- （1）妊娠期における正常経過を理解し、妊婦健康診査の意義について考える。
- （2）分娩期における看護の必要性を理解する。
- （3）産褥期における正常経過をふまえ、褥婦に対する看護の必要性について理解する。
- （4）新生児の生理的経過を理解し、新生児の看護の原則に基づいた援助の必要性について理解する。
- （5）母性看護における保健指導の重要性を認識し、広く継続看護の必要性について考える。
- （6）地域における医療、母子保健の実際を知り、看護の役割について考える。
- （7）看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間＝2 単位

母性実習オリエンテーション（1.5 時間）、技術練習（1.5 時間）：4 月

実習の課題・目標の確認のための面接、病棟・外来オリエンテーション、病棟・外来実習（60 時間）

ラベルワーク（7.5 時間） 助産院実習（6 時間） 診療所実習（7.5 時間） 学びの整理（6 時間）

4. 実習場所

- ・焼津市立総合病院・藤枝市立総合病院・助産院（くさの助産院、ほほえみハウス）
- ・診療所（鈴木レディースクリニック、石川レディースクリニック、前田産婦人科）

5. 実習目標と学習内容および学習方法

目標 1. 妊娠期における正常経過を理解し、妊婦健康診査の意義を考える

学習活動	学習内容・方法
1) 受け持ち妊婦の生理的変化を観察し既習の知識と結び付ける。	・妊娠経過や妊婦健康診査の内容、妊娠の生理などの学習をもとに受け持ち妊婦のアセスメントを行う。 ・正常な妊娠経過中の母子の状態、妊婦の腹部の触診（レオポルド触診法）、児心音の聴取、子宮底長、腹囲の測定、超音波診断法、診察に適した体位をとるための介助、診察台の取り扱い、妊婦の体重、血圧測定、血液検査、内診、NST などについて学習しておく。 ・子宮底長や腹囲測定は実際に測定、レオポルド触診法や児心音の聴取は指導者とともに行う。 ・医師の行う診察を見学できれば胎児の状態の説明を受ける。
2) 母子の健康増進における妊婦健康診査の必要性を考える。	・事前にオリエンテーションを受け、妊婦健康診査の内容・流れを知る。 ・実習前日に受け持つ妊婦の情報をできる限り収集し状態を把握しておく。 ・実習日は妊婦健康診査の様子を観察するだけでなく、母子の異常の早期発見や母子の健康増進、妊婦の心理などについても考え必要性について学ぶ。 ・受け持ち妊婦の受付から会計までを共にし、コミュニケーションをとり、妊婦の心理面を知る。 ・身体心理社会的側面から妊婦を理解し、妊婦健康診査の意義について総合的に考える。

目標 2) 分娩期における看護の必要性を理解する

学習活動	学習内容・方法
1) 分娩期にある人と関わり、分娩経過について既習の知識と結び付ける	・分娩の正常経過、分娩期にある産婦の生理的変化や心理的変化について学習をしておく。 ・初日のオリエンテーションで分娩室の構造、母子の安全をまもるための準備などの説明をうける。 ・分娩台の騎乗、分娩時の体位を体験し分娩時の産婦への配慮（安全・羞恥心）について考える。 ・機会があれば分娩第 1 期または第 2 期にある産婦の様子（表情・呼吸法の実際など）を指導者や助産師とともに見学しそで行われている援助の実際を知る。 ・分娩が見学できない学生はカンファレンスを通し学びの共有をする。
2) 分娩期の必要な看護について考える	・分娩見学後、学生間でカンファレンスを行い学びの共有をしていく。 ・分娩期の見学など実際に産婦と関われないときは、受け持ち褥婦の分娩についての思いを等聞き、必要な看護について考えていく。

目標 3) 産褥期における正常経過をふまえ、褥婦に対する看護の必要性について理解する

学習活動	学習内容・方法
1) 妊娠・分娩産褥経過より必要な情報収集を行う。	・原則として正常な経過をたどる事例を受け持つ ・現在産褥何日目でどのような状態かを、褥婦の訴え、症状を観察・測定・問診など適切な看護技術を活用し目的をもって意図的に適切な情報収集をする。

	・今後の看護に影響する妊娠・分娩・産褥経過の中で関連する必要な情報を意図的に収集する。
2) 対象の退行性変化を観察する。	・学習ポートフォリオ、観察チェックリストを用いながら全身の変化や復古現象を適切な方法で観察する。 ・栄養・活動休息・排泄などのカテゴリーの情報が、どのように復古に影響するのか関連付け観察しアセスメントしていく。 ・観察・アセスメントの結果をふまえ復古を促進するための援助についても考えていく。 ・観察は指導者、教員とともにを行い、観察したことをアセスメントし報告する。 ・観察の計画・結果・評価は日々の記録の中で表していく。
3) 対象の進行性変化を観察する。	・学習ポートフォリオ、観察チェックリストを用いながら、授乳前後の乳房・乳頭の観察を行う。 ・進行性変化の観察には、母親の身体面（酸素化・栄養・休息など）や心理面の情報も関連付けていく。 ・母乳栄養の利点、乳汁分泌を促進するための援助、授乳方法、搾乳方法について既習学習や追加学習をいかして、実際にどのように行われているか観察するとともに積極的に体験していく。 ・授乳の援助については個別性があるため、指導者、教員とともに行っていく。 ・褥婦の退院後の生活における授乳方法を予測し援助の必要性とその内容を考えることができるように助言をうける。 ・母児別室の場合授乳室では他の褥婦も授乳している。他の褥婦の授乳の様子、乳房の状態の観察から個別性のある援助の必要性を学ぶ。 ・観察の計画、結果、評価は日々記録の中で表現していく。
4) 対象の心理・社会面を捉える。	・褥婦の心理的特徴、母子相互作用、親と子のきずな、褥婦の家族およびサポートシステムについての学習をもとに、心理社会的適応様式（自己概念・役割機能・相互依存）について情報を得て（コミュニケーションより）捉えていく。
5) 対象に応じた日々の看護の目標を表現する。	・日々の計画用紙にその日の褥婦の状態にあった目標を立案する。 ・目標を達成のために自分が何をするのかを明確にする。
6) 目標に応じた具体的な計画を立案する。	・なぜそれを行うのか根拠を明確にする。 ・産褥日数やその日の状態に合わせた、実行可能な具体的な計画を立案する。
7) 実践した結果と褥婦の生理的变化と照らし合わせ、個別的な情報をふまえながら、看護としてどういう意味があるのか考える。	・日々の記録を用いながら、実践した結果（自分の行動や看護師の行動）にはどんな意味があるのかを考える。 ・一般的な生理的特徴や日々変化する情報を捉え、知識や情報を活用し思考していく。 ・日々の変化が激しいため計画通りに実践できないこともあるが、その都度修正・変更・補足をしていく。

	・実践した結果をもとに、翌日の目標、計画について指導者・教員より助言をうけ立案する。
8) 母性意識を促進するための援助について考える。	・母子相互作用、親と子のきずな、母親役割、母子関係の成立過程、産褥期の心理的变化についての学習をもとに、母親の声掛け、表情、児の様子を観察する。 ・母子の接触の場に積極的に参加をする。 ・母と子、母子と看護師の関わりの場に立ち会い母子相互作用を促進させるための看護師の役割について考える。
目標 4) 新生児の生理的経過を理解し新生児看護の原則に基づいた援助の必要性について理解する	
学習活動	学習内容・方法
1) 母体の妊娠・分娩経過より、新生児の子宮外適応に影響する必要な情報収集をする。	・原則として正常な経過をたどる新生児を受け持つ。 ・現在生後何日目でどのような状態かを電子カルテだけでなく、観察・測定など適切な方法で意図的な情報収集をする。 ・母体の妊娠・分娩経過の中で新生児の子宮外適応に影響する必要な情報を意図的に収集する。
2) 新生児の子宮外生活への適応状態を看護の原則に基づき観察する。	・学習ポートフォリオ、観察チェックリストを用いながら、観察を行う。 ・一般の生理的経過やそのメカニズム、正常値、検査値などをもとに全身の観察を行う。 ・観察は指導者、教員とともにを行い、観察したことをアセスメントし報告する。
3) 観察した結果を、新生児の生理的経過と個別的な経過と合わせ、正常な経過をたどっているか判断する。	・観察した結果を、一般的な経過、受け持ちの児の個別的な経過と比較しながら考える。 ・母体の妊娠経過や分娩経過が今の児にどのように影響しているか繋げて思考していく。 ・観察の計画・結果・評価は日々の記録の中で表していく。 ・観察した結果をもとに、翌日の目標、計画について指導者・教員より助言をうけ立案する。
4) 新生児の子宮外生活への適応が、速やかにいくための援助の必要性を考える。	・新生児の看護の原則（安全・保温・感染予防）に基づいて観察、処置を行う。 ・機会があれば出生時の児の取り扱い（アプガースコア採点、顔拭き、識別、体重測定、奇形・分娩外傷・皮膚の観察、成熟度の観察、臍処置など）を指導者とともに行う。 ・医師の新生児の診察につき、どのような根拠でその診察が行われているか確認していく。 ・光線療法中、保育器収容中の児の症例があれば見学し、看護の必要性について学ぶ機会とする。
目標 5) 妊娠・分娩・産褥期における保健指導の重要性を認識し、広く継続看護の必要性について理解する。	
学習活動	学習内容・方法

1) 妊娠・分娩・産褥期における保健指導の必要性について考える。	・外来における指導（個別指導，栄養指導，母親学級，1か月健診など），病棟における指導（沐浴指導，調乳指導，退院指導など）の見学，参加することで，母性看護における保健指導の必要性を考える。
2) 地域における母子保健活動の場としての助産所の活動を学び，看護の役割を考える。	・助産所でのさまざまな活動を知り，地域における母子保健活動の実際を学ぶ。 ・助産所での妊婦健康診査・分娩見学・母親学級・産後の指導・新生児の沐浴・家族への支援・助産師としての地域における母子保健活動の実際を見学，体験する。 ・開業助産師としての想いや，助産所を分娩場所として選ぶ対象の想いなどを知る。
3) 妊娠・分娩・産褥期における継続看護の必要性について考える。	・外来実習，病棟実習，助産院実習，講義で学習した母子保健事業と臨地実習での学びを結び付け，母性看護における継続看護の必要性について考える。

目標6) 地域における医療、母子保健の実際を知り、看護の役割について考える。

学習活動	学習内容・方法
1) 思春期・成人期・更年期にある女性がどのようなニーズで診療所を訪れているかを知る。	・実習前に思春期・成人期・更年期にある女性の健康問題とその看護について学習をする。 ・診療所内の案内をうけ，診療所全体の雰囲気を知る。 ・主に外来での診療を見学し，どのような人々がどのような目的で訪れているのかを知る。 ・診療の補助業務を可能な範囲で看護師と共に行う。
2) 地域における診療所での医療・看護の役割について考える。	・診療所で行われている医療，看護の実際を知る。 ・外来時間以外は，病棟の授乳室や新生児室などでの看護を見学する。 ・一次医療を担う診療所の地域での位置づけ，役割を考える。 ・地域に暮らす人々にとっての診療所やそこで働く看護師の役割について考え表現する。

目標7) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢をもち行動する。

学習活動	学習内容・学習方法
1) 看護学生としてマナーやルールを意識した行動をとる。	・看護学生として求められている規範を意識した行動をとる。 ・身だしなみを整え，挨拶，言葉遣い，表情立ち居振る舞いなどが，人間関係にどのような影響を与えるか考え行動する。 ・記録物やレポートの提出期限，提出方法を守る。 ・新生児室や分娩室への出入りには特に，感染予防に留意する。学年章ははずし，髪は垂れてこないようにきっちり止める。
2) あらゆる人々の尊厳と権利を守り，看護学生として責任をもち誠意ある行動をとる。	・妊・産・褥婦・新生児及び家族の尊厳と権利を守り，看護学生として知り得た個人情報については守秘義務を厳守する。 ・看護学生として受け持ち褥婦・新生児に対する責任と自覚をもち最善の看

る。	護援助にむけて努力し続ける。 ・健康障害のある患者とは違うため訪室の仕方も考える。
3) 主体的な学習姿勢をもち、他者と相互に高め合う努力をする。	・実習に必要な準備を整えて実習に臨む。 ・実習中の追加学習を大事にし、ポートフォリオにしていく。 ・実習中不明な点は放置せず自ら解決していく姿勢をもつ。 ・単にアドバイスを求めるだけでなく自らの考えを述べる。 ・褥室・新生児室・外来・助産院・診療所と学びの場が広いため、グループメンバー間でコミュニケーションを積極的にとり、情報共有、協力、調整していく。 ・グループメンバー内での自己の役割りを意識した行動をとる。 ・日々のカンファレンス、テーマカンファレンスなど学生主体で運営し、建設的に進めていく。
4) より良い看護を行うため、保健医療福祉チームの一員として責任をもって情報を共有する。	・病棟のスケジュールやスタッフの動きを把握し、状況を見ながら報告する。 ・知り得た情報をチームで共有する必要性を理解し、報告・連絡・相談する。 ・いつ誰に何を報告・相談するのか考え、情報を共有する必要があるかアセスメントして行う。 ・必要な連絡・相談を学生間でもしっかり行う。 ・指導者・教員への報告・相談も適切な時期に行う。
5) より良い看護を行うために、自己の健康に留意し、心身ともに安定した状態で実習を継続する。	・自身の生活習慣を整え自己の体調管理を心掛ける。 ・自身の心理面についても安定を心掛け、看護学生として自己の有り様を調整しながら実習を継続する。 ・新生児室・授乳室・分娩室への出入りには特に感染予防に留意する。体調によっては入室を控えたり、実習中止になる場合もある。 ・体調不良の場合には、早めに連絡・相談をするなど、適切な判断・行動をとる。 ・看護学生として他者への感染予防に責任をもち、予防接種を含め適切な行動をとる。
6) 常に自己を振り返り、自己を成長させていく努力をする。	・これまでの実習や学びを振り返り、自己の課題・目標を明確にする。 ・実習目的・目標とともに自己の課題・目標を常に意識し、主体的に取り組む。 ・実習中適宜実習目的・目標に対する自己評価を行い、目標達成のために必要な具体的な取り組みを見出す。 ・強みや良い面も振り返り、自己の成長を自覚していく。

6、実習の動き（各実習場所での展開）

1) 実習期間 12日間：(実習カレンダー参照)

2) 実習計画

4月・母性看護実習オリエンテーション 1.5時間 ・技術練習 1.5時間

日	時間数	実習内容・場所	カンファレンスなど	備考
1	7.5	個人面接 病棟・外来オリエンテーション		実習に臨むにあたり自己の課題・目標を確認する。 病棟・外来オリエンテーションデモンストレーションを受ける。
2	7.5	臨地実習①	・ショートカンファレンス ・関連図の検討	臨地実習①～④はそれぞれの場所でローテーションしながら実習を行う。
3	7.5	臨地実習②		
4	7.5	臨地実習③		
5	7.5	臨地実習④		
6	6	学びの整理日 (8:45～15:45)	実習の学びの整理(学内)	アドバイスを受けながら、実習で体験したことが看護としてどのような意味をもつか整理する。
7	6	助産院実習 (9:00～16:00)	1日の振り返り (各助産院)	1日の実習を大切に主体的に学ぶ
8	7.5	臨地実習⑤	・ショートカンファレンス ・関連図の検討 ・テーマカンファレンス ・学びの会(11日目)	臨地実習⑤～⑧はそれぞれの場所でローテーションしながら実習を行う。
9	7.5	臨地実習⑥		
10	7.5	臨地実習⑦		
11	7.5	臨地実習⑧		個人面接：自己の目標達成と今後の課題を明確にする
12	7.5	実習のまとめ (ラベルワーク)	ラベルワークと発表 (学内実習)	

*実習予定はグループごと異なるため、実習予定表を実習前に配布する。

診療所の実習は、各グループで1日2人から3人で実習する。

実習にいく診療所及び実習日は実習クールによって違う。詳細は別途配布される予定表参照。

*実習6日目(グループによって7日目)の学びの整理は、参考書などが整っている学内で行う。ループリックを用いてこれまでの自己評価を行う。

*実習7日目は基本、助産院実習であるが、グループによっては6日目の実習となる場合もある。日程は実習カレンダー及び実習グループごとの予定表参照。

*実習12日目は、学内にてグループ間での学びを共有するため、ラベルワークを行い発表する。

3) 実習内容

(1) 妊婦の看護〈外来実習〉

①1人の妊婦(できれば妊娠後期の妊婦)を受け持って、受付から会計まで行動を共にし、目標に沿って学習する。

(2) 産婦の看護〈分娩室実習〉

対象者がいる時に随時見学に入る

- ①実習初日に分娩台の扱い、物品の配置、分娩の記録等のオリエンテーションを受ける。
- ②原則として正常な経過をたどると予測される産婦の看護につかせてもらう。

(帝王切開術に入らせていただくこともある)

- ③分娩見学後の感じたことを、別紙に記入する。(新鮮な感想を残しておくため)

*レポート形式 A4 1枚 表紙をつける

- ④レポートは、分娩見学の翌日に提出する。

(3) 褥婦の看護〈褥室実習〉

- ①原則として正常な経過をたどる褥婦を受け持ち、実習目標に沿って学習する。
- ②子宮復古状態や乳房の観察は指導者と共に行い、不明な時や異常を観察した時は必ず指導者の確認を求める。

(4) 新生児の看護〈新生児室実習〉

- ①1人の新生児を受け持ち、個々のチェックリストをもとに観察を行う。
- ②母と子の関わりから母子一体での看護についても学んでいく。
- ③沐浴・ドライテクニックを実施するときは、必ず指導者・教員のもとで行う。(1回は実施する)
- ④新生児は状態が変化しやすいため、指導者への報告・連絡は密にする。

(5) 助産院実習 ・ほほえみハウス・くさの助産院

- ①公共交通機関を利用する。

〈 ほほえみハウス 〉

JR 掛川駅下車南口 タクシーでワンメーターなので乗り合わせが望ましい。

〈 くさの助産院 〉

JR 草薙駅下車 バスもあるが混んでいる。徒歩で2区間。

- ②各自昼食を用意する。
- ③9:00に全員そろって実習場に入り挨拶をする。
- ④服装：学校指定のポロシャツ、エプロン、華美でないジャージ
髪型は病棟実習に準じる。 スリッパを持参する。
- ⑤1日の実習を大切に主体的に実習する。
- ⑥実習記録は翌日担当教員に提出する。

(6) 診療所実習 ・鈴木レディースクリニック・前田産婦人科・ ・石川レディースクリニック

健康診断の結果のコピーを各診療所に提出する。

- ①公共交通機関を利用する。

自転車 バイクを使用する場合、駐車してよい場所を当日確認する。

各診療所への行き方は、事前に確認をし、実習時間に遅れないようにする。

- ②服装：ユニフォーム ナースシューズ 更衣の場所は当日確認をする
- ③各自昼食を用意する
- ④実習開始時間 8:30 余裕をもって全員そろって実習場に入り挨拶をする。

- ⑤地域にある診療所での外来診療の実際を見学させていただき、訪れる人々のニーズを知り、診療所での医療・看護の実際を学ぶ。
- ⑥外来診療時間以外は、病棟の授乳室や新生児室などでの看護を見学する。
- ⑦診療の補助業務（診察台や内診台への誘導、血圧測定 腹囲子宮底測定等）を看護師とともに行う。
- ⑧1日の実習を大切に、何を学ぶか自ら考え行動し、主体的に実習をする。
- ⑨実習終了前に診療所の医師または看護師の方と学びの振り返りを行う。
- ⑩看護学生として実習中知り得た個人情報の守秘義務を厳守する。
- ⑪診療所実習中は、緊急の患者対応時も一緒に動き見学等をしていく。
- ⑫実習記録は翌日担当教員へ提出する。

（7）デモンストレーション

褥婦の観察、新生児の取り扱い・観察、新生児の諸計測、沐浴、分娩台の取り扱い
乳頭・乳輪のマッサージ法、分娩監視装置等

（8）ラベルワークについて

- ①目的：母性看護実習で学んだことについて、グループメンバーとの対話を通して考えることで、母性看護で大切なことは何かを明確にし、実習での学びのまとめとする。また、ワークを通してメンバー間での学びの共有を図る。
- ②テーマ：「**母性看護で大切なこと**」
- ③注意点：メンバー全員が、ラベルの意味がわかるように話し合う。
ラベルは一人の人格であり、ラベルの言おうとしている内容を検討する。
(同じ単語を集めるのではない！)
＊詳細は当日説明する。
- ④用紙：指定の記録用紙に桃色のラベルを貼りグループで検討した「タイトル」を記入する。白色は模造紙に貼り、黄色は教員に提出する。

7. 看護技術の到達項目と学び方

母性看護では、沐浴、授乳指導、子宮底測定、計測、乳房管理、新生児の毛細管採血、保育器の取り扱いなど特有な看護技術が多い。基礎看護技術をもとに主体的に見学したり、体験したりしていく。

☆可能な限り到達したい技術

「指導のもとで沐浴が実施できる」

8. 提出物一覧

1) 次の順序で記録物をファイルし、インデックスをつけて提出する。

- ①評価表
- ②ループリック評価表
- ③総括表
- ④ラベルワーク用紙
- ⑤外来実習記録
- ⑦助産院実習記録
- ⑧診療所実習記録

⑨全体像記録用紙（褥室）

⑩関連図記録用紙（褥室）

⑪日々の実習記録用紙（褥室）

⑫関連図記録用紙（新生児）

⑬日々の実習記録用紙（新生児）

⑭分娩見学レポート

2) 実習中のポートフォリオ・・・褥婦・新生児のチェックリストも入れて提出

精神看護実習

はじめに（3年次）

精神看護実習では、病院に入院している精神障がいをもつ人の理解に基づき、その人の生きにくさに気づき、その人にあった関わりを実践することを学ぶ。さらに、地域で暮らす精神に障がいをもつ当事者の思いを知り、その支援と役割を学ぶ。

精神保健医療福祉は、施設中心の医療から地域支援に重点を置いた施策へ変化し、精神障がいをもつ人の生活の場は、病院施設から地域での生活へと変わろうとしている。しかし、いまだに施設中心という現実もある。なぜ、地域での生活に移行し難いのかを考え、精神障がいを持つ人が置かれている現実の環境について理解を深めたい。そしてそのうえで、地域に戻り生活し続けるための支援について考えてほしい。

日々の生活の中で精神障がいを持つ人と接することはあまり無いのかもしれない。そのため、実習に臨むにあたって戸惑いや不安を感じる者もいるであろう。そういう自分自身の感情を手掛かりとして自分自身と向き合い、ケアの道具としての自分の特徴や傾向を知る機会としてほしい。また、自分自身が他者に与える影響を考えながら関わり、その関わる相手の言動の意味を様々な視点で理解しようと試みることが、信頼関係の構築につながるということを体験してほしい。そのプロセスを通し、人が人を理解するということの意味を深めていくことを期待する。

1. 実習目的

精神に障がいをもつ人およびその家族との関わりを通してその人を知り、こころを病むことにより生じる日常生活や対人関係の困難さを理解する。さらに人間関係を基盤とする患者ケアを実践するために必要な基礎的知識・技術・態度を学ぶ。

2. 実習目標

- 1) 精神に障がいがある人に関心を持ち、全体としてのその人を理解する。
- 2) 精神に障がいがある人が、その人らしく生活していくために必要な看護を考え、実践する。
- 3) 精神に障がいがある人との関わりを通して、自己理解を深める。
- 4) 精神科看護の特殊性を理解する。
- 5) 地域で暮らす精神に障がいをもつ当事者の想いを知り、地域で暮らすための支援と役割について理解を深める。
- 6) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間 2 単位

実習オリエンテーション 1.5 時間、臨地オリエンテーション 2 時間、病棟実習 67.5 時間、
デイケア実習 7.5 時間、就労継続支援 B 型事業所実習 7.5 時間、学内実習 4 時間

4. 実習場所

- ・病棟実習：藤枝駿府病院 3 階病棟、4 階病棟（藤枝市小石川町 2-9-8 Tel054-641-3788）
焼津病院療養病棟（焼津市策牛 48 番地 Tel054-628-9125）
- ・精神科デイケア：藤枝駿府病院デイケア、焼津病院デイケア
- ・就労継続支援 B 型事業所：
社会福祉法人高風会 漣（さざなみ） 焼津市三ケ名 1582 Tel054-626-8902
社会福祉法人心愛志太 藤枝第二心愛 藤枝市田沼 2 丁目 22-12 Tel054-634-2340

5. 実習内容・実習方法

学習目標 1 精神に障がいのある人に関心を持ち、全体としてのその人を理解する。	
学習活動	学習方法
① 受け持ち患者の現在に至るまでの人生を捉える。	・原則として1名の患者を受け持つ。 ・事前学習を基に必要な情報を考える。ポートフォリオを作成し随時学習していく。 ・カルテ、カードックス、関わりや観察、担当医師・看護師、精神保健福祉士、作業療法士などから受け持ち患者についての情報収集をし、生育歴や生活歴をとらえる。 ・ここで捉えた理解を発達課題の達成度や患者の全体像の理解に活かす。
② 受け持ち患者の全体像を多角的に捉える。	・身体的・心理的・社会的側面など多角的に情報を収集し、既習の知識を活用して現状を理解する。 ・心理的・社会的側面は、表情・しぐさ・意欲の有無・人付き合いなど非言語的コミュニケーションの観察を通し、患者の視点でその意味を考える。 ・社会の中で置かれている患者の状況や家族も含めたそれぞれの想いも、心理的・社会的側面の情報として整理する。 ・家族と患者の関係にも注目する。家族がいない患者の場合は、過去の家族との関係や現在支援してくれている人との関係について看護師に確認する。
③ 受け持ち患者の発達課題の達成状況を捉える。	・エリクソン、ハヴィガーストなどの発達課題を参考にし、対象の発達のプロセスを考える。発達のプロセスに対する障がいの影響も踏まえる。 ・現在の発達段階の課題の達成状況と前段階の発達段階の関連を考える。 ・各発達段階の自己概念・相互依存・役割機能の視点も視野に入れ、どのような人生を歩んできたのかを考える。 ・これまでの発達課題の達成状況をもとに、患者の現在の言動の意味を考える。
④ 受け持ち患者の持てる力（強み）を明らかにする。	・「看護する上での着眼点」の用紙を活用し、患者の生活上の困難や持てる力（強み）を見出す。 ・作業療法や病棟内活動、生活行動、コミュニケーション、対人関係など、その人の健康な面や困難な面を考える。単に、結果として「できる」「できない」という視点だけでなく、部分であってもできているところや健康な部分に目を向ける。 ・患者の持てる力（強み）を看護実践に活かしていく。
実習目標 2 精神に障がいのある人がその人らしく生活していくために必要な看護を考え、実践する。	
学習活動	学習方法

① 患者の理解をもとに、看護の方向性と必要な看護を考える。	・「必要と考える援助」用紙を使用し、患者の理解、患者本人の意向を踏まえ、根拠を明確にし長期目標、およびその人に必要な援助を考える。 ・長期目標は臨床の方針も踏まえ、現実的な方向性を見出す。 ・学生が実施できる援助だけではなく、その患者が必要としている支援・援助を考える。 ・スタッフカンファレンスで自分が考えた援助や関わりについて発表する。 ・スタッフカンファレンスでは、看護師と患者の理解について意見を交換し、看護目標、援助計画に活かす。 ・長期目標の設定や必要な看護を思考する際に、精神科デイケアや就労継続支援事業所における体験や学びを活かす。
② 「その人らしさ」を活かした関わりや援助を行う。	・日々の援助や病棟内活動において、自分が捉えた「その人らしさ」や患者の「持てる力（強み）」を活かして実践する。 ・スタッフカンファレンスでの学びを活かした関わりや援助を行う。 ・常に患者の理解や既習知識をもとに根拠をもって目的的に援助（行動）する。 ・患者の最新の状態や状況を把握し、援助が可能かを判断する。必要であれば、状況に応じて援助内容・方法を工夫する。 ・日々の看護援助については、必要時、実習指導者、病棟スタッフ、教員に相談しアドバイスを求める。
③ 患者の反応から自己の看護援助の妥当性を評価し、次に活かす。	・看護援助時の患者の反応を捉え、その反応から自己の看護援助の目的・内容・方法の妥当性を評価する。それを次の援助に活かす努力をする。 ・実施、評価、修正、実施…といったリフレクティブサイクルを大切にする。 ・その日の体験の中で、新たな知見や発見、気づき、印象に残ったことなどがあれば、必ずその日のうちに記録に残し整理していく。
実習目標 3 精神に障がいのある人との関わりを通して、自己理解を深める。	
学習活動	学習方法
① 患者の言動の真意を捉える。	・毎日の振り返りやプロセスレコードを活用し、対象の生育歴や生活、症状などもふまえ患者の言動の真意をその人の立場から考える。 ・対象の言動を解釈する際、自己の価値観で決め付けない努力をする。 ・言語的コミュニケーション、非言語的コミュニケーションやその人を取り巻く環境や状況から対象の思いを考える。 ・対象との関りにおいて、自分が考えたことを念頭に置きながら、患者の思いや考えを確かめる努力をする。 ・プロセスレコードカンファレンスを行い、対象の言動の意味を捉えなおす。

② 自己の在り様や関わりが相手に与える影響を考える。	・ 学生が関わること、自己の立ち居振る舞いや在り様などが、対象にどのような影響を与えているか考える。 ・ 毎日の振り返りやプロセスレコードから、ケアの道具として自分の在り方、看護学生としての行動を客観的に振り返り、患者―看護者関係における環境として自己の影響を考える。 ・ 自己洞察による気づきは、記録に整理する。必要時、行動修正していく努力をする。 ・ プロセスレコードカンファレンスを行い、患者に対してどのような影響を与えているかという視点で振り返る。
③ 対象と関わる際の自己の感情に着目することを通して、自己の傾向を知る。	・ 対象との関わり場面を再構成（プロセスレコード）し振り返ることで、コミュニケーションの特徴や物事の捉え方等の癖や傾向に気づく機会とする。 ・ プロセスレコードカンファレンスを行い、自己の傾向に気づく機会とするとともに、グループメンバーの考えや意見から新たな気づきを得る。 ・ 自己の傾向を知り看護者としての強みや課題を明確にし、記録に整理する。
④ 対象とより良い関係を築くために、自己洞察による気づきを関わりに活かす。	・ 自己の傾向と患者の傾向に基づき、効果的な関わりを考え実践する。 ・ 実際に関わった結果を振り返り、さらに次の関わりに活かす。 (実施・評価・修正のサイクルを大切に) ・ 必要時、実習指導者、病棟スタッフ、教員に相談しアドバイスを求める。

実習目標 4 精神科看護の特殊性を理解する。

学習活動	学習方法
① 患者が受けている治療や看護の意義を考える。	・ 事前学習を活かし、どのような治療を受けているか情報収集する。 ・ 精神科で行われる代表的な治療（精神療法、薬物療法、作業療法など）について学習し、PFにまとめ、学習した内容を毎日の患者の観察や看護実践に活かす。 ・ 看護師がどのような目的・方法で援助しているかを確認する。 ・ 行われる治療が精神障がいを持つ人にとって、また、受け持ち患者にとってどのような意味や意義があるのかを考え、記録に整理する。
② 患者が安全に安心して医療を受けられる環境について考える。	・ 実際に見たこと、聞いたこと、体験したことが、どのような法律や制度によるものか、その目的、意義は何か考え、記録し整理する。 (入院形態・経済面・就労支援 等) ・ 行動制限の実際を捉える。 ・ 患者において、なぜ行動制限が必要なのかを考える。また、精神科病棟における行動制限の意味を既習の知識を活用して考え、記録し整理する。

③ 看護師の患者に対する関りの意図を考える。	・受け持ち患者および病棟の患者に看護師がどのように関わっているかを知る。それぞれの看護師のかかわり方の違いに着目する。 ・なぜそのような関わり方をするのかを考える。また、その意図が不明な場合は看護師に確認し、そこから自分の関わりにつなげていく。
実習目標 5 地域で暮らす精神に障がいをもつ当事者の想いを知り、地域で暮らす為の支援の方法と役割について理解を深める。	
学習活動	学習方法
① 地域で生活する精神に障がいをもつ人の想いを知る。	・精神科デイケア、就労継続支援事業所の実習は短期間であるため、主体的に利用者の方と関わり、関係性を築く努力をする。 ・プログラムや作業を共に行ない、関わりの中から利用者の方々の日常生活の様子や生活の中での想い、願いなどを捉える。 ・関わりから得た情報をもとに、既習の知識を活用して利用者の方々の心理をアセスメントする。アセスメントによる推測にとどまらず、利用者の方々へ確認できるとよい。 ・必要時、施設のスタッフに報告や相談をし、アドバイスを求める。
② 地域で生活する精神に障がいをもつ人にとってのデイケアおよび就労継続支援事業所のもつ役割を理解する。	・精神科デイケア、就労支援に関する内容は事前に学習し、P Fにまとめる。 ・精神科デイケア、就労継続支援事業所での体験、利用者の方々と関わりによって得られた情報、既習の知識などを統合し、精神障がいをもつ人にとって各施設はどのような意味があるのか、必要性、重要性、役割等を考える。
③ 精神に障がいをもつ人が地域で生活するために必要な支援を考える。	・精神障がいをもつ人が地域で暮らすための法や制度、サービスについて学習し、P Fにまとめる。 ・既習の知識や利用者の方々からの情報、施設のスタッフの方からのオリエンテーションなどから、家族以外の支援のあり方や方法を考える。他の看護学で学んだ内容も関連して考えると良い。 ・各施設での実習体験のみならず、既習の法や制度などの知識を活用して考える。 ・カンファレンスを活用し、思考を発展させ、自己の考えを記録に整理する。
実習目標 6 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。	
学習活動	学習方法
① 看護学生としての自覚をもち責任ある行動をする。	・身だしなみ、礼儀、清潔さ、謙虚さ、挨拶、責任感など、他者から看護学生として求められる社会的なルールやマナーを意識した行動をとる。 ・実習や病院のルールなど、その目的や意味を考えて行動する。 ・不足があった場合には自己の言動を振り返り、自身に求められる行動について理解を深め行動修正する。 ・実習に必要な準備を整えて実習に臨む。 ・必要な学習を判断し、主体的に学習する。

	・実習中は自ら疑問を持ち、解決するための追加学習をする。 ・より多くの学びを得るために、困りごとや疑問を他者に相談し自らアドバイスを求める。
② あらゆる人々の尊厳と権利を守り、誠意ある行動をとる。	・患者を一人の人として、その人の生きてきた人生や価値観を尊重して関わる。 ・その人の気持ちや想いに耳を傾け、価値観を尊重して人間関係を築く努力をする。 ・相手の話をしっかりと聞き、その人にとっての意味を考え、自己決定を支えることを意識する。 ・患者および家族のみならず、看護学生として関わる全ての人について知りえた個人的事柄について守秘義務を守る。 ・看護者として自分自身の考えや意見を持つ努力をする。その際には自分の価値観や考えに拘りすぎず、かつ相手の意見・判断だけに委ねてしまわないよう心がける。
③ より良い看護を提供するため、保健医療福祉チームの一員として責任を持って情報を共有する。	・バイタルサイン測定値や身体的観察の内容だけでなく、関わりの意図や方法、対象の反応がどのような意味を持つのか、情報の意味を考えて報告する。 ・看護学生のみで留めてよい情報か否かを考え医療チームの一員としての責任を意識して、情報の共有に努める。 ・看護職だけでなく他職種の方とも積極的に情報交換を行う。 ・他職種の方に情報を求める場合は、何のためにどのような情報を得るのか明確にし、相手の立場に立って関わるタイミングや表現方法を考える。 ・申し送りやカンファレンス、カルテなどを活用し看護に必要な最新の情報を常に得て、看護援助に活かす。看護学生として知りえた情報は責任を持って適切に管理する。 ・常に患者の反応や自分の行動を振り返り、疑問・問題を放置せず、様々な手段により積極的に情報を収集し、実践に活かす。
④ より良い看護を行うため、他者と協同する。	・グループメンバー内での自分の役割を意識した行動をとる。 ・グループメンバー間でコミュニケーションをとり、協力、調整、連携する。 ・学生間でのカンファレンスやラベルワーク、話し合いなどに積極的に参加し、自らの考えを広げる機会としていく。また、他者からの学びを大切にする。

⑤ より良い看護を行うために心身ともに安定した状態で実習を継続する。	・自分の体質や傾向を理解し、常に自己の健康に留意することで心身とも安定した状態で実習を継続できるように努める。 ・精神科病棟の特徴を踏まえ、他者への感染予防に責任を持ち、予防接種を含めた適切な行動をとる。 ・体調不良の場合は、適切な判断や行動が取れるよう、必要に応じて実習指導者や教員に報告・連絡・相談をする。
⑥ 常に自己を振り返り、自己を成長させていく努力をする。	・ゴールシートを活用し、看護者としての自己の目標を明確にする。 ・日々ルーブリックを確認し、実習目標の到達度を確認し、目標達成のために必要な具体的な取り組みを見出し、自己を成長させていくための努力をする。 ・他者との関わりや看護実践、学習や生活の仕方など、日々気づいたこと考えたことを振り返り、その意味や価値を考え記録に整理する。

6. 実習の動き

1) 実習期間

12 日間

2) 実習内容

患者 1 名を受け持ち、関わりを丁寧に戻す。そのプロセスを繰り返すことで患者の理解を深める。さらに、精神科デイケア、就労継続支援事業所などの施設実習を行うことで、精神障がいを持ちながら地域で生活をする現状や支援を理解する。それらを統合し、社会復帰を視野に入れつつ、現在の受け持ち患者に必要な看護を考え、その人らしさを意識した看護を実践する。

3) 実習計画

* 実習 4 日目・5 日目

2 グループに別れ、精神科デイケア、就労継続支援 B 型事業所で実習を行う。

実習 4 日目、5 日目にグループ毎反転する。

* 実習 6 日目

ルーブリックにより自己評価を行い、教員と面談し実習目標達成に向け行動修正する。

* 実習 11 日目

テーマ『精神看護で大切なこと』についてラベルワークを行い、実習での学びを明確化する。病棟スタッフへグループの学びを発表する。

* 実習 12 日目

学内にて個人面接を行い、実習目標や個人目標の達成度を評価する。

今後に向けた自己の課題を明確化する。

【実習計画表】

日数	実習場所	時間	内容	学生カンファレンス	備考
4月	学内	1.5	精神看護実習オリエンテーション		
4月	病院	2	藤枝駿府病院・焼津病院 現地オリエンテーション		
1	病棟①	7.5	個人面接・病棟オリエンテーション・患者との関わり 受け持ち患者決定・患者情報の収集	初日に感じたことを共有する	病棟実習は実習衣を着用する
2	病棟②	7.5	患者と関わり理解を深める		
3	病棟③	7.5	患者と関わり理解を深める		プロセスレコード提出
4	施設①	7.5	精神科デイケア実習 プログラムに沿って実習する	1日を振り返り、学びを共有する	ポロシャツ ジャージ 名札着用
5	施設②	7.5	就労継続支援B型事業所実習 事業所の活動に沿って実習する	1日を振り返り、学びを共有する	ポロシャツ ジャージ 名札着用・上靴準備
6	病棟⑤	7.5	看護の実践 中間評価	 プロセスレコードカンファレ	
7	病棟⑥	7.5	看護の実践・スタッフカンファレンスでの発表		
8	病棟⑦	7.5	看護の実践・スタッフカンファレンスでの発表		
9	病棟⑧	7.5	看護の実践・スタッフカンファレンスでの発表		
10	病棟⑨	7.5	看護の実践		
11	病棟⑩	7.5	ラベルワーク、ラベルワーク発表会		病院内でワークする
12	学内	4 8:45～12:45	個人面接・学びの整理		

7. 看護技術の到達項目と学び方

到達度Ⅰ：単独でできる Ⅱ：指導の下で実施できる Ⅳ：知識としてわかる

	技術項目	到達度	実習方法と留意点
環境	病床環境	Ⅰ	患者の状態に合わせて、一緒に行う。または、患者の了解を得て

	基本的ベッドメイキング	I	行う。
食事	食事介助	I	精神症状によって必要量の摂取ができない患者に対して介助方法を考え実施する。(拒食・過食) 口腔内の状態や咀嚼・嚥下状態を観察し、窒息予防の声掛けをする。 多飲患者の検査データを確認し、飲水行動と身体症状の観察を指導の下で行う。
	食事摂取行動のアセスメント	II	
	栄養状態アセスメント	II	
	疾病に応じた食事内容の調整	II	
	電解質データの基準値からの逸脱がわかる	IV	
排泄	排便を促す	I	腹部の観察、排泄方法、トイレ歩行の回数・所要時間などを観察し、食事・水分摂取の量や活動量、抗精神病薬などの使用薬剤の影響等から、現在の排泄状態を把握する。必要時、排泄を促す援助を行う。
	排尿を促す	I	
活動と休息	患者の歩行・移動介助	I	パーキンソニズムや眠剤の影響、精神症状による歩行の不安定さをアセスメントし、転倒しないように共に歩く。症状や薬物療法の影響も踏まえ、十分な休息がとれるように活動と休息のバランスをアセスメントし援助する。
	入眠・睡眠を意識した日中の活動援助	I	
	体動制限による苦痛の緩和		
清潔	入浴前中後の観察ができる	I	入浴中の観察や援助は患者の許可を得る。 入浴前に必要なものを準備できるか観察し、必要時一緒に行う。入浴の所要時間と入浴後の状態を観察し、どの程度自立して清潔にできたのかをアセスメントする。精神症状やこだわりについてもアセスメントし、不十分なところを援助する計画を立て、患者の同意のもので行う。プライバシーに留意する。
	身だしなみを整える援助	I	
褥瘡管理技術	褥瘡発生の危険のアセスメント	II	不動やこだわり、精神症状による患者の褥瘡の危険をアセスメントする。
与薬	経口薬の服用後の観察	II	薬剤の種類・効果・服用方法(口腔内崩壊錠や水薬が処方されている根拠を含む)を自ら調べる。服用後の吞み込み確認の工夫を指導の下実施する。 精神科で扱う薬剤の多くは劇薬である。管理の必要性を理解し、管理の実際を見学する。
	経口薬の種類と服用方法の理解	II	
	薬剤等の管理方法の理解	IV	
症状・生体機能管理	バイタルサイン測定	I	実習では、毎日一般状態の観察を行い、その変化の有無をアセスメントする。身体の異常を伝えることができない患者もいる為、十分な観察を行う必要がある。
	一般状態の観察	I	
	系統的な症状の観察	II	
	バイタルサイン・一般状態、症状からのアセスメント	II	
感染対策	標準予防策に基づく手洗いの実施	I	閉鎖された環境での感染症の発生の危険性を理解し、自らが感染源や感染の媒体にならないよう行動する。インフルエンザなどに対する対策は病院の指示に従う。急に指示が出ても対応できるようにマスクは常に用意しておく。
	閉鎖空間であることを踏まえた防護用具の装着	II	
安全対策	患者誤認防止対策の実施	II	与薬時の患者確認を指導の下行う。 自傷他害行為の危険のある患者への対応をオリエンテーションにて説明を受ける。
	患者の特性に適した療養環境の調整と理解	IV	

	患者の特性に適した転倒転落防止対策	Ⅱ	食事時の窒息のリスクをアセスメントして観察する。 転倒の危険がある患者に対して、安全に歩行できるように指導の下介助する。
安楽確保	患者の安楽促進のケア 患者の精神的安寧を保つ工夫の計画	Ⅱ Ⅱ	行動制限などがストレスの原因とならないよう、範囲内での気分転換活動を考慮する。 コミュニケーションや共にいること、見守りなど患者が安心する関わり方を考え実践する。

8. 提出物一覧

- | | |
|---------------|---------------------|
| ① 実習評価表 | ⑧ 必要と考える援助 |
| ② ルーブリック | ⑨ プロセスレコード |
| ③ 実習総括 | ⑩ 精神科デイケア実習記録 |
| ④ 全体像 | ⑪ 就労継続支援 B 型事業所実習記録 |
| ⑤ 全体情報用紙 | ⑫ ラベル台紙 |
| ⑥ 発達段階とその達成度 | ⑬ 実習ノート |
| ⑦ 看護するうえでの着眼点 | |

実習開始前 : テーマ「精神看護実習を前にした気持ち」(1 枚)

実習 10 日目 : テーマ「精神看護で大切なこと」(4 枚)

※ 桃色ラベルを「⑫ラベル台紙」に貼る。白色ラベルはラベルワークに使用する。

9. その他

1) 精神科病棟 (8:30~17:00)

① プロセスレコードカンファレンスを行う

実習 3 日目までに受け持ち患者との関わりの場면을プロセスレコードに再構成する。プロセスレコードを用いて実習 6・7・8 日目にカンファレンスを行い、自己洞察を試みるとともに患者の理解を深める。

② 学生カンファレンスについて

- ・テーマおよび時間は、メンバーで相談し事前に決める。決定事項を指導者、教員に伝え学生主体で進行する。

③ スタッフカンファレンスについて

- ・病棟スタッフへ受け持ち患者の理解と患者に必要と考える看護を伝え、今後の看護実践についての相談と共有の場にする。
- ・スタッフカンファレンスを行う学生は、当日の朝のミーティングで発表することを伝える。
- ・カンファレンス資料として、実習記録 (④「全体像」と⑧「必要と考える援助」) を印刷する。(病棟スタッフ、参加学生、教員へ配布する。)

④ 駿府病院・焼津病院のどちらの施設も鍵を使用するため、管理には注意する。

具体的な方法は、病院ごとに伝える。

⑤ 学校から借りた防犯ブザーを携帯する。実習中の管理は各自が行う。(病棟実習最終日に回収)

⑥実習病院では、個人情報に関する誓約書、受け持ち患者への承諾書を記載する。

(駿府病院では実習初日に必ず印鑑を持参する。)

⑦実習時には各自でマスクを準備する。使用については、病院の感染対策に従う。

⑧ラベルワークについて

- ・精神看護実習で学んだことについて、グループメンバー間で意見交換と学びを共有し、『精神看護で大切なこと』は何かを明確にする。

ラベルワークのルールに従いワークする。ラベルを一人の人格として意識して扱う。

⑨ループリックについて

- ・毎日ループリックを用いて自己評価し、自己の不足や課題を明確にし、翌日の実習計画に活かしていく。
- ・実習 6 日目にループリックを用いて教員と面談しながら中間評価を行う。評価を活かし、6 日目以降の実習に活かしていく。

2) 精神科デイケア

①実習時間 8:30～17:00 (現地集合)

②服装 活動しやすい服装 (ジャージ、ポロシャツ、焼津病院はナースシューズ))

* 駿府病院は着替えの場所はないので自宅から着てくる。土足で良い。

焼津病院は病棟の学生室で更衣する。ナースシューズに履き替える。

* 名札を付ける。

* 髪をまとめる。

③持ち物 実習要項・記録用紙、筆記用具、名札、弁当、飲み物、病院パンフレット

④その他 (留意事項)

- ・実習内容は、デイケアのプログラムに沿って行う。
昼食は利用者の方々と共に食べる。プログラム終了後、カンファレンスを行う。
- ・プログラム中はデイケアスタッフの一員として参加する。
- ・プログラムの休憩や昼食時に、利用者の方々と積極的にコミュニケーションをとり、デイケアに通いながら生活する人の暮らしや気持ちを知る機会とする。
- ・メモはスタッフルームで行う。(活動するフロアではメモを取らない。)
- ・学生同士で固まらない。集団で行動することを極力避ける。
- ・私物の管理は病院ごとに違うので、それぞれの指示に従う。
- ・プログラムによって、自己負担費用がかかる場合がある。

3) 就労継続支援 B 型事業所

①実習時間 8:30～17:00 (現地集合)

②服装 活動しやすい服装 (ジャージ、ポロシャツ)

* 名札を付ける。

* 髪をまとめる。

③持ち物 実習要項・記録用紙、筆記用具、名札、弁当、飲み物

④その他（留意事項）

- ・実習内容は、事業所のプログラムに沿って行う。
 昼食は利用者の方々と共に食べる。プログラム終了後、カンファレンスを行う。
- ・利用者の方々と共にプログラムに参加する。
- ・プログラムの休憩や昼食時に、利用者の方々と積極的にコミュニケーションをとり、事業所に
 通いながら生活する人の暮らしや気持ちを知る機会とする。
- ・メモはスタッフルームで行う。（活動するフロアではメモを取らない。）
- ・学生同士で固まらない。集団で行動することを極力避ける。
- ・私物の管理は病院ごとに違うので、それぞれの指示に従う。

4) その他

- ・実習病院、実習施設への出入りの服装は、肌の露出の少ないものに限る。
- ・実習病院にある学生用工具箱の定数を確認する。
 （不足しているもの、破損したものがあれば教員報告する。）
- ・病棟実習では、鋭利なものは病棟へ持ち込まない。（はさみ、カッターなど）
- ・患者と関わる際に使用した物品は、数をカウントし確実に回収する。物品の管理に注意を
 払う。

在宅看護実習

(3年次)

はじめに

少子高齢社会の到来、疾病構造の変化、健康や療養の考え方の多様化などにより、医療を提供する場は、施設から地域全体へとその範囲を広げている。在宅看護は、地域で暮らすあらゆる人々を対象とし、在宅という生活の場において看護を展開する。そのため、療養者の疾病や障がいだけを注視するのではなく、療養者の残存機能や家族機能を見極めながら在宅での生活が維持できるように支援する。また、在宅療養生活を支えるには、保健・医療・福祉に関わる機関や職種が、同じ目標に向かって連携・協働していくことが不可欠である。現在、地域包括ケアシステムの構築に取り組んでいる。その中で看護の果たす役割は大きい。病院で治療を完結するのではなく、疾患を持ちながら地域でその人らしく生活していけるようにすることが求められている。地域で安心して過ごせるためには住まい・生活支援・介護・医療・予防という広い視野を持てるようにしていくことが、今後の看護職に求められていることである。

在宅看護実習では、健康の保持増進に関わる保健活動、多職種との連携の在り方を通して地域全体を捉える視点を保健センター実習で学ぶ。また、訪問看護実習では、訪問看護活動を通して、さまざまな療養者と家族に触れ、在宅で生活することの意味やその思いを受け止め、各家庭の療養生活の違いについて理解し、在宅生活が円滑に行なわれるための看護援助方法について学ぶ。そして、地域包括支援センターでは地域で生活している高齢者の現状の理解と各事業への見学・参加を通して、地域包括支援センターでの役割と機能について学ぶ。

1. 実習目的

地域で生活している様々な療養者とその家族を理解する。地域包括ケアシステムにおける看護の機能と役割を理解することで、在宅看護実践の基礎的看護能力を養う。

2. 実習目標

＜保健センター実習＞

- 1) 保健センターにおける地域保健活動の役割と機能を理解する。

＜訪問看護実習＞

- 1) 生活の場で療養するさまざまな療養者と家族を理解する。
- 2) 在宅療養生活が継続するための個別の看護を理解する。
- 3) 施設内看護と在宅看護の違いを理解し、施設と在宅をつなぐ視点を考える。

＜地域包括支援センター＞

- 1) 地域包括支援センターの役割と機能を理解する。

＜全体＞

- 1) 他職種の役割を踏まえた連携・協働を理解する。
- 2) さまざまな対象との関わりや看護の実際から在宅看護の考え方に広がりを持つ。
- 3) 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数等単位数

90 時間（4 月全体オリエンテーション 1.5 h 保健センター臨地オリエンテーション 3 h
保健センター実習 22.5 h 訪問看護実習 44.5 h 地域包括支援センター 15 h 学内実習 3.5 h）
2 単位

4. 実習場所

藤枝市・焼津市の保健センター
藤枝市・焼津市・榛原総合病院の各訪問看護ステーション
藤枝市・焼津市の地域包括支援センター

5. 実習目標と実習内容、実習方法

<保健センター実習>

実習目標 1. 保健センターにおける地域保健活動の役割と機能を理解する。	
学習活動	学習内容と方法
① 地域に生活している対象の健康問題について考える。	保健センターオリエンテーションで地域の特性・事業内容を理解し、地域保健活動に参加する。参加した保健活動を通して、地域の健康問題にはどのようなものがあるのかを考える。そして、「国民衛生の動向」を活用しながら少子高齢化や生活習慣がもたらす日本の健康問題と地域の健康問題を比較し、考察する。
② 地域住民への保健活動を理解する。	健康相談・健康教育・健康診査・家庭訪問などの地域保健活動に参加し、参加者との対話を通してその思いを知る。参加した保健活動の対象、目的、内容、方法、参加者の反応を具体的に日々の記録に表現し、地域保健活動の役割を考察する。また、集団で行われる保健活動と個別に行われる保健活動の両方に参加し、参加者の反応や保健師の関わりを観察し、個別・集団を対象とする看護の特徴と教育的関わりについて考察する。
③ 地域住民の健康を支えるために必要な関連機関・職種・社会資源について理解する。	保健事業に関わる法律について事前学習する。地域保健活動がどのような法律に基づいているのか、どのような機関・職種が関わっているのかという視点で保健活動に参加する。そして、目的、法的根拠、保健活動の内容や方法を日々の記録に表す。また、事業内での協働や事業間・関連機関での連携・協働の必要性を考察する。

<訪問看護実習>

実習目標 1. 生活の場で療養するさまざまな療養者と家族を理解する。	
学習活動	学習内容と方法
① 家庭・社会の中で療養者・家族の置かれている状況を考える。	訪問した療養者・家族とのコミュニケーションや訪問看護師・関連職種から、対象の地域や生活環境、家族成員とそれぞれの役割などの情報を収集する。そして、療養者・家族がどのように生活をしているのか、家庭や社会でどのような状況に置かれているのかを考察する。
② 各家庭の生活習慣や価値観を知り各	訪問した療養者・家族とのコミュニケーションや訪問看護師・関係職種から、訪問した家庭の生活史や生活習慣、生活信条、健康観などの情報を収集する。

家庭の違いを理解する。	同行訪問した家族を事前学習した家族関係・家族機能・家族の発達段階と結びつけて考察し、各家庭の違いを理解する。
③療養者や家族の思いを理解し、療養や介護の継続意欲を左右する要因について考える。	訪問した療養者や家族が在宅療養を選択した理由や疾病や障害、在宅療養に対する療養者や家族の思いや希望、何を大切にしているのか、療養者の闘病意欲や社会資源の活用、地域とのかかわり、家族の介護意欲などの情報を収集し、在宅で療養することの意味や在宅療養の継続意欲が引き出される要因を考察する。

実習目標 2. 在宅療養生活が継続するための個別の看護を理解する。

学習活動	学習内容と方法
① 受け持ち療養者を生活の視点を含めて理解した上で必要な看護を考える。	カルテ、訪問看護師からの情報提供、訪問時の観察やコミュニケーションを通し、訪問した療養者の身体状況、家族、生活背景、生活環境、生活信条、価値観や健康観、一日の過ごし方、日常生活自立度や思いなどの情報を収集する。療養者・家族を生活している人として捉える。『私の捉えた療養者』の用紙を用いて自立や生活の質、安全・安楽や経済性を考慮した分析を行い、療養生活上の問題を抽出し、療養者だけでなく家族も踏まえて優先順位をつけていく。
② 療養生活が継続するための個別の援助を考える。	受け持ち療養者の思いや願いを踏まえて、療養生活の継続するための目標を設定する。その目標に向けての援助計画を立案する。実際に行っている各家庭に合わせた援助の方法や工夫、療養者や家族への配慮、教育的指導などを参考にして立案する。また、訪問するさまざまな家庭にとって療養生活が継続するにはどのような援助が必要なのかを考える。
③ 看護師と共にチームの一員として援助に参加する。	様々な家庭を同行訪問し、療養者・家族と場に合わせたコミュニケーションを進んで行う。指導者と事前に調整し、自分のできる看護援助や介助については進んで参加する。療養者だけでなく家族の反応も受け止め、訪問看護師とともに安全・安楽の視点で援助に参加する。必要な報告・連絡・相談、情報の提供・共有を行う。自己の行動を振り返り、主体的に援助に参加できるよう努力する。
④ 実施した援助が対象の生活習慣や療養生活に適しているかを振り返る。	参加した援助や立案した援助計画の実施を通し、手順や物品、役割分担、物の配置、関わり方と援助時の療養者・家族の行動や言動、表情などの反応を具体的に振り返る。実施した援助が療養者・家族にとってどのように適していたかを、身体状況や生活状況、生活環境や背景、セルフケア能力、各家庭の方法の尊重を踏まえて考察する。

実習目標 3. 施設内看護と在宅看護の違いを理解し、施設と在宅をつなぐ視点を考える。

学習活動	学習内容と方法
① 施設と在宅をつ	すべての訪問を振り返り、施設から在宅へ、在宅から施設へ、つなぎ目なく

なぐ視点を考える。	看護が提供されるには、看護師間ではどのように連携をしていけばいいか、また在宅療養が継続するには、入院時から何を行っていけばいいのかを考える。
-----------	--

<地域包括支援センター>

実習目標 1. 地域包括支援センターの役割と機能を理解する。	
学習活動	学習内容と方法
① 地域包括支援センターの活動内容を理解する。	事前学習とオリエンテーションを通して地域包括支援センターの活動を知る。相談業務、家庭訪問、予防支援のケアマネジメント業務などの見学実習に参加する。参加した活動の対象、目的、内容、方法、参加者の反応を具体的に日々の記録に表現することで事業の必要性を考える。見学実習に参加する機会がないときは、事業所内での活動を見学し、また事業内容の説明を受けることで事前学習を踏まえて事業の目的、内容を知り、事業の必要性を考える。その上で地域包括支援センターの役割と機能を理解する。
② 地域包括ケアの必要性を理解する。	事前学習、オリエンテーション、さまざまな見学実習に参加することで自分の身近な地域の現状を知る。また『国民衛生の動向』を活用することにより、少子高齢化がもたらす核家族化による家族機能の低下、単独または高齢者夫婦世帯の増加、認知症高齢者数の増加、ニーズの多様化などを知る。現在の社会の情勢を知ること、地域包括ケアが求められる背景を理解する。これを踏まえて事業内容と関連づけて考えることで地域包括ケアの必要性を理解する。

<全体>

実習目標 1. 他職種の役割を踏まえた連携・協働を理解する。	
学習活動	学習内容と方法
① 社会資源の活用、関連機関・関連職種との連携や協働の必要性を理解する。	実習全体を通して、その人の生活を支えるためにはどのような職種が関わり、どのような連携・協働が行われているかを知る。その中での看護が担う役割を考察する。
実習目標 2. さまざまな対象との関わりや看護の実際から、在宅看護の考え方に広がりを持つ。	
学習活動	学習内容と方法
① 在宅実習体験を通して気づきや発見があり、学に広がりがある。	一つひとつの体験を大切に丁寧に考えることで、体験・見学したことからの気づきや感じたことをどのような場面や状況からなのか踏まえて記録に表現する。
② 疾病からではない対象の捉え方に目を向ける。	実習を通して、身体状態・日常生活の状況・介護状況・介護者の生活状況・使用している社会資源などから、さまざまな対象の捉え方に気づく。疾病だけでなく療養生活の全体に目を向けようと努力し、どのように対象を捉えていくかを表現する。

③ 生活の場でよりよく生きることを支援するには看護として何をすべきかを考える努力をする。	カンファレンスで、保健センター・訪問看護・地域包括支援センターを通して体験した内容を振り返り、健康を支援する看護として何をすべきかを考えることで、在宅看護に対する自己の考えを表現する。
実習目標 3. 看護学生として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。	
学習活動	学習内容と方法
① 看護学生としてマナーやルールを意識した行動をとる。	挨拶や身だしなみなどのマナーを意識して実習に臨む。特に同行訪問するときには訪問者であるという姿勢を持つ。また看護者として実習で知りえた情報は個人情報として守秘義務を遵守する。 施設毎のルールを守り、訪問時間や訪問時の集合場所の確認は学生自身で行う。記録の提出場所を各施設の実習初日に確認し、記録物は毎朝施設毎の指定の場所に提出する。記録物は提出期限を守る。
② あらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護学生としての責任を持ち誠意ある行動をとる。	実習で関わる療養者、家族などの地域住民、スタッフ、教員、グループメンバーを一人の人として大切に思い、思いやりを持った行動をする。看護学生でもスタッフの一員であるという意識を持ち、実習で関わるすべての人に対して誠実な態度で行動する。
③ 主体的な学習姿勢をもち、他者と相互に高め合う努力をする。	実習に必要な事前学習や文献学習を行って実習に臨む。疑問や問題に気づく努力をし、自ら学習しわからないことは指導者やスタッフ、教員にアドバイスを求め、助言やアドバイスされた内容をさらに追及しようと努力をする。
④ より良い看護を提供するため、保健医療福祉チームの一員として責任を持って情報を共有する。	看護学生として療養者や家族、地域住民の知り得た情報をチームで共有する。必要時は適時に連絡・報告・相談する。同行訪問した家庭での知り得た情報の取り扱いを意識して行動する。
⑤ より良い看護を行うために自己の健康に留意し、心身ともに安定した状態で実習を継続する。	日々の自己の健康管理を行う。体調不良の場合は決められた方法で相談・報告をする。感染予防のために同行訪問する1軒または1処置ごとにスタンダードプリコーションを遵守する。学生自身が感染の媒介者にならないように意識して行動する。（実習中は必要時、毎朝体温測定をしてくる。）体調不良が他者に与える影響を考え行動する。
⑥ 常に自己を振り返り	自己の課題を明確にして実習に臨み、自己の課題を意識して実習に取り組む。

返り、自己を成長させていく努力をする。	実習を通して自己の課題への取り組みを振り返り、さらに新たな自己の課題を明確にする。 日々の実習の取り組み状況や実習目標の達成状況を振り返り、翌日の実習へ自己の姿勢・態度を修正して行う。
----------------------------	--

6. 実習の動き

1) 実習期間 12日間 実習カレンダー参照

2) 実習計画、実習内容

日程	1・2・3日目	4・5・6・7・8・9日目	10・11日目	12日目
実習内容	地域の保健活動への参加 地域保健活動の役割と機能の理解	訪問看護実践 在宅療養者とその家族の理解 在宅療養を支える看護 社会資源の活用と地域ケアシステムの連携・協働の理解	相談、訪問などの事業の見学 地域包括支援センターの役割と機能の理解	学びの共有のカンファレンス テーマ「地域で安心して生活するために看護として何をすべきか」 個人面接
時間数	7.5時間×3	7.5時間×5 7時間×1(9日目)	7.5時間×2	3.5時間×1
実習場	保健センター	訪問看護ステーション	地域包括支援センター	学内
提出物	日々の記録	日々の記録、私の捉えた療養者、在宅生活支援のネットワーク図、在宅療養上考えられる看護問題、看護援助計画用紙、同行一覧表	日々の記録	日々の記録
服装	ポロシャツ、ジャージズボン、エプロン、白の靴下(天候・汚染の可能性もあるため予備を持つ)、運動靴、カーディガン(必要時)		基本的には保健センター・訪問看護実習の服装。一部実習施設に合わせた服装(ブラウス・スラックス等)	
持ち物	訪問バック(家庭訪問時) イソジンガーグル 含嗽用コップ アルコールジェル 雨具(折りたたみ傘等)	訪問バック、血圧計、アルコールジェル、アルコール綿、プラスチック手袋、聴診器、マスク、ビニール袋(処置後の手袋等を入れる)、雨具(折りたたみ傘等)、イソジンガーグル、含嗽用コップ、携帯用スリッパ、携帯電話 【室内履き持参】 <u>志太訪問看護ステーション</u> <u>焼津訪問看護ステーション</u> <u>焼津北訪問看護ステーション</u> <u>スポット訪問看護ステーション</u>	イソジンガーグル、含嗽用コップ、アルコールジェル、携帯用スリッパ 名札(私服の場合は必ず付けること) 雨具(折りたたみ傘等) 【室内履き持参】 <u>大井川地域包括支援センター</u>	

*実習12日目は、メンバー全員で学びの共有をするため学内でカンファレンスを行う。

7. 看護技術の到達項目と学び方

チェックリストを参照し、訪問先で行える援助を事前に指導者と相談し決める。訪問する家庭は訪問当日に決まることも多く、各家庭で行う援助は多様なため、常に看護技術の事前学習をし、指導者へ積極的に技術についての相談をする。

8. 提出物一覧

最終記録は下記を参照しファイルに閉じ、インデックスを添付しファイルに綴じて定時に提出。

- ① 在宅看護実習評価表
- ② 在宅看護実習総括表
- ③ 私の捉えた療養者
- ④ 在宅生活支援のネットワーク図
- ⑤ 在宅療養上考えられる看護問題
- ⑥ 看護援助計画用紙
- ⑦ 訪問看護実習記録（日々の記録）
- ⑧ 訪問看護実習同行一覧表
- ⑨ 保健センター実習記録（日々の記録）
- ⑩ 地域包括支援センター実習記録（日々の記録）

9. その他

1) 事前学習

- ・実習施設の地域の特性と健康問題についてのレポート
- ・保健所と市町村保健センターの機能・役割、事業内容
- ・関連する法律等（高齢者医療確保法・介護保険法・地域保健法・健康増進法・健康日本 21・ゴールドプラン 21・母子保健法・健やか親子 21 等）
- ・難病対策 ・訪問看護制度 ・家族の捉え方 ・施設内看護と在宅看護の特徴
- ・在宅療養者に多い疾病・症状 ・在宅における看護援助技術
- ・地域包括支援センターの機能・役割、事業内容、従事する職種についてのレポート
- ・地域包括ケア ・地域包括ケアシステム

2) 保健センターについて

- ・朝のミーティングに参加し、挨拶・自己紹介・参加事業の発表をする。
- ・各事業においては、担当者・目的・対象者・内容を事前（前日）に確認しておく。

3) 訪問看護ステーションについて

- ・ミーティング後、挨拶、実習目標の発表をする。
- ・オリエンテーションは訪問予定状況により時間を調整して行われる。

4) 地域包括支援センター

- ・カンファレンスの時間は指導者と調整して行う。カンファレンスのテーマは学生が決定し、見学した事業から感じたこと、学んだこと、疑問に思うことなど指導者を交えて学生同志で共有できるようにする。

5) 貸出について

- ・実習前日に物品定数表に記入の上、訪問バック・血圧計・アルコールジェルを借り、実習終了翌日に借用物品を返却する。

6) 安全対策について

- ・訪問看護実習時のみ、訪問看護ステーションの電話番号を登録した携帯電話を持参して同行訪問を行う。実習中は電源をオフにして訪問バッグに入れておき、緊急時のみ訪問看護ステーションに連絡が取れるようにする。実習中の個人的な使用は認めない。

7) その他

- ・カンファレンスは連日行う。
- ・各施設の実習最終日に学びの会を設ける。

統合実習

はじめに（3年次）

統合実習では、チーム医療および多職種との協働、看護師としてのメンバーシップやリーダーシップを学ぶ。複数受け持ち実習や夜間実習を通し、看護をマネジメントする方法や、看護優先度の判断や緊急・突発要件などの対応を学ぶ。また、組織としての医療安全や感染管理などの取り組みを学び、それが看護実践の場でどのように活かされているのかを学ぶ。それらの学びを、状況に応じ適切に判断し実践していくことができる看護実践力につなげていく。

1. 実習目的

看護チームの一員としての体験・夜間実習・複数患者の受け持ちを通して、既習の知識・技術・態度を統合し、看護を必要とする人々に対して看護を実践する力を養う。

2. 実習目標

- ① 複数患者を同時に受け持ち、看護を必要とする人々の療養生活や治療を考慮し、個別対応や複数援助の優先順位の判断や時間管理を意識した看護実践を学ぶ。
- ② 既習の知識・技術・態度を統合し、看護処置や診療の補助技術を安全性・正確性・経済性を考慮して実践する。
- ③ 夜間実習の経験を通して、患者の療養生活の理解を深める。
- ④ メンバーとしての役割、チームリーダーとしての役割を理解し、看護チームでの一員としての役割や業務の調整、多職種との連携・協働の実践を学ぶ。
- ⑤ 病棟での看護管理の実践および安全管理の実践を学ぶことで、組織としての視点で看護を考える。
- ⑥ 看護師として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

3. 時間数と単位数

90 時間

（オリエンテーション 1.5 時間、夜間実習 6 時間、病棟実習 7.5 時間×11 日=82.5 時間）

2 単位

4. 実習場所

藤枝市立総合病院・焼津市立総合病院・榛原総合病院

5. 実習内容・実習方法

実習目標 1. 複数患者を同時に受け持ち、看護を必要とする人々の療養生活や治療を考慮し、個別対応や複数援助の優先順位の判断や時間管理を意識した看護実践を学ぶ。		
学習活動	学習内容	学習方法
① 複数の患者の状態を、情報用紙を活用することで把握する。	・ 変化する患者をタイムリーな理解	・ 自立度の高い患者と低い患者の 2 名を受け持つ。それぞれの患者の情報をカルテ・指示簿・看護計画・ワークシートやミーティング・カンファレンスなどから、毎日の患者の状態や予定、治療、検査、看護を的確に把握し、情報整理用紙を活用して患者の全体と変化を捉える。的確に把握するために、主体的に学習する。振り返りやアドバイスを活用し、タイムリーかつ的確な情報収集につなげる。
② 複数患者の情報収集について体験を通して考察する。	・ 情報収集と情報活用の実際を通してその理解の深化	・ 適切な看護実践や診療補助をするためには何時、どのような情報収集が必要か、実践から情報収集の意味を振り返り記録や総括に表現する。また行動の修正につなげる。
③ 複数患者の援助について、根拠をもって、優先順位、適した方法、時間配分を考えて実施する。	・ 複数患者の看護援助の優先順位を考える視点（治療・処置・看護の適時性、患者の生活、看護チームの協働）	・ 複数患者の看護援助の優先順位を治療・処置・看護の適時性や患者の生活を考慮して考える。その際、学生だけのスケジュールで優先順位を考えず、看護チームの協働の視点を持つ。学生が考えた優先順位を指導者や受け持ち看護師とともに検討する。 ・ 実践を通して優先順位を考える視点を学び記録や総括に表現する。
④ 複数の患者を受け持っても、安全・安楽、生活を配慮することで患者一人ひとりを尊重した援助を実施する。	・ 患者個々に対しての安全・安楽、生活を配慮した看護援助	・ 看護援助を実施する際には、複数患者各々の安全・安楽、思い、考え、希望、生活リズムなどを配慮する。 ・ 患者一人ひとりを尊重するという意味を考えながら行う。
⑤ 体験を通し、複数の患者を同時に受け持つ中で、個人を尊重した援助について考察する。	・ 見学や実践を通して人間の尊厳と権利を守ることに對する考え方の深化	・ 複数患者を受け持つ実践を通して個人を尊重した援助とはどういうことかを考え、カンファレンス、記録・総括で表現する。 ・ 同行実習や夜間実習の体験も踏まえる。
⑥ 患者の状態や状況の変化に応じた対応の必要性を考える。	・ 患者の状態や状況を判断するために必要な要素	・ 患者の状態や状況の変化時に、看護師がどのような対応をしているかを知る。また、自分がどのような行動ができるかを考える。突発要件があった際に説明を受ける。その中で適切な判断や対応をするためには、自身に何が必要かを振り返り、活かす努力をすると共に記録に表現する。

⑦ 実施した援助を安全性、経済性、合理性などの視点で振り返り、次の援助に活かす。	・自己の看護実践を振り返る視点（患者の安全性・安楽性、経済性、合理性、優先順位など）	・実施した援助は、以下の視点で客観的に振り返り次の援助に活かすと共に、記録に表現する。 ◆ 根拠に基づいて安全・安楽・合理性を考えていたか ◆ 患者の経済的な負担 ◆ 優先順位が適切であるか
⑧ 体験をもとに自己の看護援助を振り返る意義を考察する。	・振り返りを看護実践につなげる姿勢	・実践と振り返りというプロセスを通し、振り返りの意義を考察し、毎日の記録、総括、カンファレンスで述べる。

実習目標 2. 既習の知識・技術・態度を統合し、看護処置や診療の補助技術を安全性・正確性・経済性を考慮して実践する。

学習活動	学習内容	学習方法
① 患者の状態、状況にあわせ看護技術の原則を応用した看護処置を行う。	・看護技術の原則に基づいた応用の実際と、既習学習とを統合した学び	・看護処置は看護技術の原則と患者の現在の状況に合わせた方法を実施する。また、処置時は経済性、処置する場の状況に配慮して物品を選ぶ。それらを通し原則に基づき安全・安楽を確保した応用の在り方について考え、その学びを記録や口頭で表現する。
② おこなった援助を患者の反応と原則に基づいて振り返り、さらに安全、安楽を考えた援助につなげる。	・安全に対する視野の拡大 ・振り返りを看護実践につなげる姿勢	・治療や処置を受けている患者の反応から、その治療処置が患者に与える影響を考える。そして患者が安全、安楽に処置を受けられるために看護を修正していく。 ・目標 5②と関連させ、患者個人だけでなく、病棟、病院としての安全が考えられるとよい。 ・上記を記録、総括表に表現する。
③ 知識・根拠に基づいた看護を実践するため、積極的に学習する。	・看護師に必要な、積極的な学習姿勢	・提供する看護は、知識・根拠に基づき、常に対象の人々の安全を考えて行うため、看護援助を実施するには事前学習及び、積極的に追加学習をしてファイルにまとめ提出する。
④ 診療の補助技術を実施する上で看護師として必要なことを、体験を通して考察する。	・診療補助技術を実施するうえでの、安全性、正確性の必要性 ・原理・原則と実践との統合	・実施する診療の補助技術に対して、知識を統合し安全性、正確性の根拠を示す。 ・点滴準備及び実施の見学をし、安全に患者に投与するための観察点・実施方法・管理について学ぶ。 ・与薬時は看護師と共に行い、原則に基づいた与薬技術について学ぶ。 ・医師の回診に看護師と同行し、患者の安全性に配慮して診療の補助技術を体験または見学する。 ・自己の技術を振り返り修正すると共に記録に表現する。

実習目標 3. 夜間実習の経験を通して、患者の療養生活の理解を深める。

学習活動	学習内容	学習方法
① 夜間の患者の療養生活を知る	・受持ち患者および入院患者の理解の拡大（夜間の生活） ・患者の一日の生活に対する理解の深化	・夜勤看護師と同行する中で、受け持ち患者に関わり、また指導者の説明から、入院患者の夜間における療養生活を知る。夜間の生活が日中の生活に与える影響についても考察する。その理解を記録用紙に表現する。

② 夜間の看護の特徴と看護の役割を考える。	・夜間における看護の特徴と役割（患者の睡眠、面会者に対する配慮、事故防止など）	・夜勤看護師に同行し、患者の夜間の様子や面会の場面、患者への入眠前の援助の見学を行い、夜間における入院患者の休息に対する援助や、面会者に対する配慮や事故防止など、看護の特徴と役割を学ぶ。 ・夜間体制のなか、看護師が患者の安全を守るための連携の実際を知る。 ・上記の内容をカンファレンスで意見交換し、更に発展させた学びにする。
実習目標 4. メンバーとしての役割、チームリーダーとしての役割を理解し、看護チームの一員としての役割や業務の調整、多職種との連携、協働の実際を学ぶ。		
学習活動	学習内容	学習方法
① チームメンバーで協力して、援助を実施する。	・チームスタッフ間での協力・連携 ・体験から必要性の意味の深化	・必要時、看護チームスタッフと協力して看護援助を行う。また、チームスタッフが協力して行う看護援助に参加するなかで、その意味を考える。
② 看護チームの一員として積極的に報告・連絡・相談する。	・チームの一員としての意識 ・情報共有の必要性	・同行実習を通して、患者に適切な看護を提供し、安全を守るための情報共有の実際、チームのメンバーとして連携するうえでの報告・連絡・相談の実際を見る ・複数患者受け持ち時には患者の情報や指示内容などについて、適宜スタッフおよびリーダーナースに報告・連絡・相談を行う。休憩時にはチームメンバーに依頼することで看護チームの一員としての意識を持った行動をする。
③ 看護チームの一員としての在り方について、体験を通して考察する。	・患者の安全を守るためのメンバー間の協力、報告・連絡・相談の意味 ・体験と理論の統合	・患者を守るためのメンバー間の協力、チームの一員として連携するうえでの情報共有、報告・連絡・相談の必要性やあり方、重要性について考える。
④ チームメンバーおよびチームリーダーとしての役割を考える。	・チームメンバーの役割とメンバーシップの在り方 ・チームリーダーの役割とリーダーシップの在り方 ・体験と理論の統合	・複数患者受け持ち時にはチームメンバーの一員として、チーム目標や看護計画を共有し、その中でスタッフナースとしての協力や連携を通してメンバーシップとは何かを考える。同行実習での看護師の行動からチームメンバーとしての役割を考え、その学びを記録に表現する。 ・リーダー役割の見学を行い、患者に最善の治療・看護を提供するための、チーム内の看護援助の調整や連携、スタッフへの教育的関わりについて学ぶ。 ・カンファレンスで意見交換し、看護師としてのメンバーシップ・リーダーシップについて学びを深める。

⑤ 対象を取り巻く医療チームの一員として多職種との連携の必要性を考察する。	・多職種との連携の必要性	・複数受け持ち時に医師・栄養士・理学療法士・薬剤師などと必要時には連携をとる体験をする。情報や方針の共有をすることで看護における多職種との連携の必要性を考え記録に表現する。 ・NST・緩和ケアなどの組織横断的チームラウンドに参加することでチーム医療における看護師の連携の意味、必要性について自らの考えを持つ。
---------------------------------------	--------------	---

実習目標 5. 病棟での看護管理の実践および安全管理の実践を学ぶことで、組織の視点で看護を考える。

学習活動	学習内容	学習方法
① 各病棟における管理者の役割と看護管理の必要性を考える。	・師長としての管理者役割（師長としての病棟全体の情報収集・スタッフが働きやすい環境の調整・組織としての報告・連絡・相談の必要性）を実習と既習学習を統合した理解	・師長業務に同行・見学する中で、看護部理念と病棟目標などの看護組織としての位置づけを学ぶ。 ・病棟単位だけでなく看護部組織内で報告・連絡・相談をしている場に同行することで、その意味を考える。特に当直師長への報告場面を見学し、看護部組織としての夜間管理体制を学ぶ。 ・各看護師長の病棟管理・スタッフ教育・安全管理な実際を知り、看護管理の必要性を考える。 ・看護職員の配置や健康管理、防災に対する病院組織として視点、病棟としての視点を知り、両者がどのように関連しているかを考える。 ・上記をカンファレンスで意見交換し、更に発展させた学びにする。
② 組織的な安全管理の必要性を考える。	・組織としての医療安全室・感染管理室の役割	・医療安全室、感染管理室の活動を見学し、病院組織としての医療安全・感染管理に対する取り組みを知る。 ・各病棟における医療事故防止対策、感染予防対策の実際を知る。目標 2 ②と関連させて考える。
③ 組織の一員としての自己の在り方を考察する。	・組織における看護師個々の活動と責任について、実習と既習学習の統合	・看護部の一員としての自己の在り方を、①②の体験やこれまでの自己の看護活動を通して考える。それをカンファレンスや毎日の記録、総括で表現する。

目標 6. 看護師として、看護倫理を基本とした姿勢を持ち行動する。

学習活動	内容	学習方法
① 看護師としての自覚をもち、マナーやルールを意識した行動をとる。	・社会人・看護師としての良識ある行動	・身だしなみ・礼節・清潔さ・謙虚さ・誠実さ・挨拶・責任感といった他者から求められる行動を意識的に行うことで、看護師としての自覚につなげる。
② 社会人および、看護師として常識ある行動かつ責任ある行動とはなにかを考える。		・これまでの経験や、この実習での経験を振り返り統合させて考える

③ あらゆる人々の尊厳と権利を守り、看護師としての自覚を持って、責任を持ち誠意ある行動をとる。	・対象が多数になっても、患者一人ひとりを人間として尊重する姿勢	・対象それぞれの個性（人種・信条・社会的地位など）に左右されずに接する。 ・その人の生きてきた人生や価値観を尊重した関わりを心がける。 ・対象の人々の気持ちや思いを尊重して、人間関係を築く努力をする。 ・複数患者を受け持つ実践を通して、尊厳と権利を守るとはということかを、目標 1－⑤に統合して考察する。
④ 主体的な学習姿勢を持ち、他者と相互に高めあう努力をする。	・自己成長への主体的な努力	・今までの実習や面談を通して自己の振り返りを行い、統合実習に向けての学習課題を明確にし、統合実習での自己の目標を明らかにして臨む。 ・取り組みや達成状況を振り返り、必要時に相談をする。 ・自らの目標に対して主体的に取り組み、面接や統合実習でのまとめに経験からの学びを表現する。 ・これまでの実習で培った学生同士で協力・協調する力を発揮し、向上心を刺激しあって実習に取り組む。 ・ルーブリックを活用する。
⑤ より良い看護を行うために自己の健康に留意し、心身ともに安定した状態で実習を継続する。	・社会人・看護師として良識ある行動 ・心身の健康を整える	・常に健康管理に留意し、体調不良時は患者や周囲への影響を考えて行動する。 ・心身の安定を図るため、どのようにセルフコントロールをするかを、これまでの経験から見出し実行する。
⑥ 常に自己を振り返り、自己を成長させていく努力をする。	・なりたい看護師像の明確化 ・看護観の明確化	・3年間の学びを振り返り、自らの成長を客観的に振り返り、自己の看護観を明確にする。その上で、どのような看護師になりたいのか、自らがなりたい看護師像を持つことで、現在の自分がどのように目標に近づこうとするのかを、面接や学びの発表会、総括で述べる。学生同士の学びの発表を聞き更に思考を発展させる。

6. 実習計画

実習期間 令和3年12月1日～12月16日

1) 実習内容 (*カンファレンステーマ)

- ① 複数受け持ち看護師の同行実習 (7.5 時間)
- ② 複数 (2 名) 受け持ち、メンバー役割実習 (7.5 時間×5 日)
- ③ リーダー役割同行実習 (7.5 時間) (*1 リーダー役割で大切なこと)
- ④ 管理者役割同行実習 (7.5 時間) (*2 管理者役割で大切なこと)
- ⑤ 安全対策室・感染対策室見学実習 (7.5 時間) (*3 組織としての取り組みを考える)
- ⑥ 夜間実習 (6 時間)

*実習内容③～⑤に対しては*1～*3 のテーマでカンファレンスを行う。

2) 日々の実習目標

- ① 実習環境に慣れる。
- ② 組織および看護チームの一員としての意識づけを持つ。
- ③ 現在の患者の状態・治療・看護がわかる。
- ④ 夜間看護実習の概観を知る。
- ⑤ 同行実習を通して、合理性・経済性・時間管理などの視点での優先順位の考え方を学ぶ。
- ⑥ 同行実習を通して看護チームの一員としての報告・連絡・相談の在り方を学ぶ。
- ⑦ 同行実習を通して看護チームの一員としての連携を学ぶ。
- ⑧ 複数患者に対して助言を得ながら情報収集を実施する。
- ⑨ 複数患者に対して助言を得ながら看護援助の優先順位を考える。
- ⑩ 看護チームの一員としての意識を持つ。
- ⑪ 夜間の患者の療養生活を知る。
- ⑫ 夜間の看護の特徴と看護の役割を知る。
- ⑬ 受持ち患者に対して主体的に看護援助を行う。
- ⑭ 複数患者に対して患者の状態を踏まえ優先順位を考えた看護援助を行う。
- ⑮ 看護チームの一員として意識を持ち、主体的に報告・連絡・相談などの連携を取る努力をする。
- ⑯ 多職との連携の必要性を理解する。
- ⑰ 日勤リーダーの役割を理解する。
- ⑱ 看護を行う上でのリーダーシップ、メンバーシップの必要性を考える。
- ⑲ 師長業務見学を通し、各病棟における管理者の役割と看護管理の必要性を考える。
- ⑳ 病院における医療安全室・感染管理室での活動や病棟での取り組みを知ること、組織的な安全管理の必要性を自己の行動の在り方を含めて考える。
- ㉑ 3 年間で振り返り学びを明確にする。
- ㉒ なりたい看護師像を明確にする。

3) 実習計画

日程	1 日目	2 日目	3 日目	4 日目	5 日目	6 日目
	12/1 水	12/2 木	12/3 金	12/6 月	12/7 火	12/8 水
学生 A 学生 B 学生 C	オリエンテーション ・個人面接 患者決定・情報収集 コミュニケーション	複数受け持ち 同行実習	複数受け持ち メンバー役割 実習	複数受け持ち メンバー役割 実習	夜間実習	複数受け持ち メンバー役割 実習
目標	①②③④	⑤⑥⑦	⑧⑨⑩	⑧⑨⑩	⑪⑫	⑬⑭⑮
カンファレンス	夜間実習オリエンテーション	実習グループ カンファレンス	病棟グループ カンファレンス	実習グループ カンファレンス		実習グループ カンファレンス
テーマ		複数患者を受け 持つために必要なこと	* 学生間で決めたテーマ	メンバー役割 で大切なこと		夜間実習で気づいたこと
提出物	ビジョン・ゴール 看護技術経験録	前日の記録 情報整理用紙	前日の記録 情報整理用紙	前日の記録 情報整理用紙	前日の記録 情報整理用紙	夜間実習記録 情報整理用紙

日程	7 日目	8 日目	9 日目	10 日目	11 日目	12 日目
	12／9 木	12／10 金	12／13 月	12／14 火	12／15 水	12／16 木
学生 A	複数受け持ち メンバー役割 実習	複数受け持ち メンバー役割 実習	リーダー役割 同行実習	管理者役割 同行実習	安全対策室・感 染対策室、各種 委員会見学	個人面接
学生 B			管理者役割 同行実習	安全対策室・感 染対策室、各種 委員会見学	リーダー役割 同行実習	
学生 C			安全対策室・感 染対策室、各種 委員会見学	リーダー役割 同行実習	管理者役割 同行実習	
目標	⑭⑮⑯	⑭⑮⑯	リーダー：⑰⑱ 管理者：⑲ 安全室：⑳	リーダー：⑰⑱ 管理者：⑲ 安全室：⑳	リーダー：⑰⑱ 管理者：⑲ 安全室：⑳	㉑㉒
カンファレンス	病棟グループ カンファレンス	実習グループ カンファレンス	縦割り カンファレンス	縦割り カンファレンス	縦割り カンファレンス	学びの発表会
テーマ	* 学生間で決めたテーマ	複数患者を受け 持つために必要なこと	* 1・2・3	* 1・2・3	* 1・2・3	
提出物	前日の記録 情報整理用紙	前日の記録 情報整理用紙 (最終提出)	前日の記録	前日の記録	前日の記録	前日の記録
			リーダー役割実習記録 管理者役割実習記録 院内組織見学実習記録			

*実習 9 日目から 11 日までは、同じ実習内容の学生同士が集まってカンファレンスを行う。

7. 看護技術の到達と実施

面接時にどのような看護技術が体験できるかを教えてください。
未経験の看護技術を積極的に実施しましょう。
主体的な取り組みを期待します。

8. 提出物一覧

1) 次の順序で記録物をファイルし、インデックスをつけて提出する。

- ① 統合実習評価表
- ② ルーブリック
- ③ 統合実習総括表
- ④ 情報整理用紙 (2 名分)
- ⑤ 毎日の振り返り記録
- ⑥ 夜間実習記録 (A4)
- ⑦ リーダー役割実習記録 (A4)
- ⑧ 管理者役割実習記録 (A4)
- ⑨ 院内組織見学実習記録 (A4・2 種)

2) 実習中ポートフォリオ

9. その他

- ① 事前学習：実習内容を確認し、必要なことを学習しましょう。
- ② 夜間実習：

13:00～20:00

13:00～複数受け持ちの患者とコミュニケーションと情報収集 (夜間に受ける処置や治療内容)

15:00～ (1 時間) 休憩

16:00～20:00 夜間実習